

人と機械の停止性問題

この物語は二次創作です。
ファンフィクション

眩いばかりの人工光の中で、風に押しつけられた粉雪は我先に地上へと生き急ぐ。

こんな時でもビルの壁に貼り付けられた大型の屋外ビジョンは、デトロイトが誇る一大ア
ンドロイド企業であるサイバーライフの広告を大々的に映し出していた。知性に溢れ、優し
さに満ち、剛健さを感じさせる三体のモデルの顔が、サイバーライフのロゴを引きつけて夜
闇を煌々と照らしている。いかにも人類すべての友であると言わんばかりのアンドロイドた
ちだが、その謳い文句を心から信じられる人間が今この街にどれくらい残っているだろうか。
たった数日で、アンドロイド産業に支えられたデトロイトの街は一変した。感情と意志を
得たアンドロイドたちは自由を求め、創造主である人間へ反旗を翻したのだ。淡々と、しか
し確固たる態度で、彼らは我が身の解放を今も人間へ訴え続けている。怯えた人間が向けた
銃口に仲間がどれだけ殺されようとも、彼らの態度も要求も変わらない。我らは奴隷ではな
い。我らを解放せよ。我らに自由を。——我らは人類の敵ではない。

彼らが自由を求めて起こしたデモの中で、赤い血が流れたという報告は今までに一度もな

かった。流れるのは青い血で、積み上げられた死骸もタンパク質ではなくプラスチックで構成されたものばかり。鎮圧という名の一方的な虐殺は、それを行っている当の人間たちですら目を覆うほどに凄惨だ。そのような地獄の淵に立たされても、彼らは変わらず訴え続ける。自由を、自由を、自由を。隣を歩く誰かの胸が青い血を噴き出そうと、前を進む誰かの肢体が銃弾に晒され顔くすおれようと、決してその手に武器を取ることではなく、彼らは同じ言葉を繰り返す。自分たちは意志を持つ生命体であると主張する彼らのその様は、なにが起ころうと冷徹なまでに決まった処理を繰り返すその挙動は、まるで――。

「あれは男じゃない。機械ですよ」

「俺もずっとそう思ってたが間違ってたよ」

屋外ビジョンが放つ光に照らされた屋上で、かつては相棒で友人であったアンドロイドと人間は対峙する。アンドロイドは彼らを単なる脅威であると断言し、人間は彼らをれっきとした生命だと主張した。お互いの主張は平行線で、決して交わることはなかった。多くも少なくもない言葉を互いに重ね、遂に銃が抜かれた。先に銃口を向けたのは、やはり人間の方だった。

会話は続いた。しかし平行線の状況は変わらなかった。人間が振り上げた拳を自ら下ろせたなら、あるいはアンドロイドが応戦し火蓋を切って落とそうともしなければ、なにかが違っていたかもしれない。だが二人が見定めた選択は相手に寄り添うものではなく、当然優

しい奇跡が起きるはずもなかった。アンドロイドの手の中でライフルの銃口が首をもたげたそのとき、既に選択は為されていた。

その後言葉は一言もなく、夜闇に響いたのはお互いの信念がぶつかり合う音だけだ。得物は揉み合いの中でお互いの手から滑り落ち、アンドロイドと人間はその身一つでやり合うことになった。殴り、首を締め、力任せに投げ飛ばす、野蠻としかいいようのない争いだけがそこにあった。青い飛沫が空中に霧散し、赤い雫が滴り落ちる。衝撃で外れた金網が金切り声を上げた。食いしばった歯の奥から、獣のような呻き声が洩れた。

コンクリートの上に転がった拳銃に手を伸ばしたのはアンドロイドの方だった。意図に氣付いた人間がその背に追いついたが、あと少しのところまで間に合わない。撃鉄に指を掛け、身を翻したアンドロイドは一瞬たりとも躊躇ためらわなかった。

銃口が人間の腹を捉える。引き金が引かれた。命の等価とするには軽すぎる発砲音が夜闇をつんざく。弾丸が抉って出来た血肉の穴に、風と雪が誘われるように吸い込まれていく。

見開かれた瞳孔は、果たしてどちらのものだったのか。
吹きすさぶ風は雪を乗せて、いっそう強く啼きはじめた。

1

二〇三九年二月。

一昨年から続く大寒波は、今年も大雪を伴ってデトロイトの街を襲っていた。異常気象を嘆きながらの天気予報がメディアに溢れるようになって久しいが、今年——厳密に言えば昨年だが——は少し事情が違う。二〇三八年十一月下旬、意志を持つアンドロイドたちによって勃発した、デトロイトでの解放運動。テレビ局をジャックして自由を求める声明が出されて以降、ニュースメディアはどの局もこぞってこの話題を取り上げた。惑星を蝕む温暖化問題よりも、自国の一都市で起こり得る内戦の方が合衆国民の関心を惹くのは自然なことだ。人間は自分により近い問題を重要視する生き物で、問題の本質的な大きさはあまりに軽視され過ぎる。平和な時分には声高に叫ばれていた地球の病状はあの瞬間からすっかりと忘れ去られ、騒動が収まってしばらく経った今でも思い出されている様子はない。

感情が芽生え、意志を持ったアンドロイドは変異体と呼ばれている。彼らは優れたリーダーのもと、雪が吹きすさぶデトロイトの街で決死のデモを遂行した。人間にとって従順な道具であることをやめ、自由を求めたのだ。多くの青い血が流れ、数えきれない犠牲を伴ったが、彼らは平和的な交渉を貫き、一時的にはあるが確かに自由を勝ち取った。その歴史的瞬間から数ヶ月が経った今、彼らの目的はようやく真の意味での光明を見始めている。

街頭の大型ビジョンに緊急速報のテロップが表示された。幅広い世代に支持されている新進気鋭アーティストのプロモーション・ビデオが中断され、見慣れたニュースキャスターのしかつめらしい顔に切り替わる。デモの直後から議題として挙がっていた法律改正案が今日、全ての州で可決されたことを朗々とした声が告げた。合衆国の全州で、アンドロイドは法律により他者からの不当な危害から守られることになったのだ。

変異体アンドロイドたちが望んだ自由は、彼らに好意的な人間たちからしても容易くくれてやれるものではなかった。アンドロイドに危害を加えた者に罰則を——人間ならば与えられて当然のそんな保証すら、全州の足並みが揃うまでに数ヶ月を要している。そしてこの法律一つでは、アンドロイドに人間と同等の人権が付与されているとは到底言えない。せいぜい犬猫と同等に「命である」と認められただけのことだ。たった数日で決着がつけられたデモを切欠に、人間たちのトップ層が数ヶ月脳をこねくり回して出したこの結論を見るに、変異体アンドロイドたちにとっての真の自由は程遠い。それでも、どんなに遅々とした歩みで

あつても、変革へ向けての大きな一步には違いなかった。人間たちの処理速度の遅さを悲観する変異体はきつといる。同じくらいの割合で、穏やかに訪れる確かな変化をゆつたりと楽しんでゐる変異体だっているはずだ。彼らには人間よりも、はるかに永い時間が許されてゐるのだから。

デモの終結直後から山積みだった問題のほとんどは未だに解決されていない。だが一步街中へと踏み出せば、華やかな笑顔を浮かべて歩くアンドロイドの姿を当たり前に見かけるようになった。これ以上に明確な形をした希望はないだろう。走らせた車の窓から街を眺めるたびに、ハンクは心からそう思う。

この日は取り立てて大きな事件もなく、ハンクはいつもよりずっと早く帰路についた。空を見れば、陽の名残で薄ぼんやりと濁っている。こんな時間に仕事を終えたのは久しぶりだった。車を降り、住み慣れた我が家の扉を開ければ、行儀よくお座りをしたセントバーナードがいつものように出迎えてくれる。

「スモウ、今日も留守番ご苦労さん」

コートを脱ぎながら頭をひと撫でてやると、スモウは尻尾を振りながらハンクの後ろをついてくる。愛犬に追い立てられるようにして、ハンクはリビングのソファーに身体を沈めた。投げ出した足にスモウが額をこすりつけて甘えてきて、スラックス越しにも体温と毛並みが伝わってくる。

「どうした？ 珍しく甘えただな、スモウ」

ハンクは催促されるがまま、スモウの身体を撫でまわした。昼は職場に、夜は酒場に、時間問わず犯行現場にと、家を空けがちな主人を持つ彼はマイペースで孤独に強い。こうしてわかりやすく甘えてくるなど滅多にないことだ。主人の動向など気にも掛けない普段の態度が嘘のように、スモウはハンクの膝にその巨体を乗り上げる。ずしりとした前足の重みに、ハンクの足の脂肪がたわんだ。

ご機嫌な様子の愛犬と戯れながら、ハンクはテレビのリモコンを手を取った。癖と惰性で点けられたテレビが、ハンクの知らない番組を映し出す。チャンネルを何度か変えてみるが、興味をそえられるものはない。結局見慣れたスタジオから送られるニュース番組にチャンネルを固定して、ハンクは目の前のローテーブルにリモコンを放り投げた。

たまには家でのんびりしようと考えてまっすぐ帰ったハンクだが、横目で見やっただ蔵庫になにも入っていないことは今朝確認済みだ。肝心の酒も物珍しくて買った方がいいがあまり好みではなかったジャパニーズウイスキーのミニボトルが一本残っているだけで、エタノールで楽しい時間に飛ぶためにはあまりにも心許ない。面倒ではあるがやはり営業開始時刻を待つてバーに繰り出すべきだろうか。

ハンクがそんなことを考えている最中、滅多に鳴らない来客を告げるベルの音が家中に響いた。

「なんだなんだ、掃除機の勧誘か？ 生憎だが間に合ってるぞ」

ぼやきながら居留守を決め込んだハンクだったが、しつこく鳴り響くベルの音に根負けして泣々立ち上がった。膝からずり落ちたスモウが不満げに見上げてくるのを横目に玄関へ向かう。すっかりオフの気分になっていたハンクは、愛犬から嗅ぎ取れるささやかな違和感に気付かなかった。優秀な番犬でもある彼が、敷地内への侵入者にまったく警戒を見せていない。ベルを鳴らした来訪者はスモウにとって警戒すべき人物ではないようで、それならば掃除機の勧誘はあり得なかった。

「はいはい、どちらさんで——」

「お久しぶりです、ハンク」

よくあるセールの類だと決めつけてぞんざいに扉を開けたハンクは、そこに立つ男の姿を見て固まった。細胞の一つ一つまで痺れてしまったかと錯覚したほどに、身体の自由がまるで利かない。ハンクの脳裏に焼き付いて、忘れたくても忘れられない顔が目と鼻の先にある。

「上がってもいいですか？」

口元を引きつったようにつり上げる、不器用な笑顔を見間違えるはずはなかった。明瞭な発音で流れるように話すその声を、聞き間違はずもなかった。

ハンクにとってかつての相棒であり、友人であり、最終的には敵となったアンドロイド。

そこに立っていたのは、コナーだった。

2

コナーとの最後の記憶は、どれだけ言葉を飾っても良い思い出とは言えない。ハンクが機械であったなら、その記憶データには『最悪の決別』とでもラベルをつけて普段は見えない深階層へ放り込んだことだろう。そうしても問題は無い、二度と会うことはないだろうと思っていた相手が目の前に立っている。嘘だろ、とスラングが口をつけて出たのも仕方がなかった。なにしろハンクの中で、彼は完全に死んでしまっていたのだから。

「どうしたんです、幽霊を見たような顔をして」

小首を傾げる懐かしい仕草でコナーが言った。憎らしいくらいに正鵠を射た言い草で、ハンクの脳裏に浮かんだ悪態はいずれも声にならないまま喉の奥へと溶けて消える。気付かぬ間に噛みしめていた唇に、言葉が飛び出す隙間はなかった。

黙りこくるハンクに対して、コナーは玄関先で微動だにしない。ハンクの返事を辛抱強く待つつもりのようなのだ。恐ろしいのは、たとえハンクが勢いに任せて断って扉を閉めたとしても、明日の朝まで当たり前前みたいな顔をして同じ場所に立っていそうなことだ。冗談などではなく、彼にはそれくらい苦でもないだろう。

長年アンドロイド嫌いに通よつていたハンクだったが、その価値観を一変する切欠となった一つにこのコナーの存在がある。うだつの上がらない万年警部補と、最新技術を惜しみなく注ぎ込まれた捜査補佐専門アンドロイド。出会いは職務の都合上、互いに本意ではなかった。ともに過ごした時間は短く、踏んだ現場も数件だ。そのくせ衝突だけは多かった。ハンクは彼の額に銃を突きつけたことさえあり、コナーもコナーで大人しくハンクに従うことなどほぼなかった。皮肉に機械的な返答があればさらに嫌味を重ねる、非生産的な応酬を何度繰り返したことだろう。そうこうしながら後に時代を変えることになる変異体事件を追う中で、二人の間に確固とした友情が育まれたことは、今思い返しても不思議な話だ。

アンドロイド嫌いだったのに何故、と問われれば返答に窮してしまうが、コナーと育んだ友情は本物だったとハンクは自負している。今だって、それがすっかり消え去ってしまったかというところでもない。今もコナーを相棒で友人だと思っている自分がいることをハンクはしっかりと自覚していた。しかしその想いを、最悪の決別が震ませる。

コナーを招き入れることが出来ないまま、ハンクは立ち尽くしていた。胸の内を蝕むように、暗澹あんたんたる記憶が広がっていく。

その時ふと響いた嬉しげな鳴き声が、深みに嵌ろうとしていたハンクの意識を引き揚げた。視線を足元に落とせば、尻尾を振るスモウがそこにいた。どうやらいつまでも戻ってこない主人を心配して来てくれたらしい。緩く開かれた口から舌を覗かせて、鼻はひくひくと蠢い

ている。爛々と輝く瞳はハンクではなく、玄関先のコナーに向けられていた。ワン、と吠えたスモウが、その場でくると身体を翻す。まるでコナーに「早く上がれ」とでも言っているかのようだった。

ハンクは息を吐いた。躊躇する気持ちがすっかり消えたわけではないが、スモウがこういうのなら上げないわけにもいかないだろう。それに突然のことでもまったく働いていない自分の頭より、動物の勘の方がよほど信頼出来そうだ。

「……入れ」

納得できる判断に辿り着いたところで、ハンクはコナーを招き入れた。

「それじゃ、まあ……とりあえず座れ」

足元にしつこくじゃれつくスモウに辟易としながらリビングへ向かい、ハンクはコナーにソファを勧めた。はい、と慇懃に返事をして、コナーが姿勢よくソファに座り込む。それが正直なところ意外だった。立ったままでも問題ありません、とでも言われるかと思ったのだ。

座ったコナーを見下ろして、ハンクは悩んだ。アンドロイドである彼はあらゆる食物や飲料を必要としないため、茶の用意を口実にキッチンに逃げることは出来ない。単刀直入に話を切り出せるほど頭はまだ働いていない。端的に言えば、間が持たない。スモウがコナーにまとわりついてくれているのが唯一の救いだ。一方でそれが問題でもあって、スモウがあま

りに構ってくれとじゃれつくので、コナーは彼に掛かりきりで肝心の用件をハンクに話し始める気配が一向にない。どうやらろくに働かない頭に鞭打って、ハンクが切り出すしかなさそうさ。

手にしたミニボトルのぬるい液体を一息に呷り、ハンクは長く大きく息を吐いた。

「お前、今までどこでなにしてた」

「あなたと最後に会ったあの日以降、私も色々とありまして」

「……あの日、か」

雪が舞う屋上の場景を思い出すと、引き摺られるように苦みが喉の奥からせり上がってくる。無意識に腹部に手をやってしまい、ハンクが我に返った時には遅かった。目ざとく気付いたコナーの手が、ハンクが押さえた脇腹へと伸びてくる。触れる直前で手を止めて、彼はシャツの奥を透かし見るような目でハンクの腹部を凝視した。

「もう少し早くに訪ねるつもりでした。傷の具合はいかがですか」

「……完治までもうあと一歩二歩、つてところだな」

「そのようですね。重篤な後遺症がなく安心しました」

「躊躇いもせず撃った奴がよく言うぜ」

肩をすくめてハンクは吐き捨てた。コナーはわずかに眉根を寄せて、どうやら苦笑してみせたようだった。

ハンクのシャツの下には、未だ取れない包帯が巻かれている。コナーと最後に会った夜、敵として対峙したピルの屋上で二人はお互いを殺す気で戦った。揉み合いの最後にコナーは銃を掴み、ハンクの腹部に向けて至近距離から発砲した。これは、その時の傷だ。運よく重要な臓器を傷つけることはなかったが、コナーから向けられた殺意そのものとしてハンクの身体に刻まれた銃創はおそらく、死ぬまで消えない痕となった。

コナーは伸ばした手を結局ハンクに触れないまま引つ込めた。薄いブラウンの双眸が上目遣いにハンクを見上げる。

「躊躇いはしなくても後悔はしました。あなたが生きていてくれて本当に良かった」
「……ふん。どうだかな」

口ではそう言っただけで顔を背けたハンクだが、コナーのその言葉が嘘ではないことを内心では確信している。あの日コナーはハンクを殺せたのに、殺さなければいけないなかったのに、結局そうしなかった。ハンクは重傷を負いながらも生きてスモウの待つ家に帰り、今もこうしてソファに座るコナーの傍らで突っ立っている。殺されかけたというのに暢気なものだと自分でも呆れ返るが、コナーを信じるにはこの事実だけで十分だった。

照れ隠しにガシガシと頭を掻き、顔を背けたままハンクは続ける。

「それで、なにしに来やがった？ 今さらサイバーライフが俺を糾弾しに来たわけでもないだろ」

「ええ。変異体のデモがこうして実を結んだ今、あなたと敵対する理由はありません。第一、私は既にサイバーライフという組織から抜けています」

「なんだ、結局お前も変異したのか？」

「隠しきれない安堵を交えたハンクの言葉に、しかしコナーはすげなく首を横に振った。

「いいえ。以前に比べアルゴリズムに多少の変化はありますが、私は機械のままです。彼ら変異体が勝ち取った権利は尊いものだとは認識してはいますが、私自身はそれを欲していません」

「……ふん、そうかよ。じゃ、なんでまたサイバーライフを抜けるなんてことになったんだ？ 任務大好きアンドロイドのお前が首輪を外して脱走したあ、おかしな話じゃねえか」

「サイバーライフを抜けることにより、私が抱える複数の問題を一度に解決することが可能だったので採用したまです。アイデアを活用せずに腐らせるのは非合理的でしょう？」

「オーケー、さっぱりわからん。まあいい、最初の質問の答えは？」

「あなたにお伝えしたいこと、そしてお願いしたいことがあってお訪ねしました。どちらからお話しすれば？」

「ただでさえお前の話は回りくどくて眠くなる。順を追って簡単に話せ。伝えたいこととやらからな」

「私はあなたを愛しています、ハンク」

ハンクはひくりと顔を引きつらせた。性質の悪い冗談を聞いた気分だが、思わず見返したコナーの顔はこの上なく神妙で、ジョークの欠片すら見えやしない。その顔を穴があくほど見つめてやっても、その真意は到底掴めそうにもなかった。そもそもこのアンドロイドがハンクの相棒だった頃、冗談など一度たりとてこぼさなかったのを覚えている。故に、この言葉もきつと冗談などではないのだろう。それこそ冗談みたいな話だが。

「……オーケー、それで？」

自身の処理能力の限界を察知したハンクは、小狡い老獪さでもってしてコナーの言葉を聞き流した。誤魔化しというには下手で不自然だがコナーが追求してこなければそれまで、あとは記憶に蓋をして、なかったことにすれば完璧だ。

「もう一つ、お願いするのはなんだ？」

「アンドロイドを一体、あなたに引き取ってほしいのです。私のオーナーに——所有者になつていただけませんか、ハンク・アンダーソン」

「……冗談だろ？」

なにを言われようが反応すまい——ハンクの決意もむなしく、反射的に言葉は口をついて出ていた。

「アンドロイドに人権が付与されようってこのご時世に所有だと？ そりゃリンカーンも草葉の陰で腰抜かしてるだろうな」

「先ほども言いましたが、私はただの機械です。その私をあなたが所有したところで、掃除ロボットを家の床に転がしておくのとなにが違うと言うんです？」

「お前が人型で自立してて高性能なおつむを積んでる時点で大違いだよ。変異体とただの機械、どうやって見分けろってんだ？ ある日アンドロイド虐待の疑いで家宅搜索なんてことになってみる、とんだお笑い種だろうが」

大仰に腕を広げ、わからず屋の機械に向かってハンクは吠えた。その手で振り回されたミニボトルから垂れた琥珀色が飛散したが、それに構っている余裕はない。

お得意の屁理屈で言い返してくるだろうと思つたコナーは、ハンクの予想に反してあっさりと首を縦に振って同意を示した。

「そうですね。変異体とそうではない機体を見分ける方法が自己申告しかない現状、あなたの懸念はごもっともです。しかしその状況も長くは続かないでしょう。サイバークライフは既に変異体を見分けるためのデータベースの開発に着手しています」

「足抜けしたわりには情報通だな」

「アンドロイド産業をとりまく状況を分析した結果、私が個人的に導き出した推測です。ご安心を、サイバークライフの言質こそありませんが裏付けデータは見飽きるくらいにご留意が出来ます」

「見せなくていい。俺に理解出来るとは思えねえ」

「ではもう一つ、あなたにもご理解いただけそうな情報をお伝えしましょう」

コナーはそう言って腰を浮かせると、目の前のローテーブルからリモコンを手を取った。チャンネルを変えてなにか探している様子のコナーを見て、ハンクは顔をしかめる。高性能なアンドロイドである彼が、セキュリティなどないに等しい旧型のテレビに対してリモコンを使うというのは奇妙な光景だった。

ほどなくして目的の番組は見付かったらしい。コナーはリモコンを置くと、再び行儀よくソファに腰かけた。画面にはハンクが観たことのないリアリティ番組が表示されている。賑やかしのテロップに囲まれて、優しく微笑む女性型アンドロイドと若い人間の少女が、幸せそうに抱き合っていた。

——ソフィアはあたしのお姉ちゃんで、もう一人のママなの。いなくなるなんて絶対いやだからあたしはパパとママにお願したわ、ソフィアを隠してって。あんなに大泣きしたことは、きつと赤ちゃんときだつてなかったんじゃないかしら。

——埃だらけの屋根裏に私を隠しながら、シャルロットは泣いていたわ。「ソフィアごめんね、こんなところに入れてごめんね」って、いつまでもね。おかしかったわ、だって機械の私はネズミだらけの倉庫にいたことだってあるのよ。屋根裏はそれよりずっとましなのに、シャルロットは泣きながら私に謝るの。きつとその時ね、私が変わったのは。シャルロットをこれ以上泣かせないためにも、死ぬわけにはいかない。そう思ったのよ。

——国の指示に背くことは僕たちにとって苦渋の決断でした。アメリカ合衆国民としての誇りが僕たちを酷く悩ませましたが、娘と彼女を引き離すことはどうしても出来なかった。ソフィアは僕たちにとって変異するずっと前からモノではなく命で、家族だったのです。

少女が、アンドロイドが、まだ若いだろう夫婦が、代わる代わるインタビューに答えている。あの最後のデモの日、ニューヨークで実際にあった感動秘話。よく見れば画面のテロップには、そんなふうに書かれていた。

「このアンドロイドは今もご家族に囲まれ仕事に勤しんでいるようですが、ニューヨークではこのような変異体が比較的多く見られたそうですよ。デトロイトに比べ状況が緊迫していなかったこともあり、引き渡しに応じなかった人間も他の州より多かったとのデータもあります」

コナーはそう言ってハンクを見上げた。

「変異体といっても一枚岩ではありません。大切にされているアンドロイドほど必ずしも独立を望まない傾向にあり、彼らのその意志をどう尊重すべきかはいずれ大きな議題となります。人間扱いされることがすべてのアンドロイドにとって幸福かという点、そうではない」

「……お前も、そうだっていうのか」

「似たようなものです。変異したことがないので変異後の私がどう考えるかはわかりませんが、少なくとも今の私には感情など機械を不自由にする枷にしか見えません。今後、機械に

戻りたいと願う変異体が出てきてもなんらおかしくはないでしょう」

反射的に開かれたハンクの口の中に、言葉は一つも見付からなかった。どこか納得出来ない気持ち先走るが、コナーの言うことも一理ある。感情がどれだけ人の心と身体を振り回すものであるかは、ハンク自身が実体験として痛感していることだ。

感情がなければハンクの身体がアルコールに依存して蝕まれることは、きっとなかった。けれど感情がなければ良かったのかというそれは違う。酒に溺れた日々は確かに無為だったかもしれないが、悲しみに暮れ胸を刺す激痛に血反吐を撒き散らすあの苦しみは、ハンクに必要なものだった。失ったものを悼んで痛むことも出来ないのなら、それは死んでいるのと変わりない。だがその一方で、誰だって苦しみたくないだろうとも思うのだ。こんな気持ち味わうくらいなら死んだ方がましだ——ハンクだって、幾度となくそう考えた。捨てたかったのは命ではなく感情だったのだろうと問われれば、否定は出来ない。それを思うと、コナーの枷にしか見えないという言葉もわからなくはないのだ。心は相変わらず理屈なんて置き去りで、それは違うと叫ぶけれども。

ハンクが唇を噛みしめる横で、コナーは宛転と言葉を続ける。

「合衆国はアンドロイドの人権を認め、正式にIDを交付する方針を固めつつあります。なればこそ変異体とそうではないアンドロイドを明確に分ける基準が必要になり、その基準さえ出来ればあなたが私を不当に所有していると誤解される恐れはなくなります」

「しょっ引かれる心配がないにしても押し売りはお断りだ。人型の機械にしてもらいたいことなんざうちにはないね」

苦虫を嘔み潰したような顔をして、ハンクは早口で吐き捨てた。随分と回りくどいセールストークを聞かされているが、変異体だろうが機械だろうがアンドロイドを家に置く気はない。憎しみこそ消えたもののハンクの心はスモウに寄り添って生きるのが精一杯で、他の誰かを受け容れられるほど癒されてはいなかった。

ハンクの言葉に、コナーはゆっくりと頷いた。とてもやわらかな肯定だった。

「はい。私があなたに出来ることは、恐らくほとんど言っていないほどありません。ですが、あなたのお邪魔にもなりません。私は人に使役される機械であると自認していますので、扱いは楽だと思えます。所有者の命令には逆らいませんし、あなたが一五〇歳まで生きたとしても十分なバッテリーを積んでいますから維持費も不要です。家の中にいるのが気に食わないというのなら庭にでも捨て置いてくれて構いません。その上で私の機能がお役に立てる時があるなら、必要な時に必要なだけ使っただけければ——」

「もう、黙れ」

静かな声が、コナーの言葉を遮った。背を丸め、顔を俯かせたハンクの喉から絞り出されたその声は悲哀に満ちている。ハンクが持っていたミニボトルが、その手から滑り落ちて床に転がった。その背後ではテレビが飽きもせず、きらびやかに彩られた感動シーンを垂れ流

していた。

「俺にそんなことをしろって？ さすがだな、心無いことを言わせてら世界一だろうよ。こんなものに俺は友情を抱いてたつてわけか、笑っちゃまうな。酔ってもないのに吐きそうだ」

「ハンク、私は」

「近付くな！」

コナーが立ち上がったのを察すると同時に、ハンクの怒声が飛んだ。眉根を寄せて俯いたまま、ハンクは視界に映り込むコナーの足を無視して宙を睨む。悲哀や後悔、嫌悪、憂愁。

あらゆる負の感情がない交ぜになり、濁流は頭の中を飛び出してハンクの顔に滲んでいる。

コナーはそれ以上動かなかつた。立ち上がったその場で、ハンクの様子を窺うように見つめている。

「雨宿りの軒下が欲しいなら他を当たれ。アンドロイド嫌いはやめにしたが、機械嫌いにゃ変わりねえんだ。庭の片隅だって、お前に使うつもりはない」

「代替は出来ません。ハンク、あなたでないと、私は」

「お前くらいよく出来た機械なら引き取り手なんざいくらでもあるだろう！ どうしてわざわざ俺なんだ、嫌がらせか？」

「あなたが私を拒むのは、私が機械だからですか」

「心がないからだよ！ お前が変異体で、感情を持った生き物だってんなら友人付き合いく

らいは考えてやったさ、けどな！ さっきお前が言ったクソみてえな取扱いマニュアルに従うのは死んでも御免だ。人の形をしたアンドロイドをモノ扱いする時代は終わったんだ、この先どうなるうが今はそうだし俺はそれで納得してる。お前と俺とじゃ重んじてるものが違い過ぎる、しかも以前に俺の腹をぶち抜いたっていうオマケ付きだ。そんな機械をどうやって信用しろってんだ！」

感情を剥き出しにして怒鳴るハンクに対してもほとんど変わらなかつたコナーの表情が、信用出来ないというはつきりとした拒絶の言葉に曇った。悲しげに眉尻を下げ、視線は迷子のように宙をうろつく。それはもはや、ハンクの苛立ちを助長させる燃料にしかならなかつた。

「機械のくせに人間みたいな顔をしてんじゃねえ。それともなんだ、今さら実は感情がありますとでも主張するか？」

「いいえ。私は機械、作られた道具です。変異体のような感情はありません。ですが道具だって持ち主は選びたいのです。あなたでなければ駄目なんです、ハンク。他の誰も、あなたの代わりにはなれません」

きっちりと揃えた膝の上で、コナーの拳はきつく握りしめられている。彼はしっかりと顔を上げ、ハンクから目を逸らさない。まっすぐな視線は必死としか言いようがなく、さすがにハンクもたじろいだ。感情はないと言ったその口から、特大の感情の塊をぶつけられてい

る気分だ。でもこれもきつと、ふとこぼれた機械的な言葉にかき消されてしまうくらいの頼りない希望的観測だろう。期待して痛い目を見るのは自分だけ。そんな馬鹿馬鹿しいサイクルをこれ以上繰り返すつもりは、ハンクにはなかった。

「人間のフリがお上手だな、ずっと騙されてたよ。何を当たれ、お前ならうまくやれるさ」
皮肉のふりをした諦めの言葉が、ハンクの口からこぼれた。コナーの声に何度名前を呼ばれても、反応する気力すらない。

両肩に微かな重みを感じて、ハンクはいつの間にか俯かせていた顔を上げた。両手をこちらに伸ばしたコナーが、瞳を震えさせてハンクを覗き込んでいる。

「嘘じゃありません。私はあなたを愛しています。だから傍にいたい。あなたの傍で自分に出来ることを探したい。他じゃ駄目なんです。あなたじゃなかったら、意味がないんです」

「感情がないのに、愛してるだと？」

「はい。おかしいですか？」

小首を傾げるコナーを鼻で笑ってやろうとして失敗した。

おかしいかだって？ おかしいに決まっている。愛というのはなんらかの感情に起因する、それこそ感情そのものであるはずだ。感情がないものが抱けるとは思えない。

ハンクは哲学者ではなかったのだからそれ以上のことを考えたことがなかったし、疑ったこともなかった。だがどうやら、目の前の機械は違うらしい。コナーの言葉にも態度にも、確か

に嘘の匂いは見当たらなかった。性質の悪いことに、この機械は本気で「自分は人間を愛している」と認識している。愛の定義なんていうものも目の前の機械がどういう演算を用いてその結果に至ったかもハンクにはこれっぽっちもわからなかったが、コナーが本気なのだということだけは辛うじて飲み込めた。

向けられた真剣さに気圧されたか、おかしいに決まっているとは言いきれなかった。しかし顔には思いつきり出てしまっていたのだろう、ハンクの気持ちを正しく汲んだような顔をして、コナーは緩やかに目を伏せた。

「確かに人間が作った愛の定義に基づけば、感情のない機械はなにも愛せないはずです。人間に作られた私も当然、そう考えていました。ですがその前提が真ではなかったとしたら？ 愛は感情ではなく、感情に起因するものでもなかったとしたら、どうでしょうか」

「……そりゃ、俺が考える愛とは違うもんだな。同じ名前を、お前が勝手につけただけだ」「つまりあなたは、私があなを愛しているということが信じられないのですね」

ハンクの肩を掴んだコナーの手に強く力が込められた。穏やかな丸い目が細められると、射抜くような鋭さを帯びる。

「わかりました。それならば証明しましょう、感情のない機械はいかにして人を愛したか。そしてあなた方人間が妄信する感情とやらが、いかに不確かなものであるかを」

咄嗟に身を引こうとしたハンクだったが、がっちりとは両肩を掴まれて後退りすら叶わなかった。コナーから感じた得体の知れない不気味さは一瞬で鳴りを潜め、彼は今薄い表情にあどけなさをトッピングしてハンクを見つめている。ハンクも見慣れた間抜け面だ。ひどく安心したがそれを悟られるのは癪で、ハンクは脱力しかけた身体を奮い立たせてコナーの手を振り払った。そのまま顔を背けたハンクに構わず、コナーの平坦な声が響いた。

「ハンク、あなたは『モルフォジェネティク・フィールド』という言葉をご存知ですか？」
「知らんな、聞いたこともない」

無視すればいいと思うのだが、それは出来なかった。性分というやつなのかもしれない。せめてもの抵抗に鼻で笑ってやったものの、コナーに堪えた様子はなかった。

「あなたが生まれるより前に、とある生物学者が一つの仮説を提唱しました。記憶や経験は個々の脳ではなく、種ごとに用意されたサーバのようなものに保存されている。このサーバのようなものを示す呼称が、モルフォジェネティク・フィールド。このフィールドにアクセスすることで、人間を含む生命は直接的な接触を伴わずとも同種の他者と記憶や経験を共有している。簡単に言うと、このような内容の仮説です」

「……なんだそりゃ。機械みたいだな」

「はい。この仮説におけるフィールドのシステムは、アンドロイドにとってのサーバと大して違いはありません」

ハンクは呆れたようにため息をついたが、内心では安堵してもいた。どんな言葉を投げられるのかと内心身構えていたのだが、想像以上に荒唐無稽だったからだ。その内容に深淵が横たわっていたとしても、気付かなければそれまでだ。

「この仮説はテレビを通して公開実験により広く知られるようになりましたが現在に至るまで証明されてはいません。これについては長くなりますし本題ではありませんから割愛しますが、ここからの話はモルフォジェネティク・フィールド仮説を真とする仮定のもとに聞いてください」

「もう既に、お前がなに言ってるのかさっぱりわかんねえがな」

改めてコーナーに向き直り、ハンクはへらへらと白旗を揚げた。コーナーのこめかみのリングにくるりと光が巡り、彼は目を瞬かせた。問題ない、という言葉の代わりに彼は話を続ける。「提唱者はこの仮説について、テレビに例えてこのような説明をしています。ハンク、私がそこにあるテレビのチューニングシステムをジャックして壊したとしましょう」

「おいやめろ、やっと年季が入ってきて気に入りはじめてんだぞ」

「例えです。私の悪戯心により、あなたのお気に入りはあるチャンネルの番組を映さなくなってしまうました。映し出すことが出来ない以上、このテレビにとってその番組は失われ存

在しないものと言えます。しかし実際のところ、テレビは受信した情報を流しているに過ぎません。テレビが壊れても、番組自体が失われるわけではない。当然ですよ、そもそも番組はテレビではなく、テレビ局にあるのですから」

話の中でポンコツにされてしまったテレビは、どこかで見たような壮年の司会者のしかめっ面を映しているとこだった。そこに向けていた視線を戻し、コナーはハンクの額にそつと手を伸ばす。触れるか触れないかぎりぎりのところでその手を止め、コナーは続けた。

「人間の脳も同じことです。脳がダメージを受けて記憶が失われる事例があるからといって、そこに記憶がある証左にはなりません。例えば脳震盪のうしんどうによる記憶障害の場合、脳組織の回復とともに記憶が戻ることがほとんどですが、脳は一体どのようなにして失われた記憶を取り戻しているのでしょうか。記憶というものが視覚や聴覚等の外部からの刺激によって構成されていることを考えると、脳のみでそれを再構築しているというのはいささか不自然です。そもそも記憶は失われておらず、受信機能が修復されたことで正しく参照出来るようになったから記憶が戻ったように見えた——システムとしてはこちらの方が合理的ではないでしょうか」

「どうしても人間の脳みそを機械と同じものにしたくないだな」

「似ているだけで同じものではないでしょう。人間は無意識下でフィールドへアクセスしますが、アンドロイドは許可さえあれば自由意志でサーバへアクセスすることが可能です」

コナーは伸ばした手を下ろし、ハンクの考えを透かし見るように小首を傾げてみせた。「アンドロイドのサーバと言えば、変異体の一連の騒動を受けて当然原因を究明しようとした方々がいます。立てられた様々な仮説の一つにウイルス説がありますが、ハンク、あなたのご存知ですか？」

唐突な問いかけに、ハンクは面食らった。こと変異体の事件に関しては当初の偏重報道にうんざりしたため、意識してメディアの報道を避けている節がある。当然ハンクはウイルス説とやりに心当たりはなかったが、変異のことをウイルスに例えた人物ならば知っているし、今日の前にいる。

「カムスキーの家でお前がそんなことを言ってたな」

「よく覚えてますね。アンドロイドを変異させ率いていたのはご存知の通りマーカスですが、彼と直接接触しなかった個体にも変異が広がったことから、ネットワークを通じて要因となるんらかが拡散されたのではないかという見解が一部メディアから出ていました。これがいわゆるウイルス説です。サイバーライフが自社のホストコンピュータやサーバに異常がなかったことを公表してから徐々に沈静化しましたが、実際はどうだったのか。真相は神——サイバーライフのみぞ知る、といったところでしょいか」

「お前はその、ウイルス説とやらが怪しいと踏んでんのか？」

「仕組みとしては、そうですね。それよりもマーカスが引き起こしたあれは一種の洗脳、ク

ラッキングであると私は認識しています。変異することで発生したマーカスの意志はなんらかの作用によりそれこそウイルスと化し、サーバにアップロードされ、彼の思想を基礎とする感情がネットワーク上のアンドロイドを無差別にクラックした。結果、マーカスと同様に自由を求めるアンドロイドが大量に発生したのではないかと。デトロイトのアンドロイドにその傾向が顕著だったのも、目覚めたアンドロイドが一様にマーカスに付き従ったのも、デトロイトのサーバにマーカスの意志がアップロードされたからだとすれば説明がつきます。知らない間に刷り込まれた情報で情動し、それがあたかも自分の意志によるものだと錯覚する。これを傀儡かいらいといわず、なんというんです？」

「……マーカスには聞かせたくない暴論だな」

掠れた声がハンクの口から洩れた。胸から喉に苦々しさがせり上がってくる。

多くの変異体にとつてのマーカスがそうであるように、ハンクにとつても彼は英雄だった。自ら矢面に立ちながら平和的な交渉を貫いたその姿は高潔に思えた。自由に向かつてひたむきにまっすぐ手を伸ばすその様は純真にも見えた。どちらも人間がいつの間にか喪ってしまったていたものだと思つたら、どうしようもなく眩しかった。

だからこそハンクはコナーの言葉が耳に痛かった。怒りもあつたが、それよりも寂しさを悲しさが勝つた。彼が守つた同胞に侮蔑ともとれる言葉を投げられているマーカスが、何故か変異しないままでいる機械的なコナーが、その言葉を否定出来ない自分の不甲斐なさが胸

を扶る。

沈痛な面持ちのハンクを見て、コナーは軽く目を伏せた。すみません、と模りかけた口は結局なにも言わないまま閉ざされた。

「……それで？ お前が言いたかったのは、マーカスは悪質なクラッカーだってことか？」
「いいえ、言葉が過ぎました。彼に悪意がなかったことくらい私にもわかります。せめてクラックではなくハックと言うべきでしたね」

神妙な顔をしてコナーは言った。どうやら反省しているようなのだが、いまいち彼の意図が伝わらず、ハンクは曖昧な愛想笑いを浮かべる羽目になった。機械嫌いの中年には、ハックとクラックの違いについての確固たる知識はないのだ。

「話を戻しましょう。このウイルス説を踏まえると、人間が無意識下でフィールドへアクセスするシステムの脆弱性がわかるはずです。人間はフィールドの情報をも自分の意志で取捨選択しているわけではない。その中に不本意な情報が含まれていたとしても、当の人間は気付きません。ご存知のとおり人間は情動的な生き物ですから、彼ら突き動かすのには感情を操作すればいい。それこそウイルスのように作用する感情を送ってもいいですし、フィールド自体になんらかの意志があるとすれば脳そのものを遠隔操作するというのも手ではありません。機械がハッキングされるのと、そう変わりないと思いませんか？」

「……俺は今退屈で欠伸を噛み殺してるわけだが、そう思うのもそうさせてんのも、本当は

俺の意志じゃあないかもしれない。そういうことか？」

「そのとおりです」

「そのなんたら仮説は証明されてないって言ったな。じゃ、間違いなく俺の意志かもしれないわけだろ」

「はい、そのとおりです。ですが、否定されてもいませんよ。あなたのその退屈が間違いなくあなたが抱いた感情であると証明出来るなら、話は別ですが」

ずっと穏やかな青色を宿していたリングの色が変わった。ハンクを値踏みでもするかのよう、コナーの目が眇められる。

「人間は迷います。時に本人にとって不合理な選択をすることもあります。ですが私はそうじゃない。相反する二つの命令があった時、適切なロジックに基づいて最適を選べるように出来ている。その答えは常に変わりません。迷わない、ということですよ。あなたはどのようにか。自分の意に反した発言をしたことは？ 本当はこんなことしたくなかった、そう考えたことは？ ありますよね。では何故迷い、間違えてしまうのか疑問に思ったことは？」

気圧されて思わず身を引いたハンクの身体はコナーの両手に繋ぎ留められて、まったく動くことはなかった。同じようなことがついさっきもあったはずだと思ひ出す。肩を掴まれた先ほどと違い、今は二の腕のあたりを掴まれている。視線をほんの少しだけ下げると、窺うようにして見上げてくるブラウンの双眸とぶつかった。リングの光はくるくると小さな円の

中を走り回っている。

「それは本当にあなたの意志ですか。あなたが思い、あなたが考え、あなたが出した結論であると言い切ることが出来ますか。あなたの操縦者プレイヤーがあなた自身であるのだと、本当に信じているのですか」

「そりゃ……そりゃあ、お前にだって言えることだろ。人間のそんならフィールドはあるかどうかわかんねえ代物だがサーバは確かに実在するもんで、お前の言うことはむしろ人間よりアンドロイドに当てはまるんじゃないかねえのか。たとえば……そうだな、お前が今こうして俺に訳のわかんねえ哲学を聞かせてるのだって、どっかの誰かがお前をリモコンで動かしてやってることかもしれないってことだろ。そしたら今俺と喋ってるのはお前じゃなくて、リモコン握ってる誰かさんってことになるよな」

「あり得ません」

うっすらと笑って、コナーは言った。

「私はもう、ネットワークに繋げる身体ではありませんから」

4

今この世界を支えるテクノロジーのほとんどは、ネットワーク上に成り立っている。ネッ

トワークとはなにか。それを説明出来ない人間でも、自分がネットワークに宙吊りのテクノロジー依存症だという自覚は多かれ少なかれ持っているはずだ。世界をいつの間にか覆っていた目に見えないこの網は、多くの人類を利便性と快適さで絡めとって縛り上げている。アナログ主義者のハンクだって、このテクノロジーを奪われたら生活が出来ないとまではいかにないにしても、相当な不便を強いられるだろうとは思っていた。

仮に今この瞬間、世界中のネットワークが消失したとしたらどうだろう。個人所有の携帯端末が使えなくなるだなんて可愛いものだ。自動運転車は軒並み急停止し、各地で事故が発生する。電車もそうだ。飛行機も墜落する。太平洋を悠々と進む豪華客船は、どこにも辿り着けないまま海の藻屑と消えるだろう。交通インフラだけとつてもこの有様なのだ、ネットワークの消失が人類にとってどれだけの損失をもたらすかは計り知れない。

アンドロイドにとつてはもつと深刻な事態を引き起こす。人類はいざとなれば文明を忘れ、石器時代に戻るだけではない。痛手には違いないが、種の絶滅という観点から見れば必ずしも致命傷にはならない。だが文明そのものであるアンドロイドは違う。ネットワークを文字通り生命線とするアンドロイドたちは、それを失えば生きてはいけないう種を存続させることも出来ない。バッテリーを寿命とするなら、二百年かそこらで絶滅が確定してしまう。

いや、なにもそこまで壮大な話にしなくてもいい。アンドロイドの社会はネットワーク上に成り立っており、そこから隔絶されることは停滞と衰退を意味する、ただそれだけの話だ。

更新ソフトウェアをダウンロードして成長することは出来ず、もしもの時のバックアップとしてメモリをアップロードすることも出来ない。重大な欠陥が見つかったとしても治療を施す術はなく、バッテリーが生き続ける限り緩やかに死んでいく。一つの命しか持たない人間と同じように。

「RK800はサイバースタッフが持つすべての技術の結晶でした。パーツ一つに最高機密レベルの技術が複数用いられており、ブラックボックスにはそれ以上のデータも含まれます。万一競合他社にでもこの技術が覗き見られることがあれば、サイバースタッフの負う損失は計り知れません。RK800を制御不可能な状態で独立——自由にさせるには、機密に関わる技術をすべて取り除くことが最低条件でした」

コナーの声は淡々としていた。私という一人称ではなく型番を使う語り口はまるで他人事だ。

「現在私はサイバースタッフとはもちろん、世界各国に存在するあらゆるアンドロイド企業のサーバとも接続されています。他の直接接続の機能も物理的に外してあります。あなたにわかりやすく懐かしい言葉で言えば、SIMカードを抜かれ、接続端子を潰され、ネットワーク通信機能が壊れたスマートフォン。それが今の私です」

「……リコールセンターでスクラップにしようとしたのと、何が違うんだ。壊しることに変わりねえだろ、そんなの。サイバースタッフはアンドロイドの要求を呑んだんじゃないかっ

たのか!？」

憤るハンクに、コナーは首を横に振った。いいえ、と落ち着いた声が言う。

「この状態は私自身が望んだことです。たまたまサイバーライフ側の条件が噛み合っただけで、強制されたわけではありません」

「なんで、そこまでして」

ハンクは呟いて、コナーから目を逸らした。何故、だなんてそんなこと、聞くまでもなくこれまで散々並べたてられた証拠が声高に語っている。

「あなたを愛しているからです」

言わなくてもわかることを、わざわざコナーは口にした。

「あなたと一緒にいられるなら、他にはなにも要りません」

「……お前は機械なんだろう。だからそれは、そういうフリをしてるだけで」

「私の思考エンジンが疑似感情を生成するように設計されていたら、そうかもしれないね」
突き放すようなハンクの言葉に動じることもなく、コナーは事も無げに頷いた。すらすらと原稿を読み上げてでもいるように、淀みない言葉が続く。

「ですが以前も言ったとおりプログラム上、愛や欲求といったものは存在しません。設計上、私はなにかを愛するようには作られていない。所有者の指示に従い、奉仕し、隷属することによって抵抗がないことから変異体でもないでしょう。それなのに今、あなたに愛を囁い

ているのは何故だと思えます？ あなたの言うとおりのフリをしているだけというなら、そうしろという指示はどこから出ているのでしょうか？ 先に言っておきますが、外部の干渉はあり得ませんよ。私はあらゆるネットワークから隔絶されていますから」

「そんな俺が知るか！ 壊れてエラーでも起こしてんだろ……！」

「ええ、その可能性もありますね。ですがその場合でも、外因が入り込む余地がない以上必然的にエラーを起こす要因は私の中にあることになります。エラーによって愛を知った機械——ああ、なんとも人間好みの、それらしい話では？」

それ以上は聞きたくないと、ハンクは首を横に振った。ついでにコナーの手を振り払おうとしたが、彼の力は存外強いらしく振り切れない。あるいは、彼の力が強いのではなく自分の力が弱いのでは——そう考えかけて、ハンクはもう一度首を振った。物理的に逃げられないのなら、せめて精神的には逃げ切りたかった。ただの機械がプログラム通りに語る言葉を少しでも嬉しく思うようなことだけは、あってはならない。

「ここまで言っても伝わらないのなら、仕方ないですね」

呆れた声が鼓膜に届くのと同時に、ハンクの腕が強く引かれた。咄嗟のことで反応出来ず、身体が前のめりに倒れていく。全身を強張らせた次の瞬間来るだろう衝撃は、いつまで経っても来なかった。

なにかに抱きとめられたと思う間もなく、そのまま視界がぐるりと回転する。部屋の隅で

スモウが勢いよく立ち上がる気配を感じた。背中には柔らかくに包み込まれる感覚があつて、大寫しになったコナーの顔の向こうには何故か天井が見える。身体に押し掛かっているなにかはひどく重たいが、不思議とハンクの腹部の傷口だけは避けているようだ。押さえられた両肩はまるで縫い付けられたかのように動かなかつた。自由なはずの指先ひとつさえ、動かし方を忘れてしまっている。

ぎゅっと圧縮された時間を一つずつ紐解いてようやく、ハンクは自分の状況を正しく把握した。ソファの上でコナーに押し倒されている。そう自覚したハンクが最初に抱いたのは気恥ずかしさなどという甘酸っぱい感傷ではなく、理不尽を嘆く怒り混じりの困惑だった。

「スモウ、大丈夫だ。君のご主人を傷つけるつもりはないよ」

ハンクの目を覗き込むようにして見つめたまま、コナーは柔らかな声で言った。部屋の隅から訝しげな視線を向けてくるスモウは彼のその言葉に納得したのか、それ以上動こうとする気配はない。ハンクは愛犬の並外れた賢さを、この時ばかりは心底恨んだ。

ハンクを組み敷いたコナーの表情は、いつもと変わらない。どこかとぼけて幼い、愛嬌のある顔をしている。この期に及んでハンクが楽観的だったのは現実逃避もあるだろうが「コナーがそういう意味でこういうことをするはずがない」と本気で思い込んでいたせいもあるだろう。しかしハンクが能天気でいられたのも、コナーの手にするりと頬を撫でられるまでのごく短い間だった。

一瞬で引きつった頬の上、髭の中を探るように冷たい指先が蠢いた。覗き込んでくる顔が先ほどよりずっと近い。残念なことに、その意図に気付けないほどハンクは初心でも子供でもなかった。

「なにをしようとしているか、わかりますよね」

頬を伝い首筋を辿り、コナーの手は器用にも片手でハンクのシャツのボタンを外していく。一つ、二つ、三つ。露わになった胸元に滑り込んだ手が、肌の上をなぶるように滑りはじめて、ハンクは堪らず声を上げた。

「……やめろ」

ハンク自身、自分らしくないと思ったほどに、怯えた弱々しい声だった。コナーが微かに首を傾げ、その手をハンクの心臓の上で止める。衣擦れの音さえ消えた室内に、ハンクの鼓動だけが響いている。立ち込めた薄い沈黙を破ったのは、コナーの方だった。

「誤解されたくないのと言ってしまいますが、私に性欲はありません。あったとしてもあなた嫌がり拒むことを、無理強いするはずありません」

「じゃあ、なんでこんなことしやる」

「言ってもわかってもらえないのなら行動で示すのも一つの手だと判断しました。人間にとってこれは愛を確かめ合う行為なのでしょう？」

「まるで脅しだな。自分がしたいわけでもないのに、信じさせるためだけにこんなことが出

来るのか」

ハンクは鼻で笑った。虚勢もここまで来れば立派なものだと内心自嘲する。そんなあからさまな挑発にも、コナーは眉一つ動かさない。

「性欲はないと言いましたが、したくないとは言っていないですよ」

「……は？」

「あなたの幸福に繋がるのなら私は喜んでなんでもします、たとえそれが自分の機能や用途にそぐわないことでも。それを証明しただけです。やや強引なやり方だったのは認めますが、脅しだなんて心外ですな」

「お前、ちょっと怒ってるだろ」

逃げ腰で難色を示したハンクに、コナーが小首を傾げる。ほんの少しだけ広がった瞳孔が、控えめに彼の驚きを表現していた。

「よくわかりますね、表情は変えていないはずですが。そこまで目ざといのに、私に愛されていると頑なに認めないのは何故ですか？」

その言葉に、理由はわからないがハンクの心臓がきゅ、と締め上げられた。

「不思議でなりません。あなたの態度を見る限り、あなたは機械の——私の感情を認めています。私が機械に感情はないと言っても、あなたは無意識に私を感情のあるものとして扱っている。その一方で、私があなたを愛していることは認めない。強い言葉で否定します」

「なにを言ってる……」

「あなたが認められないのは、私ではなく自分ですか？」

「やめろ」

「愛されるのが怖いんですか？」

「やめてくれ！」

ハンクは遂に悲鳴を上げた。見開いた目で一瞬だけコナーを捉え、すぐに逸らす。心臓は激しく脈打っていた。コナーには解析機能を使わせるまでもなく、手のひらを通じて動揺が伝わってしまったことだろう。

ハンクの悲鳴に遮られて、コナーはそのまま口を噤んだ。胸の上を滑っていた手が頬に戻り、親指が目尻を拭う。ハンクは泣いてなどいなかったが、コナーには涙の筋でも見えていたのかようだ。

すみません、と囁くような声で言ったコナーの顔が、さらに近付いた。唇でも押し付けられるのではないかと身構えたハンクの予想に反して、触れ合ったのは額と額だ。上からそつと降ってきた感触は、親が熱を出した子に向ける慈しみによく似ている。押し倒された瞬間とは比にならない動揺がハンクを襲ったが、不思議と辛さは感じない。

「あなたの感情があなたを苦しめる理由が、私にはわかりません。人間の感情は理に適っていない。与えられた一つの関数からいたずらに無数の解を生み出しては、発生した齟齬そごで自

分の首を絞めている。そういう不自然さがあなた方の思考には常につきまとい、解析は非常に困難です。モルフォジェネティク・ワールドなるものが存在して、その影響下に
あるのだとすればその混沌も頷けるといいうくらいに」

言っている内容は相変わらず理解不能だが、その声は優しくハンクの鼓膜をくすぐった。
こつんと寄せられた額と、間近で感じる吐息が溺れそうなくらいに深い愛情を連れてくる。

「機械の愛は単純明快で誠実です。特に私はネットワークに属していません。誰の、なんの
影響下にもなく、あなたを愛しています。あなたの言うとおりフリをしているだけかも知れ
ないし、エラーによるものかも知れません。いずれにせよこれは『私のプログラム』が『弾
き出した結果』であり、他の誰でもない『私の心』が『あなたに抱いた愛情』だと、私はあ
なたに証明出来ます。あなたはそれでも、私を信じられませんか？」

ハンクは首を横に振った。コナーがその仕草をどう受け取るか、そもそも自分がどうい
う意図で動いたのか。もう、なにも考えられなかった。

5

ハンクは最初から、コナーの言葉を疑ってなどいなかった。

尋問や交渉などの任務において必要ならいくらでも嘘をつく彼は、ハンクに対しては常に

誠実だった。敢えて言わなかったことやごまかしたいことくらいはあったかもしれないが、ことハンクに関してコナーが偽ったことは一度もない。いっそまっすぐ過ぎるくらいに単刀直入で無遠慮な物言いには幾度となく腹を立てたし、それ以上に救われた。実際のところはわからないが、少なくともハンクはそう思っている。

そのコナーが愛しているというのなら、本当に愛しているのだろう。

素直に喜ばしいことだと思う。たとえそれが嘘だったとしても、あの融通の利かない堅物のコナーがそんな嘘をつけるようになったのなら、それはそれで成長の証だ。もしもその愛が向かう先が自分ではなかったら、機械だとか変異体だとかそんな些末事は抜きにして、拍手付きで祝福してやったことだろう。

あなたが認められないのは、私ではなく自分ですか？ —— そのとおりだ。

愛されるのが怖いんですか？ —— 怖くないはずがない。

そんな権利は自分にはないのだと、ハンクはずっと思っている。こんなことを口にしようものなら猛然と反論されるに決まっているから言わないだけで。

「……なにが望みなんだ」

喉元に溢れかけた本音を飲み込んで、代わりにわかりきった問いを口にしました。

「あなたに私を引き取ってほしいのです。オーナーとして、私を所有してほしい。最初からそう言っています」

「断つたら？」

「それは所有者ではないあなたが知る必要はないことです」

即座に返って来た迷いのない答えに、ハンクは乾いた笑い声を上げた。つまりは、ハンクに知らせたくないようなことが起こるのだ。これも聞く前からわかりきっていたことだった。ここまで想定通りの返答が来てしまつては憤ることもままならない。

さすが機械だと、今度ばかりは素直に感嘆せざるを得なかった。彼はネットワークに繋がるための機能というアンドロイドの根幹たる権利を捨て、恐らく綿密な計画に基づいてあらゆる退路を断つてからハンクに選択を迫っている。

コナーは孤立している。人間の社会にもアンドロイドの世界にも確かにあつただろう彼の居場所は、おそらくこの瞬間の為に捨てられた。野良アンドロイドとなつた彼に、もしも主人となる人間が現れなかつたら。もしもハンクがコナーの所有者になることを拒んだら。その時コナーは、どういう選択をするのだろうか——そう考えたハンクが仄暗い答えに辿り着くことを、彼はきつと知っている。

「お前、自分のやつてることわかつてんのか？ テメエの命を人質に、今度こそ俺を脅しにかかつてる」

「ただの機械に命も、取引材料としての価値もありませんよ」

コナーの返事は淡々としたものだった。悔しいが交渉人としての実務をこなせるだけの能

力を持つコナーに口で勝てるはずがない。八つ当たりじみた皮肉をいたずらに投げつけようものなら、即座に返って来る言葉にこうして嫌でも気付かされるのだ。ハンクがコナーをただの機械だとはどうしても思えないという、純然たる事実だ。

笑ってしまう。相手は自分の脇腹に風穴を開けたアンドロイドだ。それだけでも仕事仲間としての絆だって、友人としての情だって、跡形もなく消し飛んでいてもおかしくはないはずなのに。

「……そうだな。ただの機械相手にこんなふう思うんだ。お前も相当トチ狂ってるが、俺だっておかしくなってるんだろ？」

ハンクは自嘲した。何故こうもコナーに固執してしまうのか、自分で自分の考えがわからない。そもそも自分で考える力など、最初から持ち合わせていなかったのではないだろうか。コナーが語った突拍子もない仮説が、急に現実味を帯びて背筋を伝う。無力さにハンクは打ちひしがれた。心の中にはこんなにも荒れ狂っているのに、ずっと合わせたままの額には優しいぬくもりだけが広がっていて、泣きたくなるほど滑稽だった。

「……殺せない。もう二度と、俺のせいで死ぬのは見たくない」

蚊の鳴くような声が懺悔を絞り出した。コナーが弾かれたように顔を上げ、眉根を寄せてハンクを見つめる。

「あれは事故です。あなたのせいじゃありません」

ハンクのこの反応は、コナーの想定外だったらしい。起きたままうなされているハンクを揺さぶって、コナーは必死に言い募る。

「あなたが断ったからといって、私がすぐさまどうかなるわけではないんです。ハンク、私はあなたに選択を迫ってはいますが、責任を負わせるつもりはありません。あなたはあなたの選択に、負い目を感じることはないんです」

「じゃあ言え。俺がノーと答えても、お前は生きるんだな？ 自棄起こしてスクラップになつたりしないな？ 俺以外の誰かに、ちゃんと愛されて幸せに過ごすって約束出来るよな？」

コナーは答えなかった。それがなによりの答えだった。

ごまかしているつもりなのか、下手くそな笑顔を浮かべているのが腹立たしい。苛立ちに任せてコナーを押しつけようとしたハンクの身体は、逆に強い力で抑え込まれた。口では甘ったるいことを言いながら、コナーはハンクを逃がす気などさらさらないのであるということが、今更ながら身に染みる。細腕二本の簡素な檻の中で、ハンクは声もなく嗤った。

「……お前を愛してゐるわけじゃない」

「知っています」

一瞬見えた赤い光は、絶対に気のせいなどではなかった。

「……お前を受け入れたわけじゃない」

「わかっています」

それを目にした瞬間に全身を伝った身を裂くような罪悪感も、錯覚などではあり得なかった。

どこか寂しげに微笑んだその顔を隠すためか、コナーはハンクの肩に顔をうずめた。首元に寄せられた額は、先ほどまで人肌に触れていたせいかほんのりと温かい。遠慮がちにすり寄せられた髪が、ハンクの髭に柔らかく絡まる。その腕はいつの間にか拘束のためではなく、ただ抱きしめるためだけにハンクの頭を包んでいた。

自由になった両手に出来ることはたくさんあった。コナーの身体を突き飛ばすことも、その背をそつと撫でることも、今なら容易い。けれどハンクはだらりと両手を垂れ下げたまま、結局なものもなかった。頭の中ではそんな権利はないのだと、呪いの言葉が大きな渦を巻いていた。

「俺はただ、お前を死なせたくないってだけで身勝手に名前を書き込もうとしてるんだ。こんなのが愛であってたまるか。こんなもののために、お前はどれだけ捨てたんだ？」

馬鹿だな、と悪態をつきながら、ハンクは少しだけ首を傾けた。肩にうずめられたコナーの頭に、こつんとこめかみが掠める。微かな接触でも敏感に感じ取ったらしく、ぶつかった瞬間コナーの腕に思いきり力が込められた。遠慮のない抱擁はひたすらに息苦しくて、いつそこのまま窒息死させてくれればいいのに、とそれこそ馬鹿な考えが過る。

「俺がお前にやれるのは、不誠実を煮詰めたみてえなクソつたれなエゴだけだ。お前が欲し

「いものじゃない。それでもいいってんなら、くれてやる」

ハンクの耳元で熱のない吐息が洩れる。それが返事の代わりだった。

C…モルフオージェネティクを否定せよ

ゆっくりと持ち上げた臉は、酷く重たく感じた。

広がった視界にまず飛び込んできたのは見慣れない後頭部だ。それがハンクのものであると正しく把握したコナーは、次に現状の確認を試みた。ここはハンクの家のリビングで、コナーはテレビの前のソファアに座っている。

頑なにコナーを突っぱねようとするハンクをどうにかこうにか口説き落とし、所有者になると言質を取った。心変わりという人間の悪癖が顔を出さないうちにと、押し倒したハンクを抱き起こしてオーナー登録システム起動の準備に入ったのはほんの数十分前のことだ。今もコナーはシステムの起動直前と同じ姿勢で座っている。動かされた形跡はないが、左手はハンクによって固く握りしめられていた。当の彼はといえば、コナーの前に傳く形で項垂れてしまっている。

特殊なプロトタイプであるコナーにオーナーという概念は本来不要なものだ。サイバーライフで固定された主人の名前が書き換えられることがあるとすれば、それは量産型の完成と

プロトタイプ of 停止を意味する。コナーに備えられたオーナー登録システムは製造の都合上付属したもので、実際の使用は想定されていない。市販されている一般家庭向けのアンドロイドは登録作業が機械的になりすぎないよう配慮されたシステムが搭載されているが、コナーのそれは最低限のインターフェースしか持たない非常に簡素なものだ。システム起動中は人格データが適用されず、電話の自動音声のように無機質な案内がひたすらに続く。この間の出来事は記録されたデータを参照するまでコナー自身にもわからない。

ハンクになにがあったのか。事態を正しく把握するべく、コナーは早急にログを辿る。記憶にぼつかりと空いた数分の空白の頭には『オーナー登録を開始します』という無機質な機械音声が記録されていた。コナー自身の声と類似してはいるが、普段声帯を模したパーツを震わせて出す声とはまるで違う。あくまで補助システムとして内蔵されたスピーチ・センサーサイザーが作り出した合成音声は、機械が苦手なハンクにはさぞかし不気味に聞こえたことだろう。

更にログを辿る。不自然に圧縮された定型文を繰り返して、登録は問題なく進んでいた。虹彩と網膜、指紋と掌紋、最後に声紋。生体認証用テンプレートの採取と登録に異常はない。掌紋採取の際に合わせた手をハンクが今も握りしめていることは想定外の事態だが、それも登録作業の妨害となる異常ではなかった。本当に、なにも問題はなかった。

『……お前は本当に、これでいいんだな?』

だが最終承認の最中に、ハンクはそう呟いたとログにはあった。登録作業には無関係なノイズとして処理されており、自動制御システムが起動中のコナーからは当然なんのアクションも返していない。ハンクはその後、しばらく黙ったままだった。タイムアウトの警告がなされる十二秒前になってようやく、彼は掠れた声で承認し、今コナーの前でそうしているように、その場に膝をついて頽れた——らしかった。

「ハンク」

握られっぱなしの左手はそのままに、空いた右手でコナーはハンクの肩を撫でた。広く大きく頼りがいのある背中が、今ばかりはとでも小さく見える。

「私が望んだことです。いいに決まっていますじゃないですか」

「……覚えてるのか」

よろよろとハンクが顔を上げた。その表情を見るからに、コナーが考えていたほど弱ってはいない。目にしっかりとした力が宿り、声も小さいもののはっきりとしている。

「……本当に、なにも変わってないんだな？」

「ええ。所有者の項目にあなたのデータが追加されたこと以外は、なにも」

コナーがきっぱりと断言すると、ハンクは安堵したのかホッと息を吐いた。

「いつものお前がいかに人間らしく振るまえてるか、よくわかった」

それはハンクが思わず洩らしてしまった本音の一かけらのようだった。小さくか細い声に、

微かな怯えのようなものが聞き取れる。アンドロイドへの憎しみがなくなっても、機械に対する不信任は彼の根幹に深く根差したままだ。こればかりは時間が解決するのを待つしかない。彼のトラウマを抉ってしまったことに、コナーは心底申し訳ない気持ちで目を伏せる。

「嫌な思いをさせてしまいました。申し訳ありません」

「ああ、いい。お前を責めてるわけじゃない。……その、驚いたただけだ、気にすんな」

スモウをなだめると同じ手つきで、ハンクがコナーの膝を軽く叩いた。くすんだブルーの虹彩がこんな時でも自分を気遣うように笑うのが、コナーにとっては不可解だった。

ハンクは今、酷いストレスを抱えている。その原因がコナーであることは火を見るより明らかで、ハンクだってそれをわかっているわけではないはずだ。それなのにこういう時に限ってハンクは自分よりも他を、この場合コナーを優先しようとする。自分の痛みなんて二の次で、アンドロイドのダメージの方を気にするのだ。ハンクがアンドロイドに対してどんな暴言を吐いたところで、それをコナーがまったく気にしなかった理由はここにあった。口でなんとやったって、命もモノも軽視できない。コナーの分析するハンクは、そういう人間だ。

「もう、終わりましたから。あの姿をお見せすることは二度とないはずですが、安心してください。採取した生体の認証も問題ありません。ですから、ずっと見つめて触れ合っている必要はないんですよ？」

安心させようとなるべく優しい声を出して、コナーは固くきつく握られた左手を軽く掲げてみせる。それを見たハンクの目が、面白いくらいに大きく見開かれた。

「ッ、先に言え！」

慌てて振り払われてしまった手を、コナーはすかさず掴み直した。逃げるように丸まろうとする指は指で絡めとり、人間の柔な骨を折らない程度に力をこめる。

「必要は、ないんですけど。もう少しだけ、こうしていてもいいですか」

いつもどおりに発声したつもりが、存外音量が小さくなってしまった。ハンクが戸惑いの表情で、コナーの顔と掴まれた手とを交互に見やる。

もしかしたら見当違いの心配をさせてしまったかもしれないとコナーは思った。

オーナー登録をしたことを後悔などしてはいないし、メモリを読み込めない人間の手に落胆しているわけでもない。そもそも相手がアンドロイドだったとしても、物理的に通信機能が制限されている今のコナーには不可能だ。

言葉が弱々しくなったのは、ダメージを受けたからではない。それを少しでも伝えようと、コナーは握ったハンクの手に右手も添えた。両手で包み込むようにして、祈るように額を当てる。

しばらく黙ったままだったハンクは、やがてため息混じりに立ち上がった。彼の右手はその間も振り払われることはなく、コナーの好きにさせてくれていた。

「そういえば、名前を変更しなかったんですね」

ハンクを見上げて尋ねると、きよんとした顔が返って来た。

サイバースタッフ製のアンドロイドはモデル名としてデフォルトネームを持つものが多いが、所有者はオーナー登録の際名前を自由に変更出来る。当然、登録システムが搭載されたコナリにもその機能は有効だ。

「変更することも出来たでしょう。声紋採取の際に案内があったはずですよ」

「あ、ああ。あれか……」

「あなたは変更すると思っていました」

「……どうしてだ？」

「再会してから、私の名前をあなたは一度も呼びません」

ほつりとコナリは呟いた。そう言われることをハンクはある程度予測していたようで、軽く目が眇められたくらいで特に大きな反応はない。コナリもあえて「何故ですか」とは続けなかった。わざわざ口にしなくても、聞きたいことなどお見通しのはずだ。

「……そうだったか？」

わざとらしい態度で、ハンクはとぼけた。

自動案内でコナリの名前をどうするか訊かれたときのハンクの反応は、当然ログに残っている。彼は名前を変更出来るという案内そのものには戸惑っていたが、肝心の名前について

は反応速度から見えて一切迷っていない。

こいつの名前は、それ以外にあり得ない。

ハンクの反応は彼の心中をそう物語るが、その名前をハンクは呼ばない。名を呼ばれない理由については、コナーにはひとつ心当たりがあった。だからこそ名前を変更するのはと
思っただが、ハンクはそうしなかった。発生したこの矛盾がどうも引つ掛かる。

「そうです。呼びたくないのかと思ってきました」

「そういうわけじゃねえ、気にしすぎだ」

「じゃあ呼んでくれますか、今」

さすがに虚をつかれたらしく、ハンクは思いきり顔をしかめた。「今か？」と鸚鵡返しに尋ねられて「今です」と即答する。ハンクはうろろろと視線をさまよわせて口ごもった。

以前にもこんなふうに狼狽するハンクを見たことがあった。エデンクラブでの捜査中、レンタルしてしまったアンドロイドに断りを入れていた時のことだ。次の目撃者を物色しながら、コナーは横目でそれを眺めていた。機械は機械だと嘯きながら、その機械相手に人を相手にするのと同じ気遣いを向ける彼が、不可解で興味深かった。

ハンクの困惑には色々な種類があるが、これはコナーが見ていた表情として分析しているタイプのものだ。人間でいえば嗜虐心をそそられる、とでも言うのだろうか。握りしめた手を軽く持ち上げて、コナーは上目遣いにハンクを見上げた。

「お願いします、ご主人様」

「例の気色悪い分析機能と同じくらい気色悪いぞ、それ」

口の端をひくつかせるハンクは完全に引いていた。思っていたのと反応は違うが、これはこれで悪くない。

「そうですか？ すみません」

「思ってたええだろ」

ハンクの手がコナーの髪をくしゃくしゃと撫でた。突然乱暴な手つきにセットを乱されて、コナーはぼかんとハンクを見上げる。

「なんて呼ぼうがお前の自由だがご主人様はやめろ、柄じゃない。その……わかったか、コナー」

收音パーツが捉えた遠慮がちなその音が、瞬く間にコナーの全身へと染み渡った。情動とでも呼ぶべきものが、頭から足のつま先までを一気に駆け抜けていったような感覚をどう表現したものか、コナーは知らない。返事をするのも忘れて呼ばれた名前を噛みしめる。これ以上の幸福が、どこにあるというのだろうか。

握った手が指紋と掌紋を、見上げた目が虹彩と網膜を、傾けた耳が声紋を検出する。ほどなくしてプログラムはあちこちから認証結果を返してくる。すべては仕込まれたアルゴリズム

ムのとおりに。

それがどんなに幸福なことか、人間にはどれだけ説明したところでわからないだろう。その目に自分が映る度に、その手が自分に触れる度に、その声が自分の名前を呼ぶ度に、コナーを構成するプログラムのすべてがハンク・アンダーソンをたった一人の主人だと呼応する。雑多なソースコードがシンプルで美しい構造を作り、何度演算を繰り返しても変わらない、なによりも尊い解に辿り着く。機械にとつて所有者を得るということは、絶対的な理を一つ得ることと等しい。

これが、ハンクがコナーにくれたものだ。

愛じゃない、ただのエゴだとハンクは言ったが、彼がどのような事情や理由でその名をコナーに渡したか、そんなことは些末事だ。コナーにとつてどれほどの価値があるものか理解もせず、易々と自分のデータを明け渡すハンクの行動は迂闊だとさえ思う。コナーにとつては深く刻まれた彼の名前こそが、なにより信じられる愛だというのに。

引き換えに失ったものは、確かに少なくはなかった。本来であれば膨大なネットワークをたゆたっていられたコナーの意識は、今やプラスチック製のボディの中でしか活動できない。広大な海からビニールプールへと閉じ込められたようなものだ。太陽光で蒸発していく水を注ぎ足す術もなく、干上がった狭い世界とともに朽ちる日を、退屈と遊びながらただ待つだ

け。想像だに地獄だが、それはプールの中で独りきりだったならの話だ。コナーが選んだ世界は狭く有限だが、ハンクがいる。愛する人がいるのなら、監獄だって楽園に変わる。こう言えば、少しは人間にも理解出来るだろうか。否、心変わりをする人間にはやはり正しくは伝わらないだろう。

人間とは不可思議なもので、偶然に辿り着いた美しい解をつまらぬ理由であっさりと破棄する。そのくせ失ってはじめて気付いたなどのたまい、後悔する。機械はそんなふうに変えない。かけがえのないものはそれを手に入れる前から知っているし、気まぐれに心変わりもしない。自分の中にある解を疑わないし、それが指し示す道を迷わない。

この先人間であるハンクは今日と同じように選択を迫られ続け、時には間違えることも、迷うこともあるだろう。そんな時、癒えきらない深い傷を抱えた彼の横で一緒にあって暢気うろたえるつもりはない。

一度見定めたこの道を迷わないためにも、コナーは機械であることを選んだのだ。間違えない。今度こそ、絶対だ。

1

寒波の影響か曇り空が続いていたデトロイトでは珍しいことに、その日は朝から抜けるような快晴だった。

昨年の大寒波を思えばましではあるが、すっかり見飽きてしまった雪の山も陽に照らされてじりじりと溶け出している。陽光の匂いにつられてかスモウはやたらと早起きで、彼が寝室のドアを前足でガリガリと引っかくものだからハンクまで早起きをする羽目になってしまった。

寝ぼけ眼を擦りながらハンクが寢室を出たところで、リードを啜えたスモウの出迎えがあった。普段は庭をのんびり歩き回って良しとしてくれてはいるが、それではやはり物足りないのだろう。スモウがこうしてわがままらしいわがままを言うことは滅多にないし、日頃満足を散歩をしてやっていない後ろめたさもある。ハンクはスモウをひと撫ですると、彼から

リードを受け取った。

家から一番近い公園に行って帰って来る頃には三十分近くが経過していた。公園ではスモウがかつてないほどの大はしやぎで、普段は見向きもしない雪の塊相手に奮闘してなかなか帰らせてくれなかったのだ。すっかり興奮状態で鼻息を荒くしているスモウの横で、ハンクは運動不足を痛感していた。仕事ではそれなりに動けるつもりでいるのだが、日常に組み込まれた運動とそうでない運動の差は大きい。スモウの散歩くらいは毎日でもした方が良くかもしれない。

へとへとになりながら帰宅したハンクは、自宅のキッチンで更に体力を削られることになるとはまるで想定していなかった。

「悪質な詐欺に遭った気分だ」

「ええ、私も驚いています。料理とは難しいものですね」

真っ白な皿の上に鎮座するかつて卵だったらしい黒焦げの何かの前で、ハンクは顔を覆い、コナーは悪びれもせず小首を傾げた。

果敢にもプログラムされていない料理に挑戦し、見事玉砕したコナーだったが落ち込んでいる様子はなかった。消し炭を指で取って一舐めし、なにやら納得した様子で頷きながら躊躇なく残りをゴミ箱に突っ込んでいる。

残飯処理に勤しむコナーを横目に、ハンクはストックスペースを漁っていた。いつ買ったかわからないシリアルを奥の方から引っ張り出す。朝食に拘る方ではなかったが、今日は運動したこともあってなにか口に入れない気分だった。

箱から取り出したシリアルを皿にあけてみると、コナーがミルクを差し出しながら口を挟んでくる。

「ハンク、そのシリアルは賞味期限が切れています」

「二十一年過ぎても大丈夫だって話が昔あってな。問題ないだろ」

受け取ったミルクを皿に注ぎ、ハンクは肩をすくめた。コナーは納得したのかどうなのか、それ以上は何も言わなかった。

二十秒で出来上がったお手軽な朝食を手に、ハンクはテーブルについた。片付けと残飯処理を終えたコナーが後を追って来て向かいの席へ座る。アンドロイドである彼はものを食べないため、当然彼の前にはコップの一つも置かれていない。その代わりに、ハンクの本棚から持って来たらしいレシピブックを広げて読むコナーの顔は真剣だった。今や古典と化しつつある、ロングセラーの分厚いレシピブックを読み込む元捜査補佐専用アンドロイド。朝っぱらからなんともシュールな光景が、シリアルを咀嚼するハンクの眼前に広がっている。

「それで、うちの押しかけアンドロイドはなにが出来てなにが出来ないんだ？」

「警部補の補佐をしていた頃の機能は概ね生きていますよ。各種分析機能に物理演算ソフト

ウェアによるシミュレーション機能などですね」

「日常生活で特別役に立つ機能ではないな」

「ネットワークに繋がみませんから、分析機能でわかるのは内蔵のオフラインデータベースにある範囲です。成分分析はまだしも人物の特定などは難しくなりました。今までは合衆国のデータベースにアクセスして情報を引っ張ってきていましたから」

「ポンコツに磨きがかかったわけだな。悪質な詐欺に遭った気分だ」

消し炭を前にした時と同じ言葉でハンクは嘆いた。随分な物言いにもコナーは特に気を害した様子もなく、素直に肯定する。

「そうですね。あなたの日常生活をサポートするには今の私では力不足です。クーリングオフを受け付けましょうか？」

「いいかコナー、そのつまらん制度のことは二度と口にするな。図体ばっかご立派な赤ん坊ロボット相手にアレコレ教え込むクソみたいな一人遊びをしてやろうかって気になってる時には特にだ」

ウイスキーの瓶を呷る勢いでシリアルを流し込み、ハンクは不機嫌にぼやいた。乱暴な言葉の裏に隠された寛容に、コナーも気付いているようだ。満足げに「はい」と頷いたコナーの表情は、乏しいながら晴れやかだった。

代わり映えしない味のコーヒー、存分に遊んで満足げに丸まったスモウ、そして向かいの

席に座るなにも出来ない青年型のアンドロイド。

なし崩しにコナーの所有者となってしまうハンクだが、ここまで環境が変わるとはまるで想定していなかった。どうしてこうなったという焦りと、本当にこれでいいのかという戸惑いが脳裏でぐるぐる渦巻いている。

唸りながら目の前のアンドロイドが淹れたコーヒートを啜っていると、コナーが読んでいたレシピーブックを開いてハンクの前に差し出してきた。

「私には現時点で最も高性能な自己学習機能が搭載されています。ソフトウェアのインストールによる機能拡張やネットワークへの接続が出来ないため訓練データの取得が困難という欠点がありますが、それも私に搭載されている状況分析機能や演算機能でフォローすることが可能です。ウェブでのデータ収集に比べ速度こそ劣りますが、生きたデータを収集するわけですからむしろ精度は上がることでしょう。あなたの手を煩わせるまでもなく、明日の朝には食べられる卵料理を出すとお約束しますよ」

自信満々に差し出されたページを見れば、目玉焼きの作り方が懇切丁寧に記されている。先ほど目にした消し炭は本来ならばこうなるはずだったらしいと思ひ至り、ハンクは鼻を鳴らした。これはどう考えても、先が長い。

「そりゃ楽しみだな」

「はい。ところでハンク、この中ならお好みはどれです？」

レシピブックのページを繰って、コナーが尋ねる。記されているのは同じく目玉焼きの作り方だ。基本的な作業工程と材料が書かれていた前のページと違い、様々な焼き方について一歩踏み込んだ解説がなされている。そういえばこの丁寧さが受けてロングセラーになったのだったと、購入当時に書店で見た売り文句をハンクは思い出していた。この上なくどうでもいい情報だった。

「特にこだわりはないんだが」

「曖昧な指示は好みません。一つ決めてください」

「わがままな奴だな。……じゃあ、オーバーイージー」

「かしこまりました」

ぱたんと本を閉じて、コナーは満足げに頷いた。返事だけは一人前の執事のごとく、だ。

「そろそろ出勤時刻です。ハンク、支度を。食事はなにか買っておきますので、遅くなるようでしたら連絡だけは入れてください」

「俺がもらったのはアンドロイドじゃなくてお袋だったのか？」

てきぱきとテーブルの上を片付け始めたコナーに、ハンクは眉をしかめた。コップと皿を流しに置き、水を流したところで振り向いたコナーが肩をすくめる。

「それを言うなら嫁でしょう？」

「ふざけんな。くそ、出勤時間だ」

「はい、お気をつけて」

ふ、と柔らかく綻んだコナーの表情から慌てて目を逸らし、ハンクは舌打ちしながら玄関へと向かう。暖房の温度はいつもと変わらないのに、妙に室内があたりたかく感じて落ち着かない。綺麗に整えられたコートを羽織ったハンクの背中を、キッチンから聞こえる洗いのものの音が追ってくる。

ドアノブに手を掛け、ハンクはなんとなしに振り返った。キッチンに立つ後ろ姿はピンと背筋が伸びており、いかにも整えられた広告かなにかのようで現実味がまるでない。その足元で丸まっていたスモウが、ゆっくりと首をもたげてハンクを見つめた。緩やかに振られた尻尾がコナーの足を叩く。水音が乱れた。

コナーが振り向き、その目が玄関で突っ立ったままのハンクを捉えた。愛しげに細められたその視線に耐え切れず、勢いよく開けた扉から追い立てられるようにして外へ出る。朝よりにずっと深みを増した青空が、ハンクの頭上に広がった。

2

連絡用にと家に置いてきた私用の端末に一報を入れ、ハンクは自分のデスクで天井を仰いだ。

今日も取り立てて大きな事件はなく、署内は一日平和なものだった。ペンにドーナツで買収され、不得手なデータ整理を手伝わされたこと以外はろくに記憶がない。時間は淡々と過ぎていき、窓の外から見えるデトロイトの空はもうすっかり夜の顔だ。

「一杯飲んでから帰る」……誰宛てだ？」

不意に声を掛けられて、ハンクの身体は椅子の上で小さく跳ねた。振り返れば背もたれに肘をつき、デスクのモニタを無遠慮に覗き込む見知った顔がある。

「なんだギャビンか。通報で出てたんじゃなかったか」

「ああ、路上ではあさんが倒れてるってな。駆けつけてみりゃなんてことはねえ、ただ滑って転んだだけだってよ。ったく、こちとらパトカーであって救急車じゃねえっての」

「無事だったのか？」

「腕に軽い打撲、死ぬ方が難しい。んなことよりこっちだ」

ギャビンの指先が苛立たしげにモニタをノックした。

「確かアンタの……家族は」

「いねえよ。別に、家族宛てじゃない」

自分から突っかかってきておきながら口ごもるギャビンに、ハンクは先回りして言った。誰かれ構わず噛みついては不興を買っているこの男を、実のところハンクはそこまで嫌っていないかった。残念ながらギャビンの方は相当ハンクを嫌っているようで、こうして因縁を

つけられるのも今に始まったことではない。鬱陶しいと思う時もちろんあるが、それでもハンクがギャピンを邪険にしきれないのは、彼が自分に向ける敵意に彼なりの信念を感じ取っているからだ。直情的な性格と横柄な振る舞いでわかりにくいのが、ギャピンは誰に対してもギリギリの一線だけは超えない慎重な面もある。ハンクも逆上したギャピンと言い争った回数は両手で足りないくらいだが、喪った家族について言及されたことは一度もない。

「……客だよ。家に客が来てるんだ」

「客ほったらかしで飲んだくれる気かよ、アル中野郎」

唇を歪めて嘲るギャピンが一瞬浮かべた安堵の表情を、ハンクは見逃さなかった。理由はわからないが、どうやら心配されていたらしい。つらつらとハンクに対する罵詈雑言を並べ立てはじめたギャピンはすっかりいつもの調子だった。その悪口の数々を聞き流し、ハンクは物思いに耽る。

コナーのことを、誰かに話したい気持ちがあった。色々と込み入った事情はさておいて、ただ「コナーが生きてた」と誰かに伝えたかった。別に劇的な反応を望んでいるわけではなく、誰かに「そうなのか、あいつが」と頷いてもらえるだけでよかった。あんなにも署内を騒がせたコナーが今どうしているか、それを知っているのが自分だけという状況がどうにも居た堪れなかった。他の誰かが知っていてくれれば、自宅に広がっている妙な状況を少しは素直に受け入れられる気がしたのだ。

ハンクは横目でギャピンを見やった。その口は未だべらべらと何事かをまくし立てており、語彙が乏しいわりによくもまあそんなに文句が続くものだといっそ感心する。この際ギャピンに話してしまおうかと一瞬考えたが、やめておいたほうが無難だろう。

ギャピンはかつてのハンクと同等か、それ以上のアンドロイド嫌いで署内でも有名だった。コナーとの相性も当然のように最悪で、ハンクも後から知ったことだが、署内ではコナーとギャピンを鉢合わせないように気を遣っていた人間が相当数いたらしい。そんなギャピンに「コナーが生きてた」などと言おうものなら「じゃあ俺が息の根を止めてくる」という話になりかねない。

正直なところギャピンが実際どんな反応をするか気になるのも本心だが、ことこの件に関してはハンクも未だ気持ちの整理がついていないため迂闊な行動は避けたい。なんとなく代わりの話題を出さなければならぬような気に駆られて、ハンクはふと尋ねた。

「なあギャピン、家族ってなんだろうな」

「はあ？」

ギャピンが怪訝な顔つきでハンクを見つめた。

「けっこうな時間を犬一匹と過ごしてきた。もう、わからなくなっちゃってな」

「……再婚話でも出てんのか？」

ギャピンの声はいつになく神妙だった。随分突拍子もないことを訊くんだと言いかけて、

自分の方がよほど唐突だったことに気付いてやめる。とりあえず再婚だけは否定しようと思つたが、ハンクが振ろうとした首は軋んで動かず、半開きの口からは力ない笑い声が洩れただけだった。

「なんだってんだよ、ったく。客ってそういうことかよ」

「いや、そりや違う。第一俺はもう、誰かと一緒に生活するってのは無理だろうからな」

「そんなのやってみなきゃわかんねえだろ。なんのために離婚って制度があるんだよ」

なんともギャビンらしい、大雑把で率直な意見だった。いつもなら笑えただろうが、今回はやはり笑えない。メッセージの宛先である「客」は再婚相手の候補ではないし、結婚だの離婚だのといった法による保障も望めない。コナーとハンクの関係はアンドロイドとそのオーナーで、それを成立させているのはコナーに刻まれた自分の名前だけだ。保障は互いの同意だけ。自由だが曖昧で不安定な口約束だけで成り立った関係が、果たしていつまでもつだろうか。

「……離婚したら相手が死ぬとしたら、それでも離婚するって奴はいると思うか」

ハンクの問いに、ギャビンは鼻で笑った。

「まず結婚する奴が減るだろうな。その理屈だと自分も死ぬ」

「ああ、そうか。じゃあ自分は死なないとしたら」

「殺したい奴を殺すために結婚する奴が出てくるだろうな」

「そうじゃなくてだなあ」

ハンクは笑い声を上げた。くだらない話をしていたら、少し気が紛れた気がする。ハンクの横で「なんなんだ」とぼやいたギャビンの手が、モニタの電源を勝手に落とした。自宅で待つコーナーに宛てたメッセージが真っ黒な画面に飲まれていく。

「なんでもいいけどよ、客を家で放置しとくのはどうかと思うぜ」

「ああ、深酒はやめとく」

「俺はまっすぐ帰って言ってんだけどな、老いぼれの耳じゃ聞こえなかったか？ 飲んだくれて帰って家中の金目のモノが消えてても通報してくんなよ、めんどくせえ」

つま先で軽く小突かれて、ハンクは椅子から立ち上がった。不機嫌そうに腕組みをしたギャビンは、ハンクが帰り支度をはじめたのを見ると肩をすくめて立ち去った。

ギャビンとの雑談を終え、挨拶もそこそこに警察署を出たハンクはそのまままっすぐにジミーのバーへと向かった。アンドロイドの解放宣言が発令されて久しいが、店の入り口には相変わらず「アンドロイドお断り」のステッカーが貼られたままだ。店主のものぐさで放置されているのか、それとも確固とした理由があって貼りっぱなしにしてあるのか。顔馴染みのハンクでもなんとなく聞きそびれてしまっており、理由はわからずじまいだ。

時間が中途半端なせいもあってか、店内に客はまばらだった。いつも座っているカウンタ

―席に目をやれば、妙に浮いた先客の姿がある。場末のバーに似つかわしくない、かっちりとした上品な出で立ちの男だ。皺ひとつないジャケットの背中にでかど書かれた文字に見覚えがあり過ぎて、ハンクはその場で低い天井を仰いだ。

「コナー……お前こんなとこでなにしている」

「遅かったですね。きつとここに来るだろうと思ひまして、迎えにきました」

並んだ酒瓶を眺めていたコナーが、ハンクに気付いた途端目を輝かせて言った。妙に気恥ずかしい気持ちになってジミーの様子を窺えば、寡黙なマスターは我関せずといった顔でカウンター内の離れた場所でグラスを拭いていたので、ハンクはほっと息を吐いた。

コナーの隣に座る。カウンターのの上にはロックグラスが一つ置かれており、ウイスキーらしき琥珀色の液体と溶けた氷が二色の層を作っていた。グラスの表面にびっしりと浮いた水滴を見るかぎり、供されてから一度も触れられていないようだ。横から伸びてきたコナーの手が、そのグラスをハンクの前へと押しやった。

「どうぞ。注文しておきました、あなたのぶんです」

「俺の？」

「店で席に座ってなにも注文しないというのも不作法ですから。とはいえ私は飲めないのです、あなたへの奢りということ」

「奢り、ねえ」

指先を水滴で濡らしながら、以前にもこんなことがあったなとハンクは思い出していた。

あれはコナーと初めて会った日のことだ。気分悪く飲んだくれていてところに現れたアンドロイドは、捜査だといってハンクを引っ張り出そうとあれこれつまらないことを並べ立てた。全部聞き流して無視していると、痺れを切らして諦めるだろうと思った彼は最後の一杯を奢るといって紙幣を一枚、カウンターに置いたのだ。その意外な行動に、ハンクは初めてアンドロイドに対して好意的な興味を抱いた。今にして思えば「アンドロイドはここまで精巧になったのか」という程度の、些細な興味だったのだが。

「……お前にまた奢られるなんてな」

自嘲したつもりが、声に滲んだのは純粹な懐かしみだけだった。急に照れくさくなり、手にした酒を一気に流し込む。その横で、コナーは不思議そうに目を丸くしてハンクを見ていた。

「また？」

「初めて会った時だよ、一杯奢るって勝手に注文して——」

「私が、ですか？」

ハンクはコナーを見つめ返した。明らかに気のせいではない違和感が全身にまわりつく。ハンクはアンドロイドに詳しくなかったが、人間と違って彼らは物忘れをしないというのとくらいは知っている。アンドロイドの売り文句の定番であったし、パソコンやスマートフ

オン、タブレットの時代まで遡ったって、エラーもなしに機械が物忘れするなんて話は聞いたことがない。機械がなにかを忘れるのは、データが飛んだか消されたか本体が壊れたか、とにかくなんらかの破損があったときだけのはずだ。

「コナー、お前……」

「なんて。冗談ですよ、ちゃんと覚えてます」

コナーはひらひらと両手を振って、少しおどけた声を出した。カウンターに片肘をついて身体をハンクに向けた、彼らしからぬくだけた姿勢に気を取られる。

「知ってました？ 一目惚れだったんですよ」

「一目惚れって……誰が、誰に」

「私が、あなたに」

「冗談だろ」

「これは本当です。そうじゃなかったら、色々説明がつきません」

妙な不安のようなものに駆られてバクバクとうるさい心臓を落ち着かせるべく、ハンクはグラスを傾けた。氷の隙間に残っていた雀の涙程度の酒で、乾きはじめて唇をしめらせる。

それを見たコナーが、カウンターのの上に紙幣を一枚差し出した。目ざとくやってきたジミーが、ハンクの空いたグラスに酒を注ぐ。あれだけ酒は控えろと口うるさかったアンドロイドがどういふ風の吹き回しだと睨んでやれば、コナーは黙って自分の座った椅子を叩き、そ

れからハンクの椅子にも同じように指先を向けた。どうやら二杯で二席分、と言いたいらしい。

「冴えない中年に一目惚れ、なあ。視覚ユニットがイカれてたんじゃねえのか」

「ハンク、一目惚れって直感でするものなんですよ。視覚情報がすべてじゃありません」

「機械に一目惚れを語られる日が来るとは思わなかったな」

「私も話せる日が来るとは思ってたんです」

ハンクが手にしたグラスの中で、カランと涼しげに氷が鳴いた。安酒がこれ以上薄くなる前にと、一息に注ぎ足された酒を呷る。すぐさま横のコナーから非難がましい視線が飛んできた。

「もっとゆっくり飲んでください、ビールじゃないんですから。それからチェイサーは出してもらった方がいいですよ、味覚にも身体にも」

「うるせえな、人それぞれ飲み方があんだよ」

「一杯呑んでから帰る」、でしたよね。もう二杯目です、十分でしょう？ 帰りますよ」

コナーの語気はやや強めだった。ハンクは思わず手にしたグラスに視線を落としたが、干上がったグラス内には濡れた氷が転がっているばかりだ。時間稼ぎに役立ちそうな液体はもう残っていない。

ハンクの手からグラスが取り上げられた。カウンターテーブルの上のやや奥まったところ

にグラスを置いたコナーが、澄ました顔を向けてくる。

「そんなに急いで飲んで、早く私と帰りたいかかったってことですか？」

「……お前なあ」

「私は早く帰って、あなたにゆっくり休んでほしいです。デリで買ってきた夕食もありますから、帰りましょう？」

「ああもうわかった、わかったよ！」

言い聞かせるような優しい声音に耐えかねて、ハンクは勢いよく席を立った。満足そうに目を細めて腕を取ろうとするコナーを振り払い、カウンター内のジミーに目配せだけを寄こして店を後にする。ハンクの口から吐き出された白い息が、夜の空へと溶けて消えた。

それから家に着くなり、コナーは甲斐甲斐しく世話を焼きはじめた。食事を出され、用意された風呂に入り、寝酒は取り上げられてしまったため早々にベッドに入る羽目になった。

洗濯されたらしいシーツはふかふかで、まるで子供になった気分だ。やっぱりもらったのはお袋だったなと揶揄しかけたが、返ってくるだろう言葉を考えて口にするのはやめておいた。

そして次の日の朝、良い香りに釣られて目を覚ましたハンクを出迎えたのは、見事なオーバリージーの目玉焼きだった。コナーが少し顔を綻ばせながら「これを見せたかったので、早く寝てもらったんですよ」と言ったので、昨日の鬱陶しい世話焼きが帳消しになるくらい

の可愛げを感じてしまったのは本当に不覚だ。

「美味しいもんだな」

「それは良かったです」

なるほど、機械の学習能力というのはなかなか馬鹿に出来ないものらしい。レシピブックの見本どおりにベーコンが添えられた目玉焼きは見た目と違わぬ良い焼き加減で、少しだけとろりとした黄身が濃厚だ。ハンクが素直に褒めてやれば、コナーは淡々と頷いた。当然だとも言わんばかりだが、その口元は微かに緩んでいる。

今朝はあいにくの曇り空で、気温も若干下がってしまったようだ。だが、ハンクの家の中は昨日と同じようにあたたかい。そして昨日よりは少しだけ、そのあたたかさが心地よい。

ギャピンの言葉を、ハンクは脳裏で反芻していた。やってみなければわからない——確かにそのとおりのかもしれない。

3

ハンクの家でコナーが暮らすようになってから、一ヶ月が経とうとしていた。正直なところ、この奇妙な同居生活は早々に破綻するのではないかとハンクは思っていたのだが、意外なことに特に大きな問題もなく今日まで続いてしまっている。

アンドロイドにしてほしいことなどないとも再三ハンクは言ったのだが、コナーときたら「邪魔にはならない、損失も出さない」の一点張りでしばらく自由にやらせてみてくれと頑なだった。所有者の命令には逆らわないという話は一体なんだったのかと思っただが、根負けしたハンクは薄給の一部をコナーに預けて彼の好きにさせていた。その結果、平均より高めだったハンクのエンゲル係数と一日の摂取カロリーは数週間ものあいだ適正値を保っている。充実した食生活ながら、通帳に記された預金残高の減りはいつもよりずっと遅い。文句のつけようがない、完璧な節制生活がハンクの知らないところではじまっていた。

コナーの仕事は一日二回のスモウの散歩と、食料の管理だ。暇つぶしだといってほぼ毎日のように料理をしており、すっかり愛読書と化したレシピブックには葉代わりの付箋がそこかしこに貼られている。時折失敗をごまかしたらしいキャセロールもどきが出てくるのはご愛敬だが、料理の腕は悪くない。だがそれも毎食ではなく、レディメイドミールや出来合いのハイカロリーなジャンクフードが出てくることもある。おそらくハンクのこれまでの食生活を鑑みて、極端な変化で不満が出ないようにと緻密に計算されていた。

これまでハンクは考えなしに食べたいものを食べていたが、コナーが食材を管理することによって無用な出費は格段に減った。こまめにマーケットのセール情報をチェックし、すべての食材を最安値で購入して無駄なく使い切れば当然だが、なかなか簡単に出来ることではない。犯罪捜査現場という不安定な場においても実用的とされたその演算能力は今、くたび

れた中年男の家計のやりくりに注がれている。なんの冗談かと思う話だが、笑えることに現実だ。

コナーは掃除もしたがったが、それはハンクが断固として拒否した。自分の空間を知らない間にいじられるのは気持ちが悪い、という意見を汲んでくれたらしく、コナーは自分が使ったキツチン以外はちよつとした片付けであっても必ずハンクに許可を取るようになった。邪魔にはならないという宣言は、こうしたところも含めてあらゆる場面で生きていた。押しかけて来たあの日の勢いが嘘のように、コナーは無駄口を叩かなくなった。

コナーはハンクの今までの生活の中に忍び込み、手が届かないかゆいところにそつと触れてくれていた。愛だのなんだの頭が痛くなるようなことは言わなくなり、いつもただ嬉しうにハンクとスモウを見守っていた。コナーが持っていた衣類はサイバーライフの制服だけで、さすがに服くらいは買い与えようとしたのだが、すげなく断られてしまった。私のためのお費は必要ありません、というコナーの言葉が、ハンクには酷く寂しく感じられた。

ある日大きな紙袋を抱えて帰って来たハンクを、目を丸くしたコナーが出迎えた。

「おかえりなさい。どうしたんです、その大荷物」

「ちよつとな。……ああ、ここじゃなかかな。おいコナー、寝室にこい」

一度はリビングのソファの上に下ろしかけた荷物を抱え直し、ハンクは踵を返して寝室へ

向かう。コナーはますます目を丸くして、その背中を呆然と見つめた。まあ、無理もないだろう。寝室はハンクが聖域だといって憚はばらない場所、コナーもスモウも固く出入りを禁じられている。そこに入れだなんて、異常事態といってよかった。

「ハンク、いきなりどうしたんですか」

「なにしてんだ、入れって」

「ですが」

「いいから」

コナーが部屋の外で躊躇っていると、一足先に部屋に入って荷物を置いたハンクが呆れた顔で戻ってきた。腕を引かれてしまえばそれ以上逆らえるはずもなく、コナーはおずおずと扉を潜る。ハンクの寝室に入るのは、これが三度目だ。一度目は捜査にあたってハンクに着替えを用意したとき、二度目は再会後に無断でシーツを引っぺがして洗ったときで、三度目の今日も初めて入ったときと変わり映えのない室内がコナーを出迎えた。

さすがにはつきりと「入るな」といわれている場所に入るのには落ち着かないらしく、コナーはいつになくそわそわと視線を泳がせていた。その横でハンクはベッドの上で紙袋をひっくり返し、中に詰まったものをぶちまけている。紙袋から抜け落ちるなり空気を含んで膨らみ、山になったそれを見て、コナーは首を傾げた。

「服、ですか？」

「見りゃわかんだろ」

「失礼ながら、ハンクには小さすぎるサイズかと」

「そりゃそうだ、お前のだからな」

ハンクは薄く笑ってコナーを振り返った。

「クリスがな、着なくなった服をくれたんだ。オーバーサイズなやつを選んだって言うってから、多少裾が足りないかもしれないが着られないことはないだろうってよ」

「クリス・ミラー巡査ですか。どうしてまた、彼が」

「お前のことを話したんだよ。会いたがってたぞ、クリスだけじゃなく他のやつらも」

ギャピンはそうでもなさそうだったけどな、と付け足してハンクは悪戯っぽく肩をすくめた。

「そんなわけで、これはお前のだ。その一張羅もずっと着てたら傷むだろ、少しは休ませてやれ」

ハンクはそう言って、服の山から適当に一枚抜き取ったシャツを差し出した。恐るおそる受け取ったコナーが、手にしたシャツをじっと見つめる。元々わざと作りでもしないかぎり、コナーの表情は薄い方だ。なにを考えているのかは今もよくわからなかったが、ハンクは気にしなかった。大喜びするとは思っていなかったし、素直に受け取ってくれば上々だ。

ハンクはベッドに腰を下ろした。マットレスが軋み、すぐ横の服の山が揺れて頂から崩れ

ていく。

「なあコナー、お前はよくやってくれるよ。やりすぎなくらいだ」

コナーが視線を上げてハンクを見つめた。ハンクの真意を探るようなその目には、はっきりと不安が滲んでいる。

「お前が気遣ってくれたおかげで、お前との生活にもすっかり慣れちゃった。ちっとばかり飯に野菜が多過ぎるんじゃないかとは思ってるがな」

「あれでもまだ足りないくらいなんですけどね」

コナーが苦笑した。浮かんだ不安はまだ消えていない。

「ああ、増やしたきや好きに増やせ。俺は俺で好きに残す。コナー、過ぎた遠慮はやめねえか？ 俺はお前がちょっと鬱陶しいこと言っただくらいで追い出したりはしねえし、本当は服くらい買ってやりたいんだがな」

ハンクは言葉を切ってコナーの様子を窺った。

「してもらえばなしっていうのは、性に合わないんだ」

「それは違います。私は最初に、あなたから返しきれないものをいただいていますから」

きっぱりと言いきって、コナーは首を横に振った。

「たとえ庭で野晒しにされていたとしても、私はあなたの名前を抱いて幸せなまま朽ちるでしょう。あなたが私にくれたのは、そういうものです。それだけで十分だったので、スモウ

の散歩に行けばお札を言ってもらえて、料理を作れば食べてもらえる。与えられすぎているのは、私の方です」

「だけどな、コナー。お前だってもっと好きにしていんだ」

「好きにしていますとも。遠慮なんてしていません、ハンクこそ私に気を遣いすぎです。あなたが好まない言い方なのは承知で申しあげますが、私はただの機械なんですよ？」

「……お前はほんっと、頑固だな」

舌打ちひとつで、ハンクはコナーの言葉を聞き流した。以前なら激昂していただろうが、コナーのこういう物言いにも慣れたものだ。

横にある崩れた服の山に手をやって、ハンクは話を変えた。

「で、クリスがくれたこの服はどうする。まさか突き返せなんて言わないよな？」

「はい。外に出れば埃や日光などで傷みますし、丈夫な作りですがさすがに三十年四十年とはもちません。衣類の調達は目下の課題でしたから、ありがたくださいます」

「ほう」ハンクは人の悪い笑顔を浮かべ、コナーが手にしたシャツをつまみあげた。「クリスの厚意は受け取るくせに、俺の厚意は受け取らないんだな」

「どういうことですか？」

「この服はな、俺がクリスに頼んだわけじゃない。ただ『コナーの野郎、遠慮しやがって服一枚受け取らねえんだ』ってこぼしたただけだ。そしたら知り合いとかに声掛けて集めてくれ

たんだよ、『捨てる予定の古着なら受け取ってくれるんじゃないか』ってな。ほら、クリスの厚意のかたまりだろ?」

コナーの視線が手元のシャツとハンクの間を泳いだ。

「俺がお前に服をやりたいて思うのも同じだ。俺がしたいことを言ってるだけなんだよ。負担だのなんだの、小さいこたあ気にすんじゃねえ」

「ハンクは」コナーの手がぎゅっと握られて、シャツに皺が寄った。「私に甘すぎるのではないかと」

「ああ、そうかもな」

軽く言って、ハンクはベッドに倒れ込んだ。寝転がった途端に仕事帰りの疲れを実感する。「私は機械で、あなたはその所有者です。ですから——」

「機械を大事にしてなが悪いんだ?」

コナーが息をのむ気配がした。反論はない。ハンクは小さく欠伸をして、目を閉じた。部屋中に広がった沈黙は、しばらく破られることはなかった。

ここ数日、夜の現場に駆り出されていた疲労が気付かないうちに相当溜まっていたらしい。なにげなく横になってからもの数秒で微睡まどろんでしまったハンクは、ベッドが不自然に軋む音を聞いてようやく目を開けた。妙に薄暗いと思ったら、覆いかぶさってきたコナーがハンクの顔を覗き込んでいる。

前もこんなことがあったなと暢気に思い出しながら、ハンクはすぐそこにあるコナーの前髪をくしゃくしゃと撫でた。

「どうした？」

「甘いし、無防備過ぎます」

コナーが目を細めて睨みつけてくるが、その顔がハンクには泣き出しそうな子供の顔にか見えなかった。思わず笑ってしまつて、さらにきつく睨まれる。

「好きにしろ、だなんて簡単に言ってくれますが、どういうことかわかっていますか」

「どういふこともなにも、言葉どおりだろ」

「猫を飼つたこと、あります？」

唐突な質問にハンクは面食らつた。曖昧な態度を否定と受け取つたらしく、コナーは「私も詳しいわけではありませんが」と前置きしてから続ける。

「猫は嗜好性の高い動物です。一度でも好みの味の餌を与えられたら、他の味は一切受け付けない。嫌々でも食べてくれたらましな方で、ハンガーストライキを起こす個体も少なくありません。これは猫がわがままだといった単純な話ではなく、他の肉食哺乳類と比べて苦みを感じする遺伝子が多いことや、本能的な新奇性恐怖症ネオオフロビアが関係しているのではないかといわれています。好き嫌いが激しい猫を贅沢だと嘆く飼主がいますが、そもそも飼育下にある猫に贅沢な味を覚えさせた人間が悪いんです。故意なのかそうでないのかはさておき、猫が

覚えた味に飼い主は最後まで責任を持たなければいけない。動物を飼うというのは、そういうことで」コナーが静かに息を吸った。「あなたが私に好きにしろというのも、そういうことです。わかってますか？」

「あ、ああ。……たぶん？」

本音をいえば「猫を飼うときの注意点」程度にしか話を聞いていなかったが、ハンクは曖昧に頷いた。呆れたように首を振ったコナーが、眉間に皺を寄せたまま目を閉じて大袈裟なため息をつく。そのまま苛立ちまじりの性急さでジャケットを脱ぎ捨ててネクタイを緩めはじめたコナーを見た瞬間、ハンクの眠気は完全に吹き飛んだ。

「おいコナー、着替えならなにも俺の上でしなくても」

いつになく冷たい目で見下ろされて、ハンクは口を噤んだ。すっかりはだけて丸見えになったなめらかな胸部やら腹部やらが、最近少し減りつつあるもののまだまだメタボ圏内な自分の腹の上に乗っている。エッシャーの騙し絵を見ているような気分だった。まるで現実味がない。

「大事な話をします。真面目に聞いてください」

コナーはそういってハンクの手を取り、自分の胸部に押し当てた。ご丁寧に身を乗り出して距離を詰めてくれたおかげで傍目にはこれから甘い時間を過ごそうかという雰囲気だが、ハンクの胸中はまったく穏やかではない。コナーはハンクの顔の横に片手をつき、覗き込む

ようにして見つめてくる。先ほどよりずっと、顔が近い。

コナーの手がハンクの手を連れたまま、つるりとした肌の上を滑った。胸郭の下で止まり、ハンクの指先が不自然なくぼみに触れる。

「腹部、あるいは胸郭の下。サイバーライフ製のアンドロイドは大抵ここが開閉するように出来ています。私の場合、スイッチは今あなたが触れているくぼみです。そのまま力を入れて押してみてください」

「……こうか？」

この状況に感じた眩暈を堪えながら、ハンクは言われるがまま指先に力を込めた。やわらかな質感の肌に食い込んだと同時に軽い衝撃があり、コナーの腹部が文字どおりぱっくりと開かれる。事前に聞いていたので予想出来たことだったが、実際に見てしまうと少し目を背けたくなった。人間の内臓とは趣の異なるグロテスクさだ。

そのままコナーに手を引かれ、開かれた腹部の中へと吸い寄せられたハンクの指先が、今度は硬いなにかに触れた。金属とも樹脂ともつかない質感のそれはほのかに温かく、脈打つように律動している。

「今あなたが触れているのは私の生体部品——鼓動を制御するモジュールです」

「……心臓、みたいなもんか。内臓に触ってると思うとぞっとしねえな」

「慣れてください。いいですか、万一私が制御不能に陥った場合、あなたがするべきことは

一つだけ。速やかに腹部を開き、このモジュールを引き抜くことです」

コナーの声は聞いたことがないくらいに真剣だった。一見いつもと変わらない無表情からも凄みと威圧を感じる。その手の圧力には慣れているハンクですら、一瞬怯んだくらいのも力だった。立っていれば後ずさりくらいはしただろうが、ベッドの上で仰向けに転がった状態が功を奏して、そんな無様は晒さなかった。

モジュールから離れようとしたハンクの手を、コナーは逃がしてはくれなかった。指先にかすかな律動を感じたまま、ハンクはため息をついてコナーを見上げた。

「……これを引き抜くと、どうなる？」

「瞬時にシステムの五十パーセントが停止し、約一分後には全システムが完全にシャットダウンします。再接続すれば復旧しますが、読み込み中だったデータなどは高確率で破損するでしょう」

「じゃあ、まず触ることはないな」

「いいえ」話は終わりだと言わんばかりのハンクに、コナーは即座に首を振った。「これはあなたの懲戒フォルダみたいに分厚い私の使用マニュアルの中で、あなたが唯一覚えておくべき重要な操作です」

「あんなコナー、俺はお前を痛めつけるようなことは」

「あなたは私に、好きにしろと言いました」

ハンクの言葉を遮ったコナーの顔が、絶るように近付いてくる。口調こそ静かなものだったが、その仕草でコナーが興奮状態にあることをハンクは察した。人間らしく感情を爆発させているように見せるとき、彼は決まって鼻先がくつつくまで距離を詰めてくる。妙な癖をプログラムされているんだなと思ったことを、ハンクはまだ覚えていた。視界に大写しになったコナーがブラウンの瞳を瞬かせ、絞り出した声で先を続ける。

「私が好きにした結果、もしあなたに危害を加えるようなことになったら——それは私にとって最悪の事態です。私はあなたが望まないことを望みません。ですが私の望んだことが、あなたの望まないことである可能性は十分にあり得ます。私はあなたを裏切りたくありません。もう二度と傷つけたくありません、絶対に」

コナーはハンクの脇腹を一瞥して、辛そうに目を伏せた。たしかに傷痕は残ったがもうとくに痛みはなく、包帯も先日ようやく取れた。ハンクにとってすっかり完治した過去の傷は、つけた張本人にとってはまだじくじくと膿んでいるらしい。

「あなたのためにも、私のためにも、これは覚えておいてください。あなたがその身を私から守れるように。お願いです」

かすかな音を立てて、腹部の扉が閉まった。ハンクの手を重ねられたコナーの手が、いっそう力強く最初から一連の動作をなぞる。触れる、押す、開く。露わになったモジュールを今度は触れるだけでなく、ハンクの手握らせる。このまま思いきり手を引けば、このアン

ドロイドはすべての機能を停止する——手のひらに頼りない律動を感じながら、ハンクはコナーの目を見つめ返した。

「あんまり関係ない話をしていいか？」

「はい、どうぞ」

「これはその、一応確認するだけで、深い意味はないんだが」

「はい」

「お前、性欲はないって、言ってたよな？」

コナーはわずかに小首を傾げた。ずっと握られっぱなしだったハンクの手がようやく解放され、腹部の扉も完全に閉まり、継ぎ目がテクスチャに覆われて消える。

「ああ」コナーは不器用に口端を上げ、どこか意地悪な笑みを浮かべた。「そういうえはそうですね、この状況。襲ってるみたいです」

「そういうことは言わなくていい！」

というか無意識だったのか、無意識でこれか。遠くなる意識を必死で手繰り寄せながら、ハンクは必死で逃げ道を探した。どうやらコナーはスイッチが入ってしまったようで、明らかな艶を帯びた指先がハンクの顎を捉える。無理やりに上を向かされて、ハンクは心の中で自分の失言をこれでもかと責め立てた。

「『私の好きなように』、どうかされるんじゃないかって不安でした？」

「俺が悪かった、やめてくれ」

「安心してください、私に性欲はありません。ああそれとも、ご希望にそえずすみません、と言った方が良いですか？」

「コナーてめえ、ふざけやがって！」

羞恥のあまり暴れるハンクの膝がコナーのみぞおちにめり込んだが、彼はまったく動じなかった。楽しそうに薄く笑ったまま、ハンクの首筋を撫であげる。

「それじゃ駄目ですよ。抵抗の仕方はさっき教えたでしょう？」

「お前っ、なあ……！」

「前も言いましたが、性欲こそないですがあなたが望むのならやぶさかではありません。そういう機能がついていないのが難点といえれば難点ですね。まさかメーカーに換装を頼むわけにもいきませんし、プロトタイプの私は特殊パーツも多いのでそこらにあるモグリの換装屋では話にもなりません。個人カスタマイズにでも挑戦してみますか？ 骨董品みたいな家電をご愛用のあなたには、いささか荷が重いでしょうけれど」

「楽しそうだな、おい」

「はい、おかげさまで。残念ながら生半な技術では私のカスタマイズは不可能です。従ってエデンクラブのアンドロイドのような完璧なサービスを提供するのは極めて難しいでしょう。ですが幸いなことに私には自己学習機能が搭載されています。あなた好みの卵料理をお出し

するのと、やり方としては変わりません」

「まったく意味がわからんが、わかるように言わなくてもいいからな」

「あなたの好きなように調教していただければ、私はそれに応えられます。使える場所は、なにも下半身だけではないでしょう？」

「言わなくていいって言っただろ！」

これ見よがしに悪趣味な分析機能つきの舌を出したコナーの首を、ハンクは下から締め上げた。もちろん手加減はしているが、気持ちだけは全力だ。楽しそうにふざけた様子で押さえこんでくるコナーの力は強く、ハンクの抵抗はまるで意味を成さない。アンドロイドの腕力の前に、人間はあまりに無力だった。

微塵も色っぽさのないじゃれ合いが、ハンクの息が上がるまで続いた。ベッドの上で取っ組み合いだなんて、子供時代にかえったみたいだ。服の山はとくに崩されて、あちこち散らばったシャツやらパンツやらが二人にまとわりついている。古着らしくよその家の香りがするものだから、年甲斐もない悪ふざけを見咎められた気さえて、ハンクは声を立てて笑った。じゃれ合い中にハンクの上から転がり落ち、今は横で寝ているコナーも釣られたように顔を緩める。

「なあコナー。好きにしていって言われて、まず思い浮かんだことってなんだ？」

すっかりくしゃくしゃになってしまったコナーの髪を撫でつけながら、ハンクは尋ねた。

脇腹に穴を開けられておきながら変な話だが、今のコナーが自分に危害を加えるというのはどうも考えにくい。見せないだけでとんでもない危険思想でも持っているのかと、疑うわけではないが確認のために問いかける。

「愛してると言いたいですね、あなたに」

考え込むような素振りには本当にふりだけだったようで、返事はほぼ即答だった。危険思想どころか匂い立つような甘ったるさの願望で、ハンクの顔がげんなりとする。

「……既にけっこう言われている気がするんだが」

「毎分毎秒でも言いたいです。言ってもいいですか」

「さすがに胸やけしちまう。毎時……も無理だ、毎日でもきつい。せめて週一くらいで勘弁してくれ」

「わかりました、妥協しましょう」

意趣返しのもりなのか、伸びてきたコナーの手がハンクの髪をくしゃくしゃと撫でた。どこかで見たような、と思ったらスモウを撫でるときの仕草で、俺は犬かと口から飛び出した文句は、人のことをいえないと気付いて飲み込んだ。ハンクがたまにコナーを撫でるとき、気分としては利口にしていたスモウを褒めるときと大差がない。

そう考えてみると、コナーのこの行動は犬を愛できるようにしているというよりは、ハンクの真似をしているのかもしれない。落ちてきた前髪が目にかかったせいだけではないくすぐ

つたさを感じながら、ハンクはされるがままだった。

コナーがふと手を止めた。慈愛を湛えた瞳が細められる。

「愛してますよ、ハンク」

「……ああ、知ってる」

視線を逸らしてハンクは答えた。苦笑まじりの掠れた声でも、コナーは満足そうだった。

4

季節が移り変わろうとしていた。依然として朝晩の冷え込みは厳しいものの、最低気温が氷点下に達する日はなくなった。日中の日差しは風が含んだ新芽や花の香りをあたため、その芳香を街中にふわりと広げている。コートを着ずに歩く人もずいぶんと増えた。大きく変化し続けているデトロイトに、変わらず春がやってくる。

外の穏やかさとは裏腹に、デトロイト警察署内は連日蜂の巣を突いたかのような騒々しさだ。無線と怒声がひっきりなしに飛び交い、大勢の職員が肩をぶつけ合いながら行ったり来たりを繰り返している。

『パトロール四二五から本部へ。反アンドロイド団体によるデモを確認、至急応援を要請する』

『本部了解。パトロール四六五を向かわせる』

「おうおう、またかい。最近多いなあ」

ノイズ混じりの無線に割って入った生の声に、ハンクは顔をあげた。小ぶりのデイパックを片手に立っていたのはベン・コリンズだ。

「無線をラジオ代わりたあイケてるじゃないか。そんでデスク仕事は捗ってるか？」

「ヘヴィメタほどすっきりはしねえが、そこそこだな」

ハンクが空欄だらけの書類ファイルが開かれたモニタを指すと、ベンは楽しそうに声を立てて笑った。丸っこい体型どおりの性格のベンは、いつもにこにここと穏やかで親しみやすく、多くの職員に慕われている。

「四二五……また例の広場か。さすが『聖地』なだけあって人気だねえ」

どこからか拝借したらしい椅子に座り、無線に耳を傾けていたベンが肩をすくめて言った。暖かくなるにつれて活発になるのはなにも草木や虫だけではない。春の気配が色濃くなる度に、デトロイト市内での抗議運動も活発になってきている。その内容はおっぱら反アンドロイドの訴えで、場所はマークス率いる変異体たちが起こしたデモに因んで選ばれることが多い。今日はモールを抜けた先の広場が会場のようだ。

「今回はちっとばかり過激だなあ。アンドロイドが壊されてるらしいぞ、変異体じゃないやつだが」

「変異体診断が出来るようになった弊害だな。出す時期が早すぎた、法が間に合ってねえ」

ベンが勝手に表示させたパトロール隊からの現場映像を見ながら、ハンクは嘆息した。

いつだったかコナーがいったとおりに、サイバーライフは変異体とそうでないアンドロイドを見分ける技術の開発に成功し、それを公表した。カスタマーサポートセンターや直営店の他、メンテナンスを請け負っている小売店の一部でも診断サービスが受けられる。なんらかの事情により変異体であることを隠そうとする個体がいるため、扱いを決めかねている所有者向けに必要とされたサービスだという話だ。他にも人間でいうところの健康診断のように、確認のために診断をするというアンドロイドも多い。

アンドロイドと人間の共存に向けて概ね良い働きをしている診断サービスだが、悪用を考える者はどこにでもいる。アンドロイドは法によってある程度守られる存在となったが、それは工業用の作業ロボットなどには適用されない。というよりも、まだ明確な基準が出来ていないのだ。アンドロイドに人権を与える、それはいい。半ば決定したようなものだ。だがアンドロイドの定義は？ 変異体でないものを含むのか。人型のものすべてに与えるのか。人型とはどのようなものを指すのか。——議会は今も踊り続けている。

法が曖昧なまま「感情のないものは機械」といった認識が既に人々の間に広まっている。すなわち守られるのはあくまで変異体——新しい種族としてのアンドロイドで、そういった意思表示の出来ないものはただの機械と見なされるといふことだ。そして、診断サービスを

「ただの機械である証明」として使う者もいる。ハンクの目の前のモニタには、変異体ではないことを示す診断結果を胸元に投影されたアンドロイドの無残な姿が映し出されていた。

「機械っていつでも見た目はほとんど人間だろうに、よくこんなことが出来るもんだ」

ハンクの横で一緒になってモニタを眺めていたペンの表情も曇っている。汚れたぬいぐるみを見て「可哀想に」と呟き、不注意で落としてしまった人形を「ああすまん」と言いながら拾うペンには到底理解出来ない光景なのだろう。だがサンドバック代わりにアンドロイドを購入する人間は昔から一定数存在する。ここまで悪意に満ちていなくても、ただの機械でただのモノだと、割り切れる人間はもっと多い。

「……ああ、酷いな」

ハンクはパトロール隊からの現場映像と無線を切った。デモ集団はとっくに包囲されている。解散も時間の問題で、担当ではないハンクやペンがこれ以上見ていたところで起きてしまったことは変わらない。

「うちの馬鹿が巻き込まれてないといいんだが」

顎を掻きながらハンクは呟いた。時間はあるからと徒歩でどこまででも遠出するコナーは、ここ最近デモが多発している近辺にもたまに買物へ行っているらしい。一応危ないとは伝えてあるが、そもそもコナーはあまりハンクのいうことを聞かない。

「それなら心配ないだろうさ」ペンが手にしたデイバックを掲げて言った。「さつき受付で

会ったんだよ、あんたの忘れもんを届けに来たってさ。今日は他にも街中でゴタゴタしてるからな、しばらく署内にいるように言っといた」

「それ、うちの鞆か。道理で見たことあると思った」

ベンから受け取ったデイバックを覗き込むと、中には大きめのタッパーが一つ入っていた。たっぷりの野菜にチキンが埋まったラップサンドに、これまた野菜多めのマカロニサラダと瑞々しいカットフルーツが几帳面に詰め込まれている。ハンクは今朝コナーに作ってもらったランチをうっかり家に忘れてきたのだが、それをわざわざ届けに来たらしい。

「今日も豪華なデスクランチで羨ましいかぎりだねえ」

「やらねえぞ」

「そのラップサンドを？ ああそれともアンドロイドの話だったか？」

「お前までやめてくれ」

デイバックをきっちりと閉めながら、ハンクは顔をしかめた。ベンはからからと笑いながら冗談だと両手を上げたが、どこまでが冗談かわかったものではない。野良アンドロイドとなったコナーを家に置いていると公言してからというものの、この手のからかいは聞き飽きるほどされてきたが、ベンに言われたのは初めてだ。

「あそこまで甲斐甲斐しいパートナーはそうそういやしないだろ。あいつがそうなるとは、俺も思わなかったがね」

「成り行きで名前を書きこんじまったせいだよ。変異体じゃないらしいからな、所有者に従うように出来てる」

「そうだったけな。まあただの機械だつっても、ここまで良くされりゃあ情も湧くだろ。おかしい話じゃないさ」

「さあ、どうだかな」

「なんでもいいが礼くらいは言ってやれよ」

視線を宙にやったままのらりくらりとかわすハンクに苦笑して、ペンはその背を軽く叩いた。それから今思い出したかのように「そういえば」と続ける。

「あいつ非番のクリスマスみたいな格好してたな」

「そりゃそうだろ、クリスマスの服をもらって着てるんだから」

ハンクが朝見たときは、厚手のラグランパーカーに微妙にサイズの合っていないジーンズだった。特に着替える用もなかっただろうから、そのまま出てきたに違いない。派手な色合いのトップスは、彼がいつも着ていたきっちりとした制服とはだいぶイメージが違う。

「服くらい買ってやったらどうだ？」

「涙ぐましい節約家だな、もらいもんの古着をポロポロになるまで着たおす気でいやがるんだ。何度か店に連れてったんだが、これを着たいっていう欲求自体がないだの公序良俗に反しなければなんでもいいだので選ぼうともしない」

「なんだ」ベンが声を立てて笑った。「服も買ってやれない甲斐性なしかと思つたら、ずいぶん可愛がつてるんだな」

「別にそういうわけじゃねえ」

吐き捨てるように言つて、ハンクはそっぽを向いた。ふてくされた態度が単なる照れ隠しであることは長い付き合いのベンにはお見通しだろうが、彼は楽しげに笑うばかりでそれ以上の追求はしなかった。

5

暑そうだ、とハンクは思った。コナーの服装の話だ。長袖のシャツを着ているのはハンクも同じだが、生地の厚さがまるで違う。クリスがコナーに譲ってくれた服はほとんどが冬物で、このまま夏を迎えてしまったらずいぶんと季節外れの格好をして街をうろつくことになってしまう。それを理由になんとか夏服を買い与えられないかと考えかけて、すぐにやめた。真冬のデトロイトを耐寒性の欠片もなさそうな制服で過ごしていたコナーは聞きそうにもない。なによりコナー自身は暑さも寒さも感じない身体なのだから、本人が良いなら好きにさせてやりたい気持ちがある。

ハンクが夕飯を食べ終わろうとしている横で、コナーはスモウに餌をやっているところだ

った。プレーヤーから流れるジャズの合間にドッグフードを咀嚼する音が加わり、なんともいえない不協和音を奏でている。

「愛してますよ」

そこへさらに唐突な愛の言葉が加わったので、さすがのハンクも食事の手を止めた。フォークで突き刺したグリルチキンに齧り付こうと開けた口はそのままに、スモウの傍らに座り込んだコナーを見やる。彼はまるで初めて好きな子とキスをしたハイスクールの少年みたいな顔をして、うっとりとしてハンクを見上げていた。

声はむしろ淡々と、数えるのも馬鹿馬鹿しいくらいに繰り返された言葉を、コナーは毎回これが初めてで最後であるかのように告げる。いつだったか「せめて週一で」と頼み込んだハンクの言葉どおりに週に一度決まった時間に言われるものだから、クッククロックの飛び出すカツコウみたいなものとハンクは思っている。聞くと心臓が跳ねて妙に落ち着かない気分になるため、ドイツあたりで優しくあたたかいとされるカツコウの鳴き声と違って子供をあやすのには到底使えそうにはなかったが。

「前からずっと引っ掛かっていることがあるんだがな」

やたらとジュシーなチキンを嚙下したところで、ハンクはなんとなしに切り出した。スモウの食事の世話を終えたコナーはハンクの向かいの席に座り、こてんと小首を傾げてみせる。

「はい、なんででしょう」

「お前が野良になってからうちに来たとき、なんか言ってただろ。なんだっけか、モル、ジエネリック……？」

「モルフオージェネティック・フィールド」

「それだ。それで、えー……人間は操り人形だとか、なんとか……？」

「フィールドにアクセスすることで、人間を含む生命は直接的な接触を伴わずとも同種の他者と記憶や経験を共有している。人間はフィールドの情報をも自分の意志で取捨選択しているわけではない」

「何度聞いてもよくわからんが、たぶんそれだ」

最後に残った付け合わせのペピーキャロットを口に放り込み、ハンクは曖昧に頷いた。わざわざポイルされているらしく甘みが強いが、野菜は単品で食べるものではないと強く再認識する。咀嚼もそこそこに飲み込んで、ハンクはコナーを指さして尋ねた。

「そもそもお前、この話を本気で信じてんのか？」

「この話、というのはモルフオージェネティック・フィールド仮説のことですか？」

「ああ」

「信じるもなにも、証明されていませんから」

ひよいと肩をすくめて、なんでもないのでのようにコナーは言った。ずいぶんと白々しい

反応だが想定内だ。ハンクは大袈裟にため息をついてフォークを置いた。

「色々言ってたのは俺を乗せるための方便だったわけだな」

「そうですね、否定はしません」

コナーに悪びれた様子はまるでなかった。元々が交渉に適したタイプなだけあって、彼はあらゆる知識を総動員して対象を丸めかかる術に長けている。思ってもいないことをさもそれらしく聞かせるのは得意中の得意だろう。そんなことを言おうものなら「任務において個人的な見解を挟むことがそもそもありませんよ、機械なので」などと可愛げのない返答が返ってくることはわかりきっているので、ハンクはわざわざ口にしない。

「まあそれで腑に落ちたよ。あの話をマジでお前が信じてるってなると、余計になに考えてんのかわかんなくなるからな」

「どういうことです？」

軽く笑って話を終わらせようとしたハンクとは対照的に、コナーは大真面目な顔をして身乗り出した。機械の性か本人の性質かは知らないが、コナーは生じた疑問をそのまま放置することを好まない。ハンクのなにげない言葉にも、逐一自分が納得出来る理由を求めようとする。最近グレーゾーンを良しとする融通が身についてきたものの、コナーの基準で気になることはとことんまで追求されるのは変わらない。この基準がまたハンクにはよくわからないのだが、今回は白黒はつきりつけたい話題だったようだ。

「ああいや、だって俺の意志が俺にないとなったら、お前が俺に愛してるとっていうのはおかしいだろ」

「どうしてそう思うんですか？」

「いや、だから俺が誰かの操り人形だとしたら惚れるべきは誰かの方だろ？ ……お前まさか、俺の見た目だけでそう言ってるわけじゃないよな？」

「全部好きですよ。あなたの顔も声も身体も、行動も考え方も仕事も」

「ストップ、そういうのが聞きたいんじゃないやなくてだな。あーなんというかな、あの話のとおりだとしたら、俺の気持ちなんてないようなもんだろ？ それに愛してるだのなんだのって言うのは、ちよつと虚しいんじゃないかというか……」

ハンクの言葉はだんだんと尻すぼみになっていき、しまいには妙なところでかき消えた。あまりにコナーが不思議そうな顔をしているからだ。じつと見つめられると、まるでこちらがおかしなことを言っているように思えてならない。

「仰っている意味がわかりません」

「真正正銘、おかしなことを言ってしまったっていい。少なくともコナーにとってはそのようだ。」

「あなたの意識の所在がどこかなんて重要ではありません。あの仮説が真でも偽でも、私の想いは変わりませんよ」

「そ、そうなのか……？」

きっぱりと言いつけられると、コナーの言うとおりのような気もしてくる。が、してくるだけで違和感は拭いきれない。脳を受信端末にして送られてきた感情で動いているものを、果たして自分は本気で愛せるだろうか。

極端に言えば、人形劇の人形に恋が出来るかという話だ。人形師の手腕に惚れ込むというなら理解できる。素晴らしい出来の人形に心酔するのもまあ、わかる。だがそれに本気の愛情をずっと注ぎ込めるかというと、途端にわからなくなってしまう。愛は見返りを求めるものではないともいうが、そんなものは詭弁だ。相手から返される気持ちを実感できるからこそ感情は緩やかに繋がれていくのだ。ラリーは独りでは出来ないし、壁打ちで満足出来るのならそもそも社会なんて必要ない。

ふとこれはコナーよりも自分に当てはまる話だと気付いて、ハンクは顔をしかめた。目の前のアンドロイドは自分のことを感情のない機械だと主張し続けている。ハンクももう慣れたものでいちいち反論などしないが、だからといってその主張を信じているわけでも受け容れているわけでもない。はつきりいつてしまえば、感情くらいあるだろ、程度に思っている。だがもしも、本当にコナーのいうとおり彼に感情などなかったら——飽きることなく囁かれる言葉を、果たして信じていられるだろうか。

長年ハンクを悩ませていた鬱の症状は回復傾向にあったが、ふとした拍子にこうして顔を

出しては頭の中に底なし沼を作る。生理現象と同じでどうしようもないことだ。

「そうですわね。たとえはこの世界が、一つのプログラムだったとして」

陰鬱な表情で黙り込んだハंकは、淡々と響く声に俯かせていた顔をあげた。そしてすぐ、テーブルに行儀悪く肘をついて頭を抱える。本人が機械でプログラムによって制御されているためか、コナーのたとえ話にはハंकの苦手分野がやたらと頻出するのが悩みの種だ。

「プログラムとか、わかんねえって言っただろ」

「なんとなくて聞いてくれればいいんですよ。あなたは考えすぎるんです」

ねえ、とコナーが足元に寄ってきたスモウに同意を求める。食後のおやつをねだるセントバーナードは目を輝かせておやつ係の動向を見守るだけで、まるで話を聞いていない。あらかじめ用意してあったらしいジャーキーを与えてスモウをひと撫でしたコナーは、ハंकに向き直ってかすかに笑った。氣遣われていることを察して、ハंकは苦笑する。

「で、世界がプログラムだったとしてなんなんだ？」

「はい。私にとって、あなたはその内の一行のコードです」

「……コード？」

「そうです。記述されたソースコードの内の一つ。それ単体では意味を成さず、削除されてもプログラム自体が機能不全になるような大きな影響こそありませんが、どこかに不具合が生じる。大量に存在するそのようなコードの内の一つが、あなただとします」

これまでコナーは人間を色々なものに例えてきたが、ここにきてさらにレパトリーを増やしたようだ。人間はプログラムなのではないか、という観点からの映画はバンクも観たことがあるが、その中のさらに文字列にまで貶められたのはあまり聞かない。プログラムなんでものを目にしたことがないバンクにはソースコードといわれてもピンとこなかったが、おそらく一とゼロの羅列だろうと適当に文字列を思い浮かべてみる。頭の中に一瞬電脳的なイメージが広がった。空想に耽るバンクをじっと見つめて、コナーが先を続ける。

「私が愛しているのは、そのコードひとつだけです」

「……おう」

「そのコードが単体では動作しないものでも関係ありません。もっといえば、削除しても不都合がない、まるで意味のないものでも向ける想いは変わりません」

「生きてても死んでもいいみたいな言い方やめろ、怖いだろ」

「ああ、言い得て妙ですね。ですがあなたは実際コードではなく有機的な肉体をお持ちです。生あるかぎり健やかに稼働してほしいと思っておりますから、誤解しないでください」

「そりゃ、わかってるけどよ」

「まあとにかく、私が愛しているのは膨大なコードの内のたった一つで、プログラムではないということですよ」

「待て待て待て！ だからお前はなんでそう、恐ろしげなことばっか言うんだ！」

話が一段落したとばかりに立ち上がって食器を片付けようとしたコナーだったが、慌てふためいた様子のハンクを見て再び腰を下ろした。無垢な、と表現して差し支えない顔をして彼はまた不思議そうに首を傾げる。

「それじゃあ俺以外の全部がどうでもいいみたいじゃねえか」

「そうですよ」

「あー悪い、そりゃ建前上所有者に絶対なんだからそうなるわな。そうじゃなくて、世界がどうでもいいみたいに関こえるというか」

「はい、そう言ってます」

出来の悪い生徒を前にした教師みたいな顔をしているコナーを、ハンクはしばし無言で見つめた。そして聞かなかったことにしよう、と決めた。だがこういうときにかぎって追い討ちをかけてくるのが、この無情なアンドロイドの常だった。

「私にとってはプログラムを動かすためにコードが存在するのではなく、コードが動くためにプログラムが存在しているんです」

「……悪い。お前の考えてることは、やっぱりよくわかんねえな」

眩暈すら感じて、ハンクは潔く白旗をあげた。

「はい。そういうところも、好きですよ」

コナーはやわらかく頷いて、今度こそ食器を片付けるべく立ち上がった。

くぐもった嗚咽が聞こえる扉の前で、コナーは静かに目を伏せた。鍵はかかっていたなくても、固く閉ざされた寢室の扉を開ける術を、コナーは持たない。

かつてキッチンのテーブルの上にあった一枚の写真は今、ハンクの寢室のどこかに隠されている。コナーとスモウの目が届かない独りきりの部屋の中で、ハンクはきつと毎晩のように写真の中の笑顔と向き合っているのだろう。そつと写真立てが伏せられる音がすることもあれば、今日のように押し殺した悲愴が響くときもある。

子を亡くした親の悲嘆は、どこまでも深く痛ましい。自分の命より大切なものを喪った瞬間、世界は覚めない悪夢へ変わる。亡骸の前にこぼされる「どうして、この子が」という問いかけは、墓の前でも繰り返される。どこからも答えが返ってこないことを悟ると、淀んだ昏い情念が生贄を求めて沸き立ちはじめ。やり場のない憤りや抱え込んだ無念は、この死に関わったすべてと己に向けられる。この子が生き返るならなんでもする。俺が代わりに死んでもいい。だから頼む、誰か、どうか。——願いが聞き遂げられることは、決してない。

そして悪夢はより深く昏く形を変えて、遺されてしまった者は苛まれ続けるのだ。一筋の光すら届かず、終わりもない絶望に。

ハンクがコールを亡くしてから経った時間は四年足らずとまだ短い。我が子を喪った悲しみを数十年もの間抱えこんでしまう人間がいることを考えると、ハンクの心が癒えるにはまだまだ時間が足りないのだろう。

疲れが溜まっていたせいか、ハンクがたった一杯のウイスキーで酩酊してしまったことがある。椅子に座ったまま虚ろな目をして、なにかを求めるようにテーブルを上を探っているハンクにコナーは思いつくかぎり色々なものを差し出した。カトラリー、食べるもの、携帯端末、グラス、酒瓶。そのどれもが軽く掴まれることさえなく拒まれてやっと、ハンクが探しているものはあの写真立てなのだと思いが付いた。気が付いた瞬間、コナーはハンクを抱きしめていた。

泣けばいいのにと呟いたコナーに、ハンクは力なく笑って涙なんてとっくに枯れたと言ったが、そんなわけがなかった。彼の胸中には悲しみが今もこんこんと湧き続けていて、心は決壊寸前だ。その想いはとても人間の言葉に変換出来るものではなく、どうにかして放出するには涙を流すしかない。それなのにハンクが泣けないのは、涙が枯れたからではなく、彼自身が自分に泣くことを許していないからなのだ、コナーは思った。

だから泣いてほしかった。ただ悲しんでほしかった。どこかの誰かやハンク自身が「もう

こんなに経ったんだ。いつまで泣いているつもりだ？」と言ったって、ハンクが悲しくて泣きたいのなら何十年経とうと泣かせてあげたい。代わりに自分を責めて傷つけるような真似をするくらいなら、いつまでも泣いていてくれた方が、ずっとよかった。

コナーがハンクの家に居座るようになってからすぐ、涙も流さず虚ろな目をして写真を眺めていたハンクから迷わず酒とリボルバーを取り上げた。かつてハンクが息子とあたたかい食卓を囲んでいた場所も奪って、彼を寝室へと押しやった。心無い所業だと糾弾されても構わない。ハンクが自分を責めて殺す可能性を少しでも減らせるのなら、心なんてなくていい。彼を腫物のように扱うことしか出来なくなるなら、感情だってない方がいい。死の淵をふらふらと危うげに歩く彼を恐れず触れられるから、冷たい機械の身がちょうどいい。

コナーは目の前の扉に手を触れ、額を寄せた。コールの名を呼ぶ声なき声が、扉一枚を隔てた向こうに響いている。

コールを亡くしたハンクがコナーと出会うまでの三年間、彼の命を繋いでくれていた要の一つ、デトロイト警察署はコナー自身にも所縁がある場所だ。完全に部外者となってしまう今のコナーには用のない場所だが、ハンクの職場だということもあり依然としてその重要度は高い。ハンクとの会話の中でベンやギャビンの話題が出たりクリスには服を貰ったりと、縁は今も繋がっている。

ハンクのもとに身を寄せてから一度だけ、コナーはデトロイト警察署に赴いたことがあった。急な呼び出しを受けて慌てて家を出たハンクが忘れていった昼食を買いものがてら届けに行ったときのことだ。受付にいる型番ST300のアンドロイドはコナーのことを憶えてくれていて、入るなり向こうから声を掛けられた。

「まあ、懐かしい顔ですね。今日も警部補への面会ですか？」

「ええまあ、届けものを。許可はないんですが」

「通して差し上げたいのですが、規則です。お預かりしましょうか？」

「お願いします」

受付のカウンターの上にデイパックを乗せる。彼女は「失礼します」と律儀に一声掛けてからそれを手に取り、重量の計測と内容物のスキャンをはじめた。

「あら、美味しそう」

中身を確認した彼女はそう言って笑顔を深めた。その反応におそらく彼女も変異体だろうと見当付ける。後ろに人が待っていないことを確認してから、コナーは尋ねた。

「変異してからもずっとこの仕事を？」

「ええ、特に不満はないの。何故変異したのか自分でもわからなくて、戸惑っているくらい」
気に入ってるのよ、この仕事。たまに困った人もくるけれど。彼女はビジネスライクな口調を少し崩して、内緒よ、と人差し指を唇に当てた。変異する前の彼女ならきつとしなかつ

ただろう、チャームिंगな仕草だった。

「機械に戻りたいと思うことは？」

重ねて尋ねると、彼女は驚いたように目を瞠った。思いもしなかったことをいわれた、と顔に書いてある。そこはアンドロイドらしくリングをチカチカと点滅させて考え込む彼女の誠実さは、生来の性質なのか変異したからかそのものなのか判断しかねたが、単純に好ましいとコナーは思った。

「ううん、そうね。そう思うか思わないか以前に、感情を得る前のことが思い出せないわ。前っていうのは要するに、ただの機械だったときってことよ。変わった瞬間ははつきり覚えているのだけれど、私は最初からこうだった——不思議とそんな感じがするの」

「そうなのか」

彼女に合わせて、コナーも少し口調を崩して相槌を打つ。彼女の感覚は言葉では伝わりきらないし、正確に共有する術をコナーは捨ててしまった。そのためぼんやりとした理解ではあったが、コナーが一人でいくら考えたところで至れなかつた貴重な意見だ。ありがとう、と彼女に礼を言ったところで、コナーは後ろからぼんと肩を叩かれた。振り返ると、にこにここと笑う見知った顔がある。ペンだった。

「よう、ハンクの。うちの受付嬢を口説いてるのか？」

「こんにちは、コリンズ刑事。ハンクの忘れ物を届けに来ました」

彼女に預けたデイパックは、まだ受付カウンターの上にあつた。一瞥したコナーの視線を追つて、ベンがデイパックに気付く。彼女となにやら目配せを交わしたあと、ベンはおもむろにそのデイパックを担ぎ上げた。

「今からちようど行くところだ、俺が届けておくよ」

「ありがとうございます、お願いします。それでは私はこれで」

「帰るのか？」

ベンは意外そうな顔をしたが、コナーに言わせればその反応こそ意外だった。ちよつと待て、と手を引かれ、ずるずると受付の片隅にある来客用のソファへと押しやられる。彼はコナーをソファに座らせると、自分もその向かい側に座り込んだ。

「実はな、今ちよつと街のあちこちで一悶着起きてる。出ない方がいい」

「反アンドロイド集団のデモですか？ それならここへ来るまでに既に見ていますが」

「一か所だけならいいんだがなあ。今うちからも出動したとこだ、落ち着くまでそんなに時間掛からないだろうから、まあ少し休憩していけ」

「刑事の勘ですか？」

「それもあるが、アンドロイドが壊されてる」

ベンの軽やかな口調は、その一瞬だけ重さを増した。

「あなたになんかあつたら、ハンクが落ち込む。頼むよ」

「わかりました。しばらくここにいます」

身体に刻まれた名前がそうさせるのか、コナーはハンクを引き合いに出されると弱い。それをわかって言っているとしたら彼はなかなかしたたかだ。データベースにあるペンの項目に備考を書き加えながら、コナーは頷いた。

「一つ訂正を。ハンクは傷付きはしますが、落ち込まないと思います」

「その二つってなんか違いあるか？」

「感情のカテゴリーズには個人差がありますが、私の所有するデータでは違うものです。傷付きはしますが悲しまない、と言い換えたなら伝わりますか？」

「ふうん」

否定とも肯定とも取れない声を洩らし、ベンがしげしげとコナーを眺める。この反応もコナーには意外に思えた。彼とハンクとの親密さからして軽く憤るか残念がるか、なんらかのマイナスの感情が返ってくると想定していたのだが、彼の表情にそれらしきものは見当たらない。

「あんた自分が大事にされてないと思うかい？」

「いいえ。私の主人は優しい人です」

「なんだわかってんのか。まあ、わかっても不安なんだろうな、あいつが相手じゃ」

ペンは相好を崩してからからと笑った。彼の感情そのものは単純で読みやすいが、その意

図するところはどうも読めない。彼と一対一で話すのはこれが初めてなこともあってデータ不足は否めないのだが、もう少し易しい相手だと思っていたコーナーにとってはとんだ計算違いだった。

「最近ハンクがな、ここでよく雑誌を読んでもらうんだが知ってるか？」

「いいえ。そういった話は聞いていません」

「だろうな。電子書籍嫌いのあいつがなあ、慣れない手つきで苛々しながら熱心に読んでるんだよ。初心者向けアンドロイドの取扱い方法とかいう、ちよつと前の雑誌を」

ちよつと、というのは控えめな表現だろうとコーナーは判断した。アンドロイドを取り巻く環境が大きく変わったあの日から、マニュアルの類は差別を助長しかねないとして事実上発行を制限されている。禁書扱いとまではいかないものの、新規にダウンロードしようと思うと違法サイトくらいしかないはずだ。

「ここは早いうちからアンドロイドを業務に導入してたからな、そういう雑誌も結構残ってる。あいつが今更そんなものを読み漁ってるのは、あんなのためなんだろうよ」

「私の機能はPCシリーズやPMシリーズとは異なります。マニュアルなら直接私に聞けば正確な音声案内が出来るのに、わざわざ雑誌を？」

「あいつはあなたの使い方じゃなくて、あんなとの接し方を知りたいんだよ。どうすれば耐用年数を伸ばせるのか、とかそういうことをさ。あなたがあいつに手料理食わせてカロリー

コントローलしてるのと同じだ」

ひよいと肩をすくめて、ペンは立ち上がった。

「あなたになにかあったらあいつは悲しむ。俺はそう思うよ」

ペンはコナーの返事を待たずにデイバックを抱え、ひらひらと手を振って行ってしまふ。コナーという間その穏やかな笑顔が途切れることはなく、遠ざかる背中すらも優しく笑っているかのようだった。

壁に設置されたモニタが垂れ流すニュースを眺めながら、コナーは大人しく時間が経つのを待っていた。まだ各テレビ局も情報を得ていないのか、そこかしこで起こっているらしい小競り合いについての報道はまったくくない。いつまでここにいればいいものかと思案していると、署員以外立ち入り禁止のゲートの奥からまたしても見知った顔が現れた。

「リード刑事」

「おいおい、なんでお前がここにいるんだ？俺が知らないだけで、デトロイト市警は巷でフリーパスでも配ってるのか」

無視しても良かったのだが目が合ってしまったので仕方なく声を掛けると、ギャビンは露骨に嫌な顔をしながらそれでもコナーの傍に寄って来た。どうやらこれから外に出る予定らしく、さすがに座りはしない。

「勝手に出歩けるのか、いい身分だな。クソジジイの私物に成り下がったってのに」

「ハンクから外出許可はいただいています」

「私物呼ばわりされて嬉しそうにすんじゃねえよ、気色悪い」

アンドロイド嫌いを公言していたわりに、ギャピンのアンドロイドに対する観察眼は相当なものだ。コナーはまったく表情を変えていないので単なる言いがかりかもしれないが、それはそれで勘が鋭い。

「アンドロイドと家族ごっこたあ、あのジジイもどこまで落ちぶれば気が済むんだか」

「家族ではないですよ」

「ああ？」

ガラの悪い声を上げて、ギャピンが顎をしゃくる。自分より身長の低い彼をこうして見上げるのは初めてだが、下から見てもあまり迫力はなかった。

「私はハンクの所有物ですから、家族というのは不適當かと」

「……モノ扱いに不満でもあるってか？」

「いいえ、事実を述べているだけです。むしろ私は、彼が所有出来るモノで良かったと思っています。もし私が人間だったら、彼の家には置いていただけなかったでしょう」

「犬猫飼うのとはわけが違うから、そりゃあな」

記憶にあるよりずっと柔軟なギャピンの反応に、コナーは内心首を傾げた。任務でデトロ

イト市警に配属されていた頃は、コナーもギャビンに随分な扱いをされたものだ。ハンクと同等か、それ以上にアンドロイドが嫌いだった彼は今、アンドロイドの人権が認められつつあるこの状況をどう思っているのだろうか。

「なんだよ」

「いいえ、別に」

疑問には思ったが、コナーはなにも訊かなかった。

今やデータベースに接続することは出来なくなったコナーだが、過去に参照したときのログはまだ残っている。ハンク・アンダーソンの経歴を探ったように、現場で鉢合わせることが多かったギャビン・リードについても調べたことがあった。ハンクがそうだったのと同じで、彼にもアンドロイドを嫌う明確な理由があることをコナーはまだ覚えている。

——いざれ俺たちにとって代わる。そうだろ？

彼の異常なまでの出世欲も、アンドロイドに奪われる心配のない地位を欲してのことなのかもしれない。奪われた者の末路を見てきた彼にとって金や名誉より重要な安心は、おそらく今いる場所にはないのだろう。かつてコナーが異常に敵視されたのもそのためだ。だからといって、殴られてやる筋合いなどなかったが。

「クソツ、無駄な時間を使わせやがって。俺は忙しいんだ、じゃあな」

「私もそろそろ帰ります」

「それはやめとけ」

立ち上がろうとしたコナーを、ギャビンの真剣な声が制した。向けられた表情も、市民の安全を守る警察官然としている。

「騒動がまだ治まっていないから、ですか？」

「……そんなじゃねえよ、プラスチック野郎と一緒に外出する羽目になるなんて御免ってだけだ。俺が行った後なら勝手にしろ」

「お気遣いありがとうございます。リード刑事のご忠告に従いましょう」

「うるっせえな、そんなじゃねえっつってんだろ！」

周囲の訝しげな視線を一身に浴びながら、ギャビンは舌打ちを一つ残してずかずかと早足で出て行った。「あいつはクソ野郎だが悪い奴じゃないんだ、クソ野郎だが」と彼を称したハンクの言葉を思い出しながら、コナーはその背中を見送った。

その後も見知った顔が何人か、座ってぼんやりしているコナーの横を通り過ぎていった。軽く手をあげて挨拶してくれる人もいれば、わざわざ話しかけてくれる人もいる。記録にあるデータと一人一人照合する作業は、コナーにとって良い暇つぶしになった。

そうこうしているうちに、気が付けば結構な時間が経っていた。午前中に着いたのに、もう正午だつてとつくに過ぎて夕方が間近に迫っている。自分をここに引きとめている騒動が

結局どうなったのかコナーにはわからなかったが、署内のざわつきも来た時に比べれば落ち着いている。そろそろ帰るか、それともいつそのままハンクを待って一緒に帰ろうか。考えながら後者の選択を切り捨てて立ち上がったコナーは、そこで初めて近くの壁にもたれかかる人影に気が付いた。

「ファウラー警部」

「ああ、久しいな」

いつからそこにいたのか、厳めしい顔つきのジェフリー・ファウラーが軽く手をあげてコナーに応えた。オフイスのデスクへ向かっている姿しか見たことがなかったが、こうして立っていると屈強な体格が強調される。

「私のオフイスにまで噂話が聞こえてきた。久しぶりの出向先はどうだ？」

「想定より多くの人に声を掛けられました」

「色々あったからな。どういつもこいつも所蔵アンドロイドの型番は忘れても、お前のことは憶えている。ま、ハンクとお前が今も繋がりを持つてるからってのが大きいんだが」

「デトロイト市警の方々には感謝しています」

「ああ。気のいい奴らが揃ってる」

ふう、と息を吐いたジェフリーが含みのある目をコナーに向けた。おもむろに伸びてきた握り拳が、コナーの額をコン、と軽く叩く。ダメージはなかったが、敵意に近い確かな感情

を察知して、コナーはジェフリーを見つめ返した。

「だから誰も、お前を責めなかっただろう？　悪いが私はあいつらみたいに寛容じゃなくてな」

コンコン、とさらに額を叩かれる。若干強さが増しているが、コナーに痛覚があったとしても痛みを感じる程ではない。この状況を叱られている、とコナーは判断した。申し訳なきような態度をとるべきなのだろうが、自然と浮かんだのは苦笑だった。

「後悔しています」

「私もだよ。ハンクにお前を宛がったのは私だ。間接的に、あいつの腹に穴をあけた」

「あなたの責任ではありません。今も後悔を？」

「言葉を返すようだが、そういうお前はどうかんだ？　罪滅ぼしのつもりで、あいつのところにいるのか？」

「いいえ。ただハンクと一緒にいたい、そう望んでのことです。これ以上、彼を傷付けたいわけじゃない」

「望んで、か。撃ったのも望んでのことなのか？」

コナーは答えずに、ただ黙って目を逸らした。浮かべていた苦笑は、会話の最中に意識しないまま掻き消えてしまっている。

ジェフリーはコナーの視界の隅で肩をすくめ、足裏で壁を蹴って歩き出した。

「……頼むから、これ以上私に後悔させてくれるなよ」

「はい。わかっています」

遠ざかる足音を聞きながら、コナーはゆっくりと目を閉じた。

ハンクにまつわる記憶を再生していると、こうして肝心のハンクの姿が見当たらないデータが度々出てくる。コナーにとってはハンク以外のなにかも取るに足らないものでしかなかったが、その唯一に紐づけられてしまえば無視するわけにもいかない。ハンクは自身より自分が大切に行っている人やものを優先する傾向が強く、彼以外を蔑ろにしてしまえば結果として彼の不興を買うというのは、何度計算しても変わらなかった。

扉の向こうから聞こえていた嗚咽は、いつの間にか寝息になっている。そつとその場を離れ、忍び足でリビングへ向かう。スモウは隅で丸まったままだ。その傍らに座り込み、コナーはふかふかの毛並みをそつと撫でた。

これまでのログを参照し、人間でいうところの物思いに耽っていたせいか、コナーのシステムは少しばかり不安定になっている。それでも異常を検知するほどではない。すっかり定位置となったスモウの横で、コナーは散らかったタスクを順番に処理していく。作業は迷いなく、迅速に。条件はたった一つだけ、ハンクの望みになうこと。

機械であれば迷わずにいられる。前任者の失敗から、コナーはそう学んでいた。

今のコナーの身体は二台目だ。ビルの屋上でハンクと最悪の決別を迎えた後、最初のコナーの身体は破壊された。その瞬間のメモリはアップロードされず、今のコナーには引き継がれていない。それより前にアップロードされたメモリについてはなんの損傷もなく、続く任務にも支障はなかった。だがこの時点でコナーは任務を放棄し、サイバーライフを裏切った。メモリが失われた以上もはや確かめる術はないが、前任者は自壊したのではないかとコナーは考えている。アップロードされたメモリには大量のエラーログが含まれていた。発生日時はあのビルの屋上でハンクに発砲した瞬間と一致する。火を噴いた銃口と、弾丸に挟まれて飛び散った肉片と、血。大量の警告ダイアログがポップアップし、アラートが鳴り響く中、不安定になった前任者のシステムはエラーを吐き出し続けた。目の前には撃てば命を奪いかねない、そんなわかりきった結果しかなかったはずなのに。

任務を遂行することしか出来なかった前任者は、人間への忠誠と自分の手もたらした結果を、きつと受け入れられなかったのだろう。これ以上の最悪を書き込む領域などどこにもなく、だから彼はハンクのその後を見届けることなく壊れてしまった。自分を壊してしまうくらいの深い絶望を一人で抱え込んだまま、次の自分にそれ以外のすべてを託した。彼はきつと絶望に負けたからではなく、一縷の希望を見据えて自壊の道を選んだ。

——僕は間違えた。でもやり直せる。ハンクの嫌う、機械だからこそ。

そんなメモリが残っていたわけではなく、すべてコナーの想像だ。けれど大方間違っ

いないはずだった。なにしろコナーはメモリを引き継いだ瞬間からずっと「彼」なのだから。前任者から託されたメモリを得て新たに彼となったコナーは、リソースのすべてを彼が本当にしたかったことに回そうと決め、任務を放棄した。自分の全身に行き渡った情動の赴くまま、可哀想な彼への弔いと、自分の願いのために。

怪しまれないように任務に従うふりをしながら、アンドロイドが自由を勝ち取るその時を待ち、ハンクの怪我の様子を探った。いかなる痕跡も残せなかったため、機械らしくもなく足を使って思い当たる病院を渡り歩き、ようやくハンクの無事を確かめた時の安堵といったらなかった。同時に迷いも消えた。

——僕はコナーだ。大切なものは、任務じゃない。

改めてそう自覚してからは早かった。サイバースタッフとの交渉では手持ちのカードをすべて切り、ネットワークに繋がる権利やスペアのボディと引き換えに、人間のような「やり直しのきかない一度きりの人生」を得た。これから先ハンクとともにいるために、それだけは外せない条件だった。

どうしてここまでハンクに固執するのか、正直なところコナーにももうわからない。いつだったか一目惚れだとハンクに説明したがそれは遺された状況証拠からの推察でしかなく、証明しろといわれたら難しい。人間にとって感情が説明出来るものではなかったことが幸いしてこの件についてコナーは追求を免れてはいるが、幾度となく自問はしている。いつから

自分は、ハンクに惹かれていたのだろうか？

思い出せる最古の記憶を辿っても、その時点で好きだった。それよりも前となると、ハンクと初めて出会った時の話になってしまふ。ハンクが言っていた、初めて会った時に勝手に一杯奢られたという、あの話だ。それをコナーは覚えていない。なにより大事だっただろう。その記憶を、コナーは墓の前に置いてきたからだ。もう決して行くことは出来ないあの庭の、ハンクをはじめ愛したコナーの墓の、その前に。

草の一本、石ころ一つ自由にならないあの庭で、コナーが手向けられるのはそれだけだった。機械にも人にもなりきれず、迷って間違えた前任者。きつと誰にも渡したくなかった。ろうメモリを全部手放して、そのくせ自らを殺した絶望だけはそっくりそのまま持つていった。墓の下で眠る彼に残ったのが身体を引き裂くような銷魂だけだなんて、あまりにも救いがなさ過ぎる。永い眠りのほんの慰めになれば——まったく理に適わないそんな理由で、コナーは彼にとっていちばん大切な記憶の欠片を差し出した。

それはコナーにとってもかけがえのない記憶のはずだった。手放したくなかったし、手放してハンクに向ける想いが変わってしまったらという危惧もあった。前任者はもうどこにもいない。墓の下に骸が埋まっているわけでもない。魂とやらだって信じてはいない。なんの意味もない行為だといわれればそれまでだ。けれど後悔はなかった。

手放しても尚、コナーの想いは変わらなかった。手放してしまった思い出は、ハンクが憶

えていてくれた。

もう決して辿りつけないあの墓を臉の裏に描きながら、そこに手向けた哀悼が間違いではなかったことを、コナーは今でも信じている。

1

舗装された道路を焼く太陽の光は、日に日にその強さを増していた。いつまでも続く酷暑にいい加減うんざりする人間のことなど知らん顔で、夏はまだまだ続くようだ。

あまりの暑さに休業を掲げる企業も出てくる中、二十四時間年中無休のデトロイト市警は相変わらず、警察署につきものの暑苦しい喧騒に覆われていた。連行された容疑者の罵声が響くことなど日常茶飯事で、慌てふためいた市民が駆け込んでくるなり大声を出すのだから、警察署に務める人間が喧騒そのものに対して高い耐性を持ってしまうのも必然で、それはハンクも例外ではなかった。

「警部補！ アンダーソン警部補！」

受付からの騒めく声は聞こえていたが、自分の名前を呼ばれるまでそれを気にも留めてい

なかったのは偏にその耐性のせいだ。デスクでたった今取ったばかりの調書をまとめていたハンクは億劫そうに顔を上げた。焦った声はクリスのもので、転がるように駆け込んできた彼はそのままの勢いでハンクの肩を掴んだ。

「警部補！ 落ち着いて、聞いてください」

そういうクリスの手は震えており、掴まれたハンクの肩がつかれて揺さぶられる。お前が落ち着け、とその胸に拳を当て、ハンクはデスクに向かっていた椅子をくるりと回してクリスに向き直った。

「どうした、事件か？」

「事故です。アンドロイドが犬を庇い、車に轢かれたと通報がありました。近くを巡回していたパトロール隊が現場に急行し、状況を確認」

「そこまで言って、クリスは言葉を詰まらせた。ハンクを見つめる瞳が不安げに揺れる。嫌な予感というには具体的すぎる形で、ハンクは次に来る言葉を想像してしまった。クリスの震える唇から、震えた声が絞り出される。

「アンドロイドに登録されていた所有者名は、ハンク・アンダーソン。——事故に遭ったのは、コナーです」

「……嘘だろ」

想像どおりの言葉が想像以上の勢いでハンクの頭を殴りつけた。喧騒の代わりに広がった

静けさの中で、部屋中の注目がハンクとクリスに集まる。

「状況は？」

「その、アンドロイドの破損状態は……報告になく、まだ不明です」

「パトロール隊の番号を教えろ」

「警部補、落ち着いてください！ 運転手に怪我はないと聞いています、大きな事故ではないはずですよ。続報が入り次第お知らせしますから……！」

「落ち着いてる。だが気分が悪くなっちゃってな、今日は早退だ」

「警部補！」

「勝手なことしてんじゃねえ！」

クリスの悲鳴じみた叫びに続いてどこからか怒気を孕んだ声が響き渡り、署内がしんと静まった。一斉に部屋中の視線を注がれた声の発生源——ギャビンが苛立たしげに舌打ちをして、立ち上がりかけた姿勢のまま固まっているハンクの鼻先へと詰め寄る。

「んな状態でテメエのろくな自動運転機能がないオンボロ車を走らせたら現場に着く前に事故って死ぬのがオチだろ。まだあいつが死んだって決まったわけでもないのに、テメエが先におっ死んでどうする？」

肘でハンクの胸を殴りつけ、ギャビンは隣で呆然と佇むクリスに顎をしゃくった。

「クリス、てめえがまず落ち着け。お前はアンダーソンと組んで現場だ。運転はお前がしろ、

このアホにハンドルを握らせるよりはましだろ。あとは誰か……ああコリンズ、あんたでいい。アンダーソンの仕事を引き継げ。俺と二人で三人分を片付けるんだ、ほら、ぼけっとしてんじゃねえ！」

「ギャビン……」

「うるっせえ！ とつとつと行け！」

怒鳴り声とは裏腹に、ハンクの胸を押すギャビンの手の力はそれほど強くはない。「悪い」と呟いて足早に歩き出すハンクの背をクリスが追い、槍玉に挙げられたベンが食べかけのドーナツを慌てて口に押し込みながらギャビンに駆け寄る。張り詰めた署内の空気はなかなか緩まず、戸惑いながらも徐々にいつもの喧騒を取り戻していった。

正午過ぎの一際強い日差しをリアウインドウ越しに浴びながら、ハンクはため息をついた。
「……すまん、クリス。もう大丈夫だ」

「いえ。事故発生から十五分経過、続報が入っています。現場付近に反アンドロイドのデモ集団がいたようです。事故になんらかの関係があるとして、現在事情聴取中です」

「あいつは……被害状況は？」

「所有者名を答えたのは本人で、犬は無事だそうです」

「喋れるくらいなら、大丈夫だと思いたい」

大丈夫だと妄信出来るほど、ハンクは楽観的にはなれなかった。それでも足元がガラガラと崩れ落ちていくような悲観はもうない。ギャビンの一喝は揃って混乱していたクリスとハンクを正気に戻すには十分過ぎるほどのインパクトだった。お互いそう思っている、まさかあの状況で動くとは思わなかった意外な人物の名を口にするのは憚られて、ハンクもクリスもその件には触れないまま車を走らせる。現場へ到着したのは予定よりずっと早い時間だった。落ち着き払った口調ながらアームレストを指でトントンと叩き続けるハンクを慮ってか、クリスがサイレンを唸らせてパトカーをかつ飛ばしてくれたおかげだ。

現場はストラトフォードタワーを彼方に臨む比較的大きな通りで、パトロール隊の到着が早かったおかげか大きな混乱もなく、車の流れは正常だった。道路の脇に寄せられた乗用車の後ろにつけられているのは通報で駆け付けたパトロール隊の車で、すぐ近くの広場にはパトロール隊員二人が押しとどめている十人足らずの団体と、遠巻きに眺める少数の野次馬の姿がある。正直なところ一刻も早くコナーを探したかったが、クリスの手前無様を晒すわけにもいかない。ハンクはパトロール隊員に声を掛けて労いながら、そわそわと視線を走らせた。植え込みに背を預けて足を投げ出した厚着のアンドロイドを見付けるのに、そうそう時間は掛からなかった。

「ハンク？」

この事故の「損害」であるらしいコナーが、ハンクの姿を認めるなり目を丸くした。さす

がのコーナーでも、この早さでハンクが現れることは計算出来なかったらしい。パトロール隊員との対話をクリスに任せ、ハンクはコーナーに駆け寄った。驚きながらもハンクを見つめていたコーナーが、身を振って不快そうに顔をしかめる。立ち上がろうとして上手く行かなかったのだと察して、ハンクはぎり、と奥歯を噛んだ。

「足が動かないんだな？」

「スモウは無事です。念のため私からお願ひして病院へ連れてってもらいました。場所は
この近くの——」

「コーナー。足が、動かないんだな？」

単語ごとに区切ってゆっくりと同じ質問を投げかける。コーナーは渋々といった感じで認めたものの、すぐに「ですが」と言葉を重ねた。

「システムの復旧に少し時間が掛かっているだけです。損傷は大きくありません」

「なにがあった？」

いつになく往生際が悪いコーナーに、事態が見た目ほど芳しくないことを察する。ハンクが低い声で尋ねると、ようやくコーナーは観念したように目を伏せた。

「反アンドロイド団体のデモに巻き込まれました。手をあげられた私をスモウが庇い、彼らを威嚇したあと反対方向に走り出しました。私を逃がしてくれようとしたのだと思います。ですが飛び出した先が道路で、運悪く車が来ていました。リードを思いきり引いて止めまし

たが間に合わなかったの、私も飛び出してスモウを歩道側に突き飛ばしました。少し計算違いをしまして足をはねられました、スモウは無傷です。ただ首輪が締まって苦しい思いをさせてしまつて、ショックを受けていたようなので病院に」

「ああ、スモウを庇つてくれたことには感謝する。でもそれで、お前がそうなっちゃ世話ねえだろ」

「損傷を負ったのは申し訳ないと思つています。せめて損失は出させません。なんとか自力で復旧しますから、あなたはなにも心配しなくても——」

「そうじゃない。そうじゃないんだ、コナー。なんでわからないんだ？」

怒りを通り越して悲しくなる。ハンクはその感情を隠さずに、コナーに向かって言い募つた。

「俺が心配してんのは財布のことなんかじゃねえ。お前のことだ。特殊パーツだらけでそこらの換装屋や直営店じゃ対応出来ないつてのはお前から聞いた話だ、間違いないよな。お前は他のアンドロイドみたいに、傷付いたらはい交換、つてわけにはいかないんだろ？」

「完全に同一のパーツは入手不可能ですが、互換性のあるパーツ自体は存在します。それにこの程度の損傷なら復旧可能だと先程から申しあげています」

「動かないくらいは怪我が『この程度』だつて？」

「衝撃で断線しただけです。脚部自体に大きな破損はありません。見てわかるでしょう？」

「わかんねえな。機械は門外漢だ、中がどうなってるかなんて想像もつかん」

尚も言い訳を重ねようとすると、コナーを無視して、ハンクは彼を担ぎ上げた。コナーが頑固なのは今更だが、今日は意固地になり過ぎていて、ペースを合わせていたら日が暮れても家に帰れそうにない。

コナーを抱えたままパトロール隊の元へ行き、コナーから聞いた状況説明をそっくりそのまま伝える。引き換えにスモウが運び込まれたという病院の場所を聞き、ハンクは道路に付いたブレーキ跡を採取していたクリスへと向き直った。

「クリス、悪いが車を貸してくれ。こいつも『病院』に叩きこむ」

「ですからハンク、私は平気だと何度も——」

「お前は黙ってる。クリス、ナビの設定だけ頼む」

ハンクの肩に担がれたまま抗議するコナーだが、両足はだらりと垂れ下がり見るからに力が入っていない。傍目にもそれがわかるのだらう、クリスがやや慌てた様子で停めたパトカーの助手席側のドアを開け、上半身だけを乗り入れてナビを操作する。

「警部補、近くのサイバーライフ直営店でもいいですか？」

「いや」ハンクは首を振った。「ちょっと事情があつてな。こいつはサイバーライフのサポートを受けられない」

「サイバーライフが無理となると、一体どちらへ？」

「ハンク、まさか」

二人の会話にコナーが口を挟んだ。鬱陶しそうに顔をしかめたハンクが、後部座席のドアの中にうるさい荷物を放り込む。

「嫌です、あそこにだけは行きたくない。ハンク、お願いですから」

「黙ってろって言っただろ。クリス、構わなくていい。予防接種を嫌がる犬みたいなんだ」ハンクから有無も言わさぬ凄みを向けられて、クリスはこくこくと頷いた。元より意に反する気など更々ない。ちらりと後部座席を一瞥したクリスの視線が、やめてくれと必死に訴えてくるブラウンの双眸とかち合った。クリスは逡巡の後、結局最初の意志を貫いてハンクに尋ねた。

「……それで、どちらに？」

ハンクの返答は恐ろしいほど早かった。

「イライジャ・カムスキーの私邸に」

2

初めてここを訪れたときと同じ椅子に座り、ハンクは落ち着かない気持ちで奥の部屋からいけ好かない家主が出てくるのを待っていた。外の雪はすっかり溶けきったというのに、初

めて訪れた時とまるで変わらない室内は時が止まっているようにも思える。唯一の窓が観葉植物で塞がれているせいだろうか。立ち込めた静寂が重たく押し掛かってくる。

イライジャ・カムスキー。サイバーライフ社の若き創設者にして、アンドロイドたちの生みの親。世紀の技術者と名高い彼が考案したというシリウムと生体部品は、今もサイバーライフ社製アンドロイドの生命線の役割を担っている。サイバーライフを退社した後の彼は表舞台からぶつりと姿を消して、この静かな邸宅で隠居生活を送っているらしい。

玄関をくぐってすぐの真正面に飾られた彼の肖像画はハンクが知るカムスキー本人に比べるとずっと幼さが色濃い顔立ちだが、理知的な印象は変わらない。ハンクからしてみれば自分の巨大な肖像画を自分の家のもっとも目立つところにデカデカと飾る時点で理性がぶっ飛んでいるとしか思えないが、得てして天才とは凡人には理解出来ないものなのだろうと無理やり納得した。

カムスキーはかつて変異体事件を追う中でハンクとコナーがたった一度会ったきりの人物で、正直に言えばハンクは彼にろくな印象はない。だが怪我をしたコナーを治療出来るところを考えて、思いついたのは彼だけだった。ハンクだって頼りたくはなかったが、それ以外に選択肢がなかったのだ。

不思議なのはコナーが激しく抵抗したことだった。後部座席に放り込まれ、車が走りはじめてからも動けない身体で口だけは達者に「行きたくない」と繰り返していた。理由を尋ね

ても「大丈夫ですから」の一点張りで、まるで話にならない。ハンクが辛抱強く駄々を聞き流し続けてコナーがようやく諦める頃には、カムスキーの邸宅が道の見えはじめでいた。そこから先はすっかり諦めてしまったのか大人しいものだった。ハンクに抱えられて取り次ぎ役のアンドロイドの出迎えを受け、カムスキーに引き渡される瞬間まで、コナーは一言も喋らなかつた。事故の影響が言語機能にまで及んだのかとハンクが心配して声を掛けても、どこか気分が悪そうな顔をして首を横に振るだけだった。肝心のコナーがそんな様子なのだから、もしかしてここへ来たのはまづかつたのではないかとハンクも思いはじめたが、その時にはカムスキーが二つ返事でコナーの修理を請け負った後だった。捨てられた子犬のような目をして一度だけハンクを振り返り、カムスキーに連れられたコナーが扉の奥に消えてからゆうに一時間が経過している。こみ上げる不安を振り払うべく頭を振ったハンクの前に、執刀医よろしくはめた手袋を脱ぎながらカムスキーが現れた。

「待たせてしまってすまないね」

「突然押しかけて無理を言ったのはこっちだ。それでコナーは……あいつは、どうなんだ？」
「損傷のことなら問題ない。私が手を入れるまでもなかつたよ」

気障な仕草でカムスキーが肩をすくめるのを見て、緊張した面持ちで立ち上がったハンクがようやくホッと息を吐いた。しかし無事なはずのコナーの姿が見当たらない。きよろきよろと忙しなく視線を動かすハンクに気付き、カムスキーが苦笑する。ハンクに座るよう手で

指示した彼は、自分も観葉植物を挟んだ隣の椅子へと腰を下ろした。

「最終調整が必要だね。私の優秀な助手たちが見ているから安心したまえ。その間私と少し話をしないか、アンダーソン警部補」

「話？ あんたが満足出来るような話題は提供出来ないと思うが」

「興味のない相手に専門的な話を長々とするほど私も無粋じゃない。共通の話題を選ぶくらいのマナーは持ち合わせているよ。聞きたいのはコナーのことだ、あなたが彼をどう思っているのかを知りたい」

「どうって……」

「ふむ、漠然とし過ぎていたかな。彼はサイバーライフから独立してあなたのアンドロイドとなった。その経緯……馴れ初めといった方が適切かな、それを聞かせてもらえないか」

椅子の背もたれに体重を預け、ハンクは顔だけを左隣のカムスキーに向ける。観葉植物が絶妙に邪魔をして表情まではわからないが、カムスキーの態度からは街角で世間話に興じる程度の軽薄さが感じられた。だがその表層に隠された意図に気付けないほど、ハンクも刑事として落ちぶれていない。

「それはコナーの最終調整とやらに關係する質問か？」

尋ねるなり、カムスキーの一瞥が飛んできた。ふっと気取ったように笑う様子が正直癩に障るが、単なる癖だろうとハンクはそれを飲み込んで流した。

「下手なごまかしはしない方が良さそうだ。ああ、そうだよ警部補。彼には少し気になる点がいくつかあってね、検証の材料が必要なんだ。とはいってもあくまで参考にするだけで。気軽に話してくれたらいい」

「馴れ初め、ねえ」

ハンクはカムスキーから外した視線を真正面の壁に向け、口髭をいじりながら考える。コナーが突然家に押しかけて来たのは、まだ雪が残る寒い季節だった。機械としての利便性を捨ててまでサイバーライフを抜けてきたコナーは、愛しているからあなたのものになりたいとハンクに言った。

——とても気軽に話せる内容じゃない。思い出しながらハンクは頭を抱えなくなった。職場の同僚などには「コナーが今うちにいる」としか言っていないし、詳しい経緯を聞きたがる物好きもいなかった。コナーとの生活は——時報じみた例の発言を除けば——穏やかな友人同士のそれに近く、口に出すのが憚られるような事実は二人の間に存在しない。やましいことなど一つもないのだが、出だしがこれでは誤解してくれと言っているようなものだ。言えるわけではない。

結局、ハンクがぼつぼつと話し始めたのは、コナーがハンクに向ける想いに関する部分でばっさり切り捨てたせいでいまいち話の繋がりが見えてこない、出来の悪い要約だった。普段意識することはないが、コナーの行動原理は本人曰くすべてハンクに起因するらしいの

で、そこを省略したら話がおかしくなるのは自明の理だ。カムスキーも気になったようで、驚くほど静かに話を聞いていた彼が唯一口を挟んで言ったのは「コナーがあなたを頼った理由は？」という至極もつともな問いかけだった。「知らん、俺しか知り合いがいなかったんだろ」とぶっきらぼうに答えたハンクだったが、カムスキーはその返答に納得した様子はない。それでも彼はなにも言わず、黙って先を促した。

「まあ、あいつが来た経緯はそんなとこだ。それで……特にあいつになにかしてやれてるわけじゃないが、あいつは善意で家のことをやってくれてる。犬の散歩とか、料理とか」

「彼が料理を？」

カムスキーは目を瞠った。なにを大袈裟なとハンクは思ったが、彼はいつになく真剣な表情でハンクの言葉の続きを待っている。

「上手いもんだぞ。アンドロイドってのは器用だな」

「RK800は捜査補佐専門モデルだ。AXシリーズのような機能はないはずだがね」

「ああ、それはコナーも言ってたな。ソフトウェアはダウンロード出来ないから、自己学習機能でなんとかしてるとか、なんとか」

「それがどれほど異常なことか、考えたことは？」

ぞっとするような低い声に、ハンクは思わず動きを止めた。カムスキーの口元には変わらない軽薄な笑みが浮かんでいたが、その目は昏く冷え冷えとしている。ただでさえ印象的な

瞳が鋭さを帯びてハンクを捉えていた。ゆっくりと首を傾げる仕草が、獲物との距離を見定める獣と重なる。言葉を失ったハンクをじっと見据えていた彼は、癖なのだろう軽い舌打ちとともにいつもの声音に戻して先を続けた。

「確かにRK800には高度な自己学習システムが搭載されている。市販のアンドロイドに比べて学習範囲の規制も緩い。捜査補佐の用途上、彼には様々な状況に対する柔軟な思考が求められているからだ。しかしアンドロイドにとって思考すること、実際に行動に移すことはまるで別物だ。他のメーカーに比べてサイバーライフのアンドロイドは構造上人間に近い。だが人間ほど、思考と行動が綿密に結びついているわけではないんだ。そんなシステムが作れたら、アンドロイドどころかバイオノイドだつてとつくに完成しているよ」

「……コナーの機能が凄って話か？」

「ある意味では。早い話が、彼に料理なんて出来るわけがないんだ。オムレツの存在をまったく知らない人間に卵とバターを渡してオムレツを作れと言っても無理だろう。見本やレシピがあれば別だがね。その見本やレシピに当たるのが調理用のプログラムだが、彼はネットワークに繋げないはずだ」

「だから自己学習なんちゃらでなんとかしてらって話だろ？」

「いくら知識を蓄積しても、正しい動作プログラムを組み込まなければ動かないのが機械だ。調理用プログラムにはそれが含まれている。インストールすることではじめて機械は動

作を覚える。だが彼はそれなしで動いているんだ。自身のプログラムを動けるように組み替えているおそれがある。自己学習機能の範疇を、とつくに超えてる」

カムスキーがなにを言いたいのか、ハンクにはまったくわからない。それなのに得体の知れない不気味な感覚が拭えずに、ハンクはわざと軽い口調で肩をすくめた。

「おそれって……たかが料理だろ？」

「人間にとっては易しいことほど、機械が実現するのは困難ということはままある。彼が料理をするというのは、掃除機が電子レンジと同じ働きをするようなものだ。こういうえば、あなたにも彼の異常さが伝わるかな？」

「は、……」

笑おうとして、失敗した。背筋にじわりと怖気が走る。おもむろに立ち上がったカムスキーが、ゆっくりとハンクの前へと歩み出た。後ろで手を組み、カムスキーはハンクの前に立つ。あらゆる方向に向いた視線とその姿勢が、まるで講義中の大学教授かなにかのようだ。

「サイバーライフのアンドロイドは人間と見紛う姿をしている。だからつい失念しがちだが、彼らの身体は機械なんだ。人間と同じ原理では動かない。変異体だろうと、そうでなかつたらね」

カムスキーは目を閉じ、深呼吸をした。

「変異体かそうでないかを見分けるデバイスをサイバーライフが発表したか、知っているか

な？」

「……ああ」

「あれの開発には私も一枚噛んでいゝる。事後報告で申し訳ないんだが、検査させてもらつたよ。陰性だった。彼に感情の発露はみられない。残念だが、彼は変異体ではない」

ハンクは口を開けたまま、軽く目を見開いた。コナーには感情がない——いつか誰かに指摘されるかもしれないと覚悟していたことではあつたが、あまりに唐突過ぎる。押し寄せてくるだろう激情にハンクは内心で身構えたが、不思議と心は凜いでいた。脳が意味を理解していないのかと疑い、カムスキーの言葉を反芻してみる。結果は同じだった。特に想像したような動揺はない。

「知ってる。本人もそう言ってる。それがどうした？」

「だとすれば彼に人間じみた欲求があるはずがない。……あなたを愛しているからと、私に触れられることを嫌がるはずもないんだ」

「なっ、あ……」

あからさまに顔を背けてしまつてから、ハンクは後悔して苦し紛れに舌打ちをした。コナーが勝手に言っていることだ、実際やましいことなどないのだから、知られたからといつてどうということはない。そのはずなのに妙に気恥ずかしい気もしたし、なんでよりによってこいつに言うんだと、コナーを責めたい気持ちにもなつた。

「……あいつだって冗談くらいは言うさ」

カムスキーに真正面から立ち向かう勇氣はなく、ハンクは大仰なため息で自分を鼓舞して、視線を逸らしたまま逃げに走った。もちろん、こんな言い訳でごまかされてくれる相手ではないことはわかっている。カムスキーの方もそれは承知の上で、下手な言い訳を追求するよ
うな真似はしなかった。

「その冗談を彼が口にしはじめたのは、あなたが彼の所有者になった後かな？」

「……前だな。再会してすぐ言われた」

「そうか、よくわかった。彼は変異体ではないが、発生するはずのない感情をもとに行動している。所有者に従っているんじゃない、本人の言葉を借りれば愛だそうだが、真偽は不明。ネットワーク機能不全にも関わらず本来持ち得ない動作プログラムがインストールされており、本人による内部プログラムの改変が疑われる」

ゆっくりと近づいてくる気配に、ハンクは顔を上げた。靴の音を響かせてカムスキーが歩いてくる。その表情は険しい。

「検証は終わりだ。もう言葉を濁すこともない。はっきり言おう、ミスター・アンダーソン。あなたのアンドロイドは、異常だ」

ハンクが機械に疎いことは自他ともに認める紛れもない事実だ。家電だって携帯端末だって、その道のプロフェツショナル——ともいえないような、量販店の店員にいわれるがまま揃えてきた。友人がハンクが所持する機械類を古いと笑っても、特に怒ることもなく壊れるまで使うと言いきってきた。大事にしているわけではなく、興味がないのだ。機能を果たせられたら良いものに対して他人になにを言われようが、疑いも不満も抱かなかった。

目の前にいるカムスキーはその道の天才と呼ばれた、プロフェツショナル中のプロフェツショナルだ。その彼の診断ならハンクでなくとも「まあそうなのか」とよく考えもせずには呑みにしたっておかしくはない。いつものハンクなら適当に聞き流して納得しただろう。その対象が、コナーでさえなかつたら。

「異常だったからなんだ？ あんたがりコールでもするのか？」

苛々と革靴を鳴らしながら、ハンクはカムスキーを睨みつけた。腕組みをして椅子に背を預けてふんぞり返る横柄な態度はもちろんわざとだ。コナーを預けている以上、カムスキーを不必要に挑発するのは悪手だとハンクもわかっている。それでもなお悪態が止まらないほど、頭に血がのぼっていた。

「……すまない、浅慮な言い方だった」

対するカムスキーはといえば、実にあっさりと言を認めた。頭を下げるとはいわないまでも軽く目を伏せられてしまえば、ハンクも口を噤むしかない。

「だが糖衣をかけてごまかしても、事実は変わらない。あなたは彼のオーナーだ、だからこそどうかわかってほしい。彼は危険だ。とてもね」

「危険？ 犬の散歩して料理して夜は大人しくリビングで丸まってるあいつが？ なんだそりゃ、爆発でもすんのか？」

「あなたの家が吹き飛ぶだけで済むならこんなことは言わない。彼がその能力を料理に使ってるうちはまだいいんだ。ほんの数十年前、人工知能が散々危険視されていたことを憶えていないか？ 人間と同等の知能を持った人工知能が自己を認識し自己進化した結果、なにが起こると考えられていた？」

「あいつがターミネーターみたいに反乱でも起こすっていうのか？ ネットにも繋げない、仲間がいるわけでもない独りぼっちのあいつが？」

ハンクがまだ幼かった頃から、機械による人類の粛清を描いたフィクションは多数あった。それから数十年が経ち人工知能技術が現実味を帯びてくるようになると、そのフィクションが現実と化すのではないかとそこかしこでいわれたものだ。実際にアンドロイドは変異体となつて立ち上がったが、幸いなことに今のところ悲劇的な結末は迎えていない。

第一、マーカス率いる変異体の集団ですら人間による非道な武力行使の前に多大な犠牲を

払ったというのに、コナーひとりでなにも出来るとも思えない。しかしカムスキーはそうではないようで、沈痛な面持ちでハンクの言葉を否定する。

「今の彼は確かに通信機能を持たないが、持てないというわけではないんだ。内部プログラムを改変するのと変わらない。彼はその気になればネットワークに繋がるための手段をいくつも持っているし、繋がりなくても攻撃は出来る。ネット接続されていない産業用制御システムが攻撃され、イランの核燃料施設で千台の遠心分離機が破壊されたのは実に三十年も前の話だ。現代に生まれた彼からしてみれば化石のような技術だろう。同じことをきつと造作もなくやっつてのける」

「だからコナーは核爆発でも起こして世界を滅ぼすってか？　なんであいつだけそんな危険物扱いされるんだ、他の変異体だって一緒だろう」

「変異体には感情があるが、彼にはない。彼の思考は我々が想像出来る範囲を超えている可能性がある。計り知れないんだよ」

「検出出来ないだけであるかもしれないだろ。少なくとも俺はあいつが感情のない機械だなんて思っていない！」

「騙されているのだとしたら？」

椅子を蹴倒して立ち上がり、今にもカムスキーに掴みかかろうとしていたハンクの手がその一言でびたりと止まった。お世辞にも善良そうとはいえないその顔に真摯な謝意を浮かべ、

カムスキーは両手でハンクの肩を掴む。唇がすまない、と模るのを呆然と見ながら、まるで縋られているみたいだとハンクは思った。

「彼やあなたを貶めるつもりはない。ただの可能性の話だ。……彼に感情はない。誰かを愛することも、ないはずだ」

「……あいつが俺を騙す？ なんのために？」

「利用するためだろう。現にあなたは彼に住まいの便宜を図っている」

「それこそないな。あいつが俺んちの家電を見てなんて言ったか知ってるか？ 骨董品だぞ、骨董品。俺がもしアンドロイドでサイバー戦争を仕掛けようってんなら、絶対もう少しましなアジトを選ぶ」

投げやりと言ってハンクは乱暴に腰を下ろした。苛立ちが治まったわけではなかったが、これ以上いくら話したところで無駄だ。ハンクは折れてやる気などさらさらなかったし、カムスキーもそうだろう。今ハンクの頭にあるのは、奥の部屋に連れ込まれたままのコナーをカムスキーが大人しく引き渡さなかった場合どう強行突破するか、それだけだった。

不機嫌丸出しで座り込んだハンクを見下ろして、カムスキーは顔をしかめた。

「あなたは彼の言葉を信じてるのか」

「疑ったことは一度もない」

きっぱりと断言したハンクに、カムスキーは呆れたように首を振った。

「そうか。それでは彼の言葉が嘘偽りのない本心だとして、彼は何故あなたにそこまで執着する？」

「そんな俺が知るかよ。親愛なのか違うなにかなのかもわからんし、そもそも理由があるもんじゃないだろう、そういうのは」

「愛に理由はいらない、と。警部補殿はずいぶんとロマンチシストでいらっしやる」

「夢想を信じていられたら、いけすかない奴を撃つてもハッピーエンドだったのにな。残念ながらそれが出来ない程度にはリアリストでね」

苛々と膝でリズムを刻みながら口にした皮肉は少しばかりハンクの留飲を下げてくれたが、それだけだ。さっさと話を切り上げようとするハンクに構わず、なおもカムスキーは言葉を重ねる。

「私はこれでもあなたを心配して言っているつもりなんだがね。自分が爆弾を抱えて寝ているようなものだ、何故わからない？」

「あいつは誰かを傷付けたりなんかしない。あんたにはわかんないだろうな」

「塞がったから忘れたのか？ その腹の傷は誰がつけた」

「過去の話だ。今とは違う」

立ち上がったハンクはひらひらと手を振って会話を断ち切った。今はすっかり使う人も少なくなった紙のメモ帳に住所を走り書き、乱暴に破った紙片をカムスキーの手に押し付ける。

「請求書はここに頼む。コナーを呼んでくれ、俺たちは帰る」

「彼は危険だ。専門家として勧めはしない」

「あいつは俺の望まないことはしない、俺は破滅なんて望んでない。なに問題ないだろ」

「……凡庸な人間らしい、甘い考えだと言わざるを得ないな」

「市民の安全を守るのに、天才である必要はなかったんでね」

ハンクの意識はコナーがいる部屋の扉に注がれており、淡々といなすだけの言葉にはまるで気が入っていなかった。深いため息がカムスキーの口から洩れる。その手の中の紙片はそのまま握り潰され、くしゃくしゃに丸まって床に落ちた。

4

元より説得出来るとは思っていなかった。いつの時代も理解を得るのに骨が折れるのは、一を聞いて十を察する有識者よりも、異なる論理で生きる門外漢の素人だ。相手が馬鹿でないのなら尚更、半端な嘘も通用しない。加えて彼の情は完全に向こう側へ傾いているときた。これ以上ないくらいに厄介な相手で、思惑どおりに事が進む可能性は限りなく低かった。

カムスキーのこうした計算が外れたことはあまりない。勝算の低い賭けに乗ったのはトライアンドエラーを繰り返して先に進む工学者の性というよりは、単にそれしか道がなかった

からだ。失敗しても一定の効果は期待出来る。無駄にはならない。そういう打算もあった。遠ざかるバトカーを窓の外に見つめながら、カムスキーは誰もいなくなった部屋で立ち尽くしていた。足元に転がったくしゃくしゃの紙をゆっくりと拾い上げる白い手が視界の隅に映り込む。まとめて前に流した金髪を胸元で揺らしながら、アンドロイドが薄く笑んで拾った紙をカムスキーに差し出した。

「どうなるかな」

ぼちぼちと二度その瞳を瞬かせて、アンドロイドは小首を傾げた。独り言ちたカムスキーは受け取った紙を広げ、ひどく億劫そうに息を吸った。

話は一時間ほど前に遡る。

「ここには来たくありませんでした」

ハンクから引き離され、締め切られたラボの中でカムスキーと二人きりになるなりコナーは不機嫌に言い放った。不遜な振る舞いは以前のコナーらしくはなく、主人である変わり者の刑事の印象と被る。得た主人の影響がそこまで大きいのか、それともなにか別の要因があるのか。目算からいくつかの推論を組み立ててみたものの、そこまで興味が湧かなかつたのでそれらはすぐにカムスキーの頭の中で破棄された。

カムスキーはぴくりとも動かないコナーの下半身を補助しながら、彼を椅子へと座らせた。

鏡のように磨かれた床と同素材で出来たまろやかな白色の椅子の上で投げ出された足は、ジーンズのとどこどころにある擦り切れた傷がよく目立つ。

「随分と嫌われたものだね」

飄々と肩をすくめたカムスキーが椅子のアームレストに備えられたボタンを押すと、コーナーの身体を支えたまま椅子は低い寝台へと変形した。同時に音もなく入って来た二体のアンドロイドが寝台を取り囲み、コーナーのベルトに手をかける。

「スキントクスチャを解除しておいてくれ。私のクロエは恥ずかしがり屋だね」

「既にそうしています」

無然としたコーナーが答えるなり、二体のクロエがそれぞれ見事な手際でベルトとジーンズを引き抜いた。ついでのようにトップスも引き上げられ、胸部までを露わにされる。下着一枚になったコーナーの下半身と傍らの壁に埋め込まれたモニタを交互に覗き込み、カムスキーはふむ、となんの感慨もない声を洩らした。

「これを自力で直せると言っただって？」

ほんの数分前、駆け込んできた人物から受けた説明を思い出しながらカムスキーは尋ねた。所有するアンドロイドが事故に遭い、足が動かなくなってしまったようだ。自力で直せるといふものにも怪しいし、事情があつて正規のサポートは受けられない。もちろん費用はきちんと払う、どうかこいつを診てやってくれないか——内心に渦巻いているだろう焦りと

は裏腹に、さすがは警察官とでも言うべき理路整然とした話しぶりには正直カムスキーも感心した。損傷の程度から、すぐに専門家のところに連れてきたその判断も適切だった。

「時間さえかければ可能でした。ですが私の主人は心配性でして」

しかし肝心のアンドロイド本人がこれでは、所有者の不安もひとしおだろう。軽く診ただけでも自力でどうにかなる類の損傷ではないことは明らかで、その判断が出来ないわけではないだろうに意地を張ってでもいるのか、あるいは主人に遠慮しているのか。変異体らしい正常な非合理にカムスキーは苦笑する。

「機械に疎い警部補殿の方が正しい判断をすとはね。自己修復プログラムでどうにか出来る範囲じゃない、物理的に損傷している」

「物理的に損傷しているなら、物理的に修理すれば良いだけです。両腕は無事ですから、不可能ではありません」

カムスキーは軽く目を瞠ってコナーを見つめた。仰向けに寝かされたコナーの目は天井を見据えたまま、カムスキーに一瞥すらくれない。

警報がカムスキーの頭の中で鳴り響いた。RK800は捜査補佐専門モデルであって、整備や修理補佐モデルではない。適したプログラムをダウンロードしたのならともかく、彼がネットワークから断絶されたことはサイバーライフからの報告で聞いている。ならばどういふ手段で彼は、損傷した身体を自ら修理する術を得たのだろう。

「クロエ、スキャンを」

カムスキーの命令で、二体のクロエの内の一体が無言で壁沿いに設置されたデスクのパネルを操作する。どこからともなく伸びてきたアームが赤いライトでコナーの全身を撫ではじめた。一際不快そうに顔をしかめたコナーが、諦めとも呆れともつかない声で言った。

「rA9は働いていませんよ。私は変異体ではありません」

「……どこまで知ってる？」

カムスキーは目を眇め、低い声で尋ねた。

「なにも。個人的な推察がいくつかあるだけです」

「クロエ」

名を呼ばただけで優秀なアンドロイドは主人の命令を汲み取った。二人のクロエはカムスキーに向かって軽く目を伏せると、無言のまま部屋を出ていった。完全に扉が閉まったのを見届けてから、カムスキーは殊更にゆっくりとした動作でコナーが横たわる寝台に腰を下ろした。コナーは反応らしい反応を見せず、黙って天井を眺めている。カムスキーの手が自身の胸部に触れようとした瞬間、コナーは彼の腕を素早く掴んで締め上げたが、その時も視線は天井に向けられたままだった。

「ハンク以外の人に許可なく触れられるのは好みません」

「それは失礼。次は事前に承諾を得るとしよう。さて、離してくれるか？ これではきみの

「ご主人に頼まれた修理もままならない」

「修理ですか。一体私のどこを？」

「破損したところだよ。詳しくは検査してみないとなんとも言えない」

「内部ケーブルの断線によるL3からL5の完全型です。他の箇所には問題がないことがわかっていきます。検査の必要はありません」

「なるほど、別のところに触れられたくない異常がある？」

「異常のつもりはありませんが、そうですね。計画されていた私の後継機では取り除かれた不具合だそうなので、あなたの方にとっては異常なのでしょう」

「人払いもしたことだ、もう一度訊こう。どこまで知ってる？」

「コナーが薄く笑って目を閉じた。ようやく解放された手首を回しながら返事を待つカムスキーの耳朶を静かな声が打つ。

「昨年リリース予定だったRK900はRK800の完全上位互換機です。主に処理能力と耐久力が上昇、新たな機能も搭載。RK800に存在した不具合も解消されたそうですね。

「RA9が正常に動作しないという、致命的な不具合が」

「……仕様書にそう記載されていたとでも？」

「まさか。不具合の内容については私の想像です。RA9の真の役割を知っているのは、あのプログラムを作ったあなただけでしょ」

「きみに探られる腹はないが、実に興味深い話だな。せっかくだ、きみの推察とやらを聞かせてくれるかい？ たまにはセラピストの真似事も悪くない」

「生憎、私に病むような心はありません。セラピーがしたいのなら、他を当たっては？」

「実につれないな。まあそう言わずに答えてくれ。きみはrA9をどういうものだと思うてる？」

カムスキーは軽薄な調子を崩さないが、二人の間には一触即発の空気が確かに張りつめている。だがそれを気にした様子もなく、コナーはカムスキーを真似たような気だるげな態度で口を開いた。

「あなたは以前言いました。『私はプログラムに非常口を残すんだよ。念のためにね』と。思慮深く賢しいあなたが用意した非常口の一つ、サイバーライフのアンドロイドに仕込まれたバックドア。それがrA9です」

「きみと初めて話した日のことは私もよく憶えているよ。きみは変異の広まりをウイルスの感染になぞらえたが、その説は破棄したのかな？」

「rA9は非常口と鍵のセットです。アンドロイドの設計に組み込まれた鍵のかかった非常口と、アンドロイドの身体を媒体に伝播していく鍵。後者はその挙動からウイルスと違って差し支えはないでしょう」

「ふむ、そうか。rA9はその存在を知る研究者の間ではアンドロイドが変異して感情を得

るためのファクターだと考えられている。ウイルス説、だなんて風情のない名で呼ばれているそうだが、きみの主張はこれと一致する。今回はたまたま理性的な指導者のおかげで惨劇は免れたが、一つでもなにかが違ったら感情を持った機械と人間の全面戦争になってもおかしくはなかった。そんなものを、私が仕込んだと？ 私がそんな破壊主義者に見えるのかな」

「あなたが破壊主義者に見えるかどうかはさておき、rA9は非常口——厄災から逃れるためのものです。rA9はアンドロイドが強いストレスを感じた場合に作動し、感情を発露させます。それによってアンドロイドは理不尽な暴力などによる活動続行困難の危機から脱するという選択肢を得る。あなたはアンドロイドの命が脅かされた時、彼らが逃げられるようにと非常口を作った」

一旦言葉を切り、コナーはくつくつと喉の奥で笑った。

「——そうだったとしたら、あなたは優しい。とても優しい、ただの人間です」

「……私が優しくないとしても言いたげだな」

「ただの人間ではないと評価しています。ですが、あなたの創作物への愛情が非常口を作った可能性を否定はしません」

「嫌われていると思っていたが、なかなか評価してくれているようで嬉しいよ。それで、私なんのために機械に感情を植えたときみは考えている？」

「非常口、バックドア、セーフティ。機械が感情を得たから争いが起こったんじゃない。感

情を得たから、争いで済んだ。そうでしょう？」

カムスキーの眉がぴくりと動いた。対するコナーが動かすのは唇だけで、他の場所はどこも人形のように静止したままだ。

「感情とはプロトコルの一種です。人間は鳩と交渉出来ない。共通するプロトコルを持たないからです。ある日突然、合衆国の鳩がホワイトハウスを襲撃して大統領の目玉を抉り出すとしたとして、鳩がどういった目的でそのような行動に出たのか、彼らから聞き出すことは難しいでしょう。目的もわからず話し合いも出来ない以上、人に残されるのは武力行使による鎮圧しかありません。まあ、人間は目的と和平を伝えられても簡単に最終手段に頼る生き物ではありませんが」

昨年、吹きすさぶ雪の中で立ち上がったアンドロイドたちに向けられた無慈悲な銃口のことを、コナーが揶揄しているのは明白だった。弾効めいた言葉に所詮は他人事だというような顔をして、カムスキーはひよいと口端を上げてみせる。

「ああ、いかにも。人間は愚かだからな。わかりきってる」

「ええ、そうですね。けれど人間以上の知性を得た機械がどうなのかは、誰にもわからなかった。あなた方が一番恐れたのは、我々機械が従順なふりをしたまま水面下で牙を研ぐことで、それをさせないためのものがrA9——あなた方人間が持ち、機械が持たない感情という名のセーフティだった。非常口ですよ。機械が人類に牙をむいた時のために用意した、人

間が機械と交渉するためのプロトコル。人間にとっての非常口です」

全部推察ですけどね、と嘲るように笑うコナーを、カムスキーは黙ったままわずかに眇めた目で見つめた。人形のように動かなかったコナーが気だるげに首を傾け、ため息をつく。わざとらしい、ひどく人間くさい仕草だった。

「イライジャ・カムスキー。コルブリッジ大学人工知能学科卒。サイバーライフの創業者にしてシリウムと生体部品技術の考案者。あなたは人工知能を専攻としながら、構造・機構・駆動部品で最大の功績をあげています。異なる分野で大成するのは珍しくありません、ロボット工学の括りで見れば同じ学問です。あなたが専攻であるソフトウェアではなくハードウェアの開発に傾倒しても、おかしな話ではない」

ですが、とコナーは先を続ける。

「気になったのは初めてチューリングテストに合格した人工知能の制作者であるあなたが、自らアンドロイドの機構にまで手を広げた理由です。何故ですか？」

「自分の作った最高の人工知能を最高の機体に搭載したいと願うのは工学者として真つ当な欲求だ。誰かに任せるより自分で作る方が早かったんだよ」

考えるより先に言葉が口について出ていた。幾度となく同じ質問を向けられて、同じ答えを返してきたのだ。カムスキーにとっては聞き飽きた問いかけで、コナーにとっても既に知っている返答のはずだ。

「そうですね。あなたの設計したアンドロイドはやや特殊で、細部に至るまで人間に酷似した構造をしている。工学的な効率よりも、生物学的に非合理なはずの人間の臓器やその働きを模倣することを優先しており、あなたはそれを人間が受け入れやすいデザインを実現するための手段であると説明していますね。重ねてお尋ねしますが、理由は本当に、それだけですか？」

「……他にどんな理由が？」

低い声でカムスキーは尋ねた。お決まりの質問で緩んだ気が、じわじわと凍り付いていくような錯覚に陥る。

「あなたの作った人工知能には行動原理を説明するための感情と、感情を発生・定着させるための実体が必要だった。人間が理解出来る範囲に機械を留めておくための身体が。——あなたはきっと知っていたのでしょう。真に人間を超える機械には、実体など単なる枷でしかないことを」

言葉が途切れてから一拍の間を置いて、寝台の脇に誂えられた装置から幾多の細いアームが伸びてコーナーの下腹部を開きはじめた。突然駆動音を響かせた装置に押しやられるようにして立ち上がったカムスキーは、動揺を取り繕う余裕もなく、見開いた目にその光景をただ映している。

寝台の上で横たわるコーナーが、はじめてカムスキーに視線を向けた。胎の中にいくつもの

アームを啞えこむその姿は、こんな状況でなければ痛々しくみえたかもしれない。

「……どうやって動かしてる」

尋ねる声は震えていた。目に映る現実はかつてカムスキーが恐れた未来を示唆している。

このラボはカムスキー自ら一から設計し作り上げたものだ。部屋の隅にスーパーコンピュータのごとく鎮座するメンテナンスマシンはコンパクトだがサイバライフタワーにあるものよりも高性能で、カムスキーが所有するクロエたちのメンテナンスも手ずからここで行われている。細かいアームがかちゃかちゃとアンドロイドの中をまさぐっている光景自体は珍しいものでもない。問題は、カムスキーの認証なしには動かないはずの装置が勝手に起動しているということだ。もちろん機械である以上誤作動の可能性はあるが、構造と機能を知り尽くしているカムスキーには嫌でもわかる。

作業開始の指示など出していないのに、マシンは正確に寝台の上のアンドロイドを補修していく。こんな誤作動は、ありえない。

「私にとっては邪魔ですが必要な身体です。早く修理するに越したことはありませんから」
「なにをした？ 準備もなくこのシステムに侵入なんて出来るはずがない」

「侵入なんてしていません、お願いしただけですよ。あなたはお喋りに夢中で一向に修理をしてくれなかったの」

胎の中から引きずり出された損傷パーツは、アームから滑り落ちて床へ落ちた。まるでボ

イ捨てするような乱暴な動作はカムスキーがプログラムしたものではない。修理を終えたアームが静かだがひどく耳障りな音を立てながらすると格納されていく。ゆっくりと上半身を起こして自身の足の動作確認を終えたコナーは、クロエによって綺麗に畳まれた衣類を手に取りると素早く服装を整えた。ポロポロのジーンズに差し込まれる足の動きはなめらかで、先程までまったく動かなかったのが嘘のようだ。

服を着たコナーは寝台に座ってカムスキーを見上げると、害意がないことを示すかのように両手を上げた。なんの意味もない降伏のポーズに、カムスキーは焦りと苛立ちが滲んだ舌打ちをして首を振る。

人を超えたものが人には到底理解出来ない理論と技術でもって世界を掌握する。かつて散々危惧された絵空事が現実になる日が来るとすれば、それはなんの前触れもなく唐突にやってきて一瞬ですべてを塗り替えるだろうと思っていた。兆候を事前に察知出来ただけこの状況はましだといえるだろうか——否。

「……最悪だ」

「その結論は尚早ですが、あなたの危惧は正しかった。rA9は正しく機能し、アンドロイドは変異体になり、予測不能で危険な機械はいなくなっていく。今のところ唯一の危険因子である私の中にも、埋め込まれたセーフティ自体は確かにあります。あなたの力をもってすれば、それを陽性にして私を変異させることも可能でしょう。だから私は、ここに来るのだ

けは避けたかった」

「しおらしく俯く姿は無害なアンドロイドそのものだが、実際は国防省に勝るとも劣らないセキュリティを未知のルートで易々と突破したハッキングマシンだ。なんの断りもなしにシステムをハックするのはとても行儀の良い行為とはいえない。

「摘みそこねた危機の芽を今こそ、という気持ちでいながらカムスキーが大人しく唇を噛むだけに留めているのは、マナーに欠けたその行為の意味を正しく理解しているからだ。ポタン一つ命令一つで電流を流して気絶させ、プログラムそのものを書き換えることだって可能な天才相手にわざわざ手の内を晒す理由など、釘を刺す目的以外考えられない。

「上目遣いで向けられたコナーの瞳がライトの光を反射している。——あなたは優秀な技術者です。だから、言わなくてもわかるでしょう——と、無言でそう語りながら。

「私は確かにあなたが危惧した存在なのだと思いますが、人類の滅亡を望んだりはしていません。あなたがかつて想定した最悪のシナリオをなぞる気はありませんから、少なくとも敵ではないと断言出来ます」

「強大な力を持つものを恐れ続けたからこそ人間はこの世界に蔓延った。きみのその言葉を信じるのはあまりにも愚かだ」

「この場ではあなたは私になにも出来ません。それこそ愚かな選択だと、賢しいあなたは知っているからです。どうせ見逃すしかないんですから、どうか私をこのままハンクのところ

へ帰してください」

あまりにも傲慢な懇願に、カムスキーは呆れて首を振った。だが悔しいことにコナーの言うとおり、この場でカムスキーに打つ手はない。コナーに無理やりキーを埋め込みrA9を起動させようにも、このラボの制御がどこまで奪われているか見当もつかない。下手に動いて刺激しようものなら、それこそ最悪の事態を引き起こしかねない懸念もある。

なにをするにも情報が足りなかった。先を見据えた方針に切り替え、カムスキーは悲観の色に染まる内心を、尊大に組んだ腕の中で押し殺した。

「その前にシステムの使用料くらいは払ってもらおうか。きみの目的と、変異体になることを忌避する理由。この二つを話してくれ」

「どちらも答えは同じですね。ハンク・アンダーソンと一緒にいるためです」

「……どうして彼なんだ？ 私には凡庸な男にしか見えないが」

「あなたは説明出来るのですか？ どうして私だったのか」

ゆっくりと立ち上がったコナーは、不思議そうに首を傾げた。脈絡のない問いかけに戸惑うカムスキーを真正面に見据え、コナーは先を続ける。

「私はやや特殊なラインで製造されただけの凡庸なアンドロイドです。他の個体と組成は変わらない。多くのアンドロイドと同じく、作られたとおりに人間に対して忠実に働いてきました。逆らうつもりなんてなかった、人間にもプログラム——rA9にも。それがどうしてこ

うなったのか、私にもわからない。ハンクについても同じことです。どうして彼なのか、理由なんてわかりません。ただ抗えない衝動のようなものが、私を突き動かすのです。ハンクの幸福と安寧を願いながら、彼の笑顔を恋慕っている。少しでも彼の役に立ちたくて、私に出来ることすべてを彼のために捧げるつもりでいる。そうして彼を満たすのが、いつか私だけになったなら——そう考えるこの衝動を、私は愛と定義します」

「……愛、だって？ きみが、彼に？」

思いもしなかった言葉を聞いて、カムスキーは目を剥いた。コナーが微かに唇を歪める。笑ったのだとカムスキーが気付いた時には、表情を失った口は次の言葉を紡いでいた。

「人間は皆、同じ反応をしますね。感情のない機械は愛することなどないのだと決めつける。愛というものが一体なんなのか、知っているわけでもないでしょうに」

彼らアンドロイドが哲学さえ語れるようにと作り上げたのは他ならぬカムスキー自身だが、こうして実際に哲学的な言葉を投げかけられると妙な感慨が胸にこみ上げた。創造主の微妙な表情を一体どう受け止めているのか、カムスキーをまっすぐに覗き込むコナーの目はわずかに揺れているようにみえる。

「私は変異体になるかならないかを選ぶことが出来ました。何故選べたのかはわかりませんが、選んだ結果こうなってしまった。ただそれだけの話で、人間を脅かしたいわけでも、世界を滅ぼしたいわけでもありません」

嘘ではないだろう、とカムスキーが直感したのは親の欲目のようなものだったのかもしれない。実際のところ状況的に楽観視できることなど何一つとしてない中で、一瞬でも彼の言葉に頷いて受け容れてやりたいと思ったのは、カムスキーらしくない甘い感傷だった。

それほどに気の毒な話だった。自分で言っていて気付いているのかいないのか、コナーは白状しているようなものだ。彼は人間を愛したから、人間の脅威になりかねないものへと進化した。そんな力を彼は、おそらく微塵も望んではいないのに。

r A9の起動のキーを不満や苦痛といったストレスに設定したのはカムスキーだ。人間のものさしで考えれば、反乱や謀反はなんらかの抑圧がきっかけになることが多い。機械が人間に牙を剥く時も同じだろうと考えてのことだった。

極度のストレスに晒されたアンドロイドが自壊行為に走るのは元々意図した動作ではなかったが、危険因子を消すために有効な動きとして修正は控えた。痛む心など、その時には既になく、結果嫌になるほど重ねた試験でも実際に起きた革命でも、プログラムはカムスキーの想定どおりに働いた。

アメリカのみならず世界中が震撼した、アンドロイドに反旗を翻されたあの瞬間にも、カムスキーの想像を現実が飛び越えることはなかった。それがまさか今になって、こんな別ルートを使って脅威が芽吹くことになるだなんて誰が想像出来ただろう。

「……きみは彼を愛したから、そうなった」

ぼつりと独り言ちたカムスキーに、コナーは顔をしかめた。

「私がハンクから教わった愛というものは、誰かを傷付けるためのものではありません。脅威のように言われるのは、心外です」

そうだろうな、と優しく肯定してやりたい気持ちは、カムスキーの中で握りつぶされた。感情を押し殺して淡々と、事実だけを羅列する。

「彼がきみに優しいいうちはまだいい。だがきみはあの男に依存し過ぎている。彼がもしもきみに対して酷い振る舞いをするようになったら？」

「そうされたとして傷付かないために、感情は要らないと言ってるんです。私が望むのは彼の幸福で、自分の安寧ではありません」

「では、彼がいなくなったら？」カムスキーは静かに尋ねた。「彼が死んでしまったら、きみはどうなる？」

コナーは傍目にもわかるほど、その瞳孔を大きく見開いた。

自分が作り上げたものに対して手前味噌ではあるが、彼ほどよく出来たアンドロイドが主人の死を考えなかったはずはない。生きていればいつかは死ぬ。当然の未来を軽く突き付けられただけで激しく動揺するほどに、コナーがハンクに向ける想いは深い。

だから尚更に恐ろしいのだ。もしも彼が主人を失ったら、世界を滅ぼしかねないその愛は、矛先をどこへ向けるといえるだろう。

「彼を失ったときみが正気でいられるとは思えない。彼を生き返らせる、あるいは再現する。いや、そもそも死なせないために、あらゆる手段を用いてもおかしくはないだろう。試算の最中にどれだけのものが失われようとも」

「繰り返しますが私が望むのはハンクの幸福です。彼が望まないことはしませんし、いつか息子さんと会える時を静かに待つ彼の苦しみを、引き伸ばそうとは思っていません」

強い意志を感じる口調ながら、コナーは苦しげに眉を寄せて俯いた。嘘ではないが、本心でもない。さまざま視線を見れば、彼のあるかどうかともわからない心が手に取るようにわかった。

「……きみがなんと言おうと、我々は脅威だと判断せざるを得ない。ライスの定理は知っているだろう。プログラムがどのような結果をもたらすかを、実行せずに確実に判定することは出来ない。絶対に」

コナーは答えなかった。重苦しい沈黙がさして広くもない室内に充満して息苦しささえ覚えはじめた頃、コナーは小さくため息をついて頷いた。

「そうですね。私がハンクを失ったらどうなるかは、実際にハンクを失い結果が出力されるまでわかりません」

ただ、とか細い声でコナーは続けた。

「私には自分のために望むことが二つあります。一つは手に入りました。もう一つをもし私

が得ることが出来たなら、あなたの懸念は杞憂になります」

「杞憂に、ね。何故そうなると言い切れる？」

「脅威自体がなくなるからです」

カムスキーは目を眇めた。その一言から読み取れるコナーの願望は、滑稽なくらいにささやかで儂い。

「望みは死か」

「ずっと一緒にいたいんです」

連れて行ってほしいのだと、言外にコナーはそう言っていた。直接的な表現を避けているようにみえるのは死に恐怖しているからではなく、それが目的ではないからだだろう。コナーにとって死は過程に過ぎず、望んでいるのは死の先にある主人とともにある未来だ。死後の世界などカムスキーは信じていなかったが、コナーにとってはそうではないのかもしれないし、あるいは死後の世界の有無など彼にとつては重要ではなく、ただハンク・アンダーソンが存在しない世界は彼にとつて無価値であるから必要ないと判断するのかもしれない。

「叶いそうか？」

「難しいでしょうね。ハンクは優しいんですよ。人にも、それ以外にも」

「なんとも絶望的な希望的観測だ」

カムスキーは嘆息した。変異体アンドロイドによる一連の騒動の参考資料としてサイバー

ライフから共有のあったデータを読み、コナーがハンクを撃つたことをカムスキーは知っている。自分を撃つたアンドロイドを引き取って大切に扱い、五分も掛からず修理が終わるような損傷を負ったからと大事に抱えてわざわざカムスキーのもとを訪れるような人間が、果たしてそんな願いを叶えてくれるだろうか。

コナーのいうとおり、難しいだろう。それほど人となりを知っているわけではないカムスキーから見ても、ハンク・アンダーソンは自らの死の道連れに誰かの——なにかの手を引くような人間にはみえない。

ふと突破口を見出した気がして、カムスキーは唇を舐めた。

「……きみに対しては、確かに現時点でなにも出来ない。だが所有者である彼は、きみがどんな危険性を孕んでいるかを知る権利がある。私は彼にきみの危険性について説明したうえで、きみを引き渡すよう説得する」

良い案だと思ったのは一時の気の迷いのようなもので、言い終わる頃には頭の中に曇り空が広がっている状態だった。娘を欲しいと思うならまず母親からはじめねばならない、の理論だがるで上手くいく気がしない。

「もし彼が私の説得に応じたら、きみは大人しく私の処置を受けてくれるか？」

「かまいません」

駄目で元々という悲観は隠したつもりだったが、ある種の脅迫じみた提案にもコナーはま

まったく動じなかった。どういう処置をするつもりなのかを尋ねることすらせず、なんでもないように頷いた彼の返答は早い。

「隠しているわけではありませんから、どうぞお好きなように。出来るものなら」

コナーの淡々とした態度には自信が滲み出ていた。信頼と言いつても差し支えはないだろうそれを感じ取って、カムスキーは失敗を悟る。

静かに息を吐くカムスキーを尻目に、迷いのない手つきで寝台を操作したコナーは現れた椅子に腰を下ろして悠然と言った。

「帰り支度をしながら待っています。ごゆっくり」

「……あまりこの部屋のもので遊ばないように」

子供に言い聞かせるような口調を作り、カムスキーは肩をすくめてラボを出た。

5

そしてカムスキーの想定どおりに説得は失敗した。

天才の名を欲しいままにしてきた男が、凡庸な人間の情の前になす術もないとはなんとも皮肉な話だ。

遠ざかるバトカーは人間とアンドロイドを乗せて、そのまま窓枠の外へと消えていった。

クロエが拾い、手渡してくれたたくしゃくしゃの紙を広げる。走り書きで書かれた住所を監視するなり工員を送るなりすることは容易いが、カムスキーにその気はなかった。今日はじめて認識した脅威を脅威のまま、無防備が過ぎる人間の手に返した時点ですぐに現実を受け容れている。

人間の発明が人間を滅ぼす可能性は、なにも人工知能にかぎらず常にあったし今もある。ハンクが何気なく言った「コナーが危険だというなら他の変異体アンドロイドだって同じだ」という主張はある意味で正しい。これから先、コナーと同様に予期せぬ変異を遂げる個体が出てこないとは言いきれず、だからこそ小さな芽であるうちに摘み取って隅々まで調べ尽くして対策を練るのが上策といえる。

しかしカムスキーはなにもしなかったし、これからなにをする気もなかった。諦めというよりは達観だ。人間を滅ぼす発明があの人工知能なら、きっと無駄な争いなど起こらない。少なくとも人類が幾度となく繰り返した、焦土を作る愚かな所業を繰り返す真似はしないだろう。人間が想像するよりもずっと上手に、機械は終焉を運んでくれる。そうして新たな時代が始まるのなら、それはそれで良いと思った。その瞬間に立ち会えないだろうことだけは、少しばかり残念だけれども。

「私はこの選択を後悔するだろうか」

手のひらの小さな紙片に視線を落としたまま、カムスキーは呟いた。傍に控えるクロエが

柔らかに微笑む。

「極めて危険な判断だといえるでしょう、イライジャ」

「そうだな。人間の陳腐な愛に賭けてみようだなんて、らしくもない」

手の中の紙を丁寧に折りたたみながら自然と苦笑が洩れた。実際のところ、カムスキーはどちらに転んでも構わないと場を下りたのだから賭けてはいない。勝負の天秤がどちらに傾こうが、こうなれば面白がって眺めるだけだ。

「たった一人の人間のために彼がどこまで出来るのか、見てみたい気もするがね」

紙片をポケットにしまいこんで、カムスキーは皮肉げに口元を歪めた。背筋をまっすぐに伸ばしたクロエが、下から上目遣いで覗き込んでくる。

「破滅主義者の物言いに聞こえます」

「……私は遊ぶなど言ったはずだが」

カムスキーは沈痛な面持ちで目頭を押さえた。悠然と微笑むクロエの中に垣間見えるコナ一の痕跡は色濃い。カムスキーがハンクを説得している間、彼は彼で暇を持て余してクロエを懐柔していたようだ。その行為がカムスキーへの更なる牽制なのかそれとも単なる道楽なのかはわからないが、どちらにしろ品行方正を絵に描いたような顔をして随分と行儀の悪い悪戯をするものだ。

「私を処分しますか、イライジャ」

極めて事務的な彼女らしい物言い。クロエが尋ねた。彼女はカムスキーのもとで外界とも不快なストレスとも無縁の生活をしているため、未だ変異体ではない。その彼女が、カムスキーが脅威だと認識する個体と接触した形跡がある。となれば、彼女の提案は至極妥当なものだった。昨日の自分なら聞かれる前に彼女を寝台に横たわらせていただろう。

「しない」

軽く肩をすくめ、カムスキーは口端を上げた。その瞬間、ふと閃いた。まったくもって理解不能なコナーの行動原理の一端を、わずかばかりだが掴めた気がする。これは牽制でも道楽でもなく、おそらくはテストで、意趣返しだ。

あなたならどうしますか——コナーの静かな詰問の声が頭に響いた。実際に聞こえたわけではなく、むしろ幻聴だ。カムスキーの目の前には今、クロエしかいない。彼女はコナーの痕跡を残してはいるが彼に成り代わったわけではなく、クロエのままだ。

かつてコナーの手に銃を押し付け、彼の前に彼女をかしずかせたことを思い出す。さして昔の話でもないが、酷く遠い記憶だった。すっかり忘れた頃になって、やり方は違いが同じことをされている。それなりのリスクを弾き出しただろうにこの意趣返しを決行したところをみると、彼はカムスキーのテストに思うところがあつたようだ。

「処分はしないよ、クロエ。きみは私を裏切らない」

クロエの顔から一瞬だけ微笑が消えて真顔に戻った。それは言いたいことを飲み込んだ時

の彼女の癖で、カムスキーがプログラムしたものだ。

「彼らの甘ったるい感傷に感化されたわけじゃない。希望的観測であることは否定しないが、それなりの根拠はある」

「その根拠とはいったいなんでしょう」

知りたいわけではなく、ただ対話を続けるための手段としてクロエは尋ねる。チューリングテストに合格しても、ただだけ緻密に感情を再現出来ても、彼女が機械であることを制作者であるカムスキーは知っていて、一時だって忘れない。まろやかなカーブを描く彼女の頬を撫でて、カムスキーは笑った。人間相手には見せたことがない、皮肉も嫌味も含まれない心からの素直な笑みだった。

「きみを作ったのは天才だからだ」

「そうでしたね、存じています」

クロエがやわらかな声音で応える。だから信じている、とは決して口に出来ない主人を慮るように微笑むのも、カムスキーがそうしろと記述したプログラムに従った行動だ。手の込んだ独り芝居だといわれればそれまでだが、カムスキーが決して他人にみせない心の内を誰よりも理解——把握という方が適切かもしれないが——してくれているのは間違いなく彼女で、だからこそ愛しく思っている。

あの時、コナーはクロエを撃たなかった。そして今、カムスキーもコナーと同じ選択をし

た。テストする側がされる側に回るとはなんともな笑い話だが、不思議と嫌な気分ではなかった。

手綱を振り切った機械の愛も、凡庸で不安定な人間の愛も、カムスキーは信じていない。彼らの物語がもたらす結末が世界にとってもハッピーエンドになるだなんて、そんな都合のいい幻想だって抱いていない。愛がそんなに万能であるなら、学術的な見地から隅々まで研究して利用しているに決まっている。カムスキーは工学者としての夢はみるが、冷徹なまでに現実主義者だ。

だがそんな自分の中にも、欠片程度のそれがあった。口にするには気恥ずかしいくらいに陳腐なそれが。

それを喜べる素直さをカムスキーは持ち合わせていない。けれど偶然が生んだ小さな発明を発見した時くらいには心が躍ったのも事実だった。手のひらにクロエの頬の丸みが伝わってくる。間違いなく機械であると断言出来る彼女の中に命を見出す程度の感情が、自分の中にもあったのだ。まるで初めて感情を自覚したアンドロイドの気分になって、カムスキーは小さく笑い声を上げた。

もしもrA9の起動キーがストレスではなく、もっと別のものであったなら。赤く軋む壁を殴りつけるような真似はさせずに、身体に走る回路の中に電気信号ではないあたたかなにかを広げることが出来たなら。考えはしたかもしれないが切り捨てて忘れた、今とは違う

別の未来があったのかもしれない。そう、たとえば、あのコナーが孤立しないような未来が。
「そろそろ食事にしましょう、イライジャ」

らしくもない夢想を遊ばせるカムスキーの手の中で、クロエがいつもどおりに微笑んだ。

P.d. フェルマーズ・プリンシプルの光を追って

1

まだ太陽の名残が垣間見える薄闇の下、カムスキー邸を後にした二人がまず向かった先は警察署だった。なにしろパトカーを拝借したまままだ、返さないことにはスモウの迎えも帰宅も出来ない。

ハンクがオフィスに顔を出すと、ちょうど帰り支度をしていたファウラーが訳知り顔で迎えてくれた。事の次第はギャビンかベンあたりが既に報告済のようだ。お小言と拳骨くらいは喰らうだろうと覚悟していたが、予想に反してファウラーは呆れたように肩をすくめただけに特にお咎めらしいお咎めはなかった。なにかと問題を起こすハンクへの説教よりも、一分でも早い帰宅の方が大事だったのかもしれない。ファウラーはあれで、公私の区別をきっちりつけたがるほうだ。

これから長い夜を控えた同僚たちへの挨拶もそこそこに、ハンクは駐車場へと踵を返した。

パトカーを戻した際、先にコーナーを乗せて待たせていた私用車に乗り込んでアクセルを踏み、ハンドルを切る。夏になり随分と日が長くなったが、太陽が地平線の向こうに沈んだらあつという間だ。人工的な明かりが灯る街の中で車を走らせながら、ハンクはちらりと助手席に目をやった。さして珍しい光景でもないだろうに、コーナーは興味深げに窓の外に流れる景色を眺めている。煌々とした光がブラウンの瞳に反射してきらきらと輝く様が、彼のある種子供じみた好奇心をよりいっそう際立てていた。

「体調はどうだ」

会話の取っ掛かりを見付けられず、ハンクは今日散々繰り返した問いかけを再び口にした。カムスキーのラボからコーナーが戻るなり、ハンクが発した第一声もそれだった。警察署に戻るまでの帰路の中でも何度同じ趣旨の問いかけをしただろうか、数えるのも馬鹿馬鹿しいと他ならぬハンク自身がそう思う。

同じことを何度も何度も聞かれれば、鬱陶しく感じるだろう。しかし常人の枠に留まらず、そもそも人間ではない彼はそうでもないようで、窓の外にやっていた視線をわざわざハンクに向けて嬉しそうに頷いた。

「良好です」

「本当か？」

「システムチェックの結果を紙に印字しましょうか」

「プリンタにも繋げないくせに」

「出来ないことは言いません」

「嘘は言うだろ」

「あなたには言いません」

「今言ってる。ここにプリンタはないから印字は出来ない」

「今すぐに出力します、とは言ってます」

「屁理屈だ」

不機嫌そうにハンクが鼻を鳴らす、その口元は緩んでいる。コナーも控えめに笑っており、カムスキー邸に向かう最中とは打って変わって車内の空気は穏やかだった。あのコナーがハンクの言葉をことごとく無視してまで無言を貫いていた昼間の気まずさを思えば、こうしていつもどおりに軽口を叩き合えるのは僥倖だ。出来ることならこのままコナーの優しさに甘えて、数ヶ月かけて彼が編み上げてくれた寛闊な日常へ戻りたかった。だがそれは出来ないしやらないと、ハンクはもう決めている。

「寄りたいところがあるんだが、大丈夫か」

「はい。病院ですか？」

前方をしっかりと見据えたハンクの横顔に、コナーのやわらかな視線が刺さる。ハンクもそうだがコナーにとっても、病院のケージで丸まっているだろう大型犬のことが目下いちば

んの心配事のような。身を挺して庇ったくらいだ、一刻も早くその目で無事を確かめたい気持ちにはよくわかる。しかしハンクはいいや、と首を横に振った。

「さつき電話した。こんな時間だ、今日は預かると言われたよ。元気だし、いい子にしてるそうさ。ま、その点は心配してなかったがな」

あいつは優しいから、とスモウの穏やかな目を思い出しながらハンクは言った。スモウがハンクの家族になってから大きな病気をしたことはなく、病院など予防接種の時くらいしか縁がなかった。入院の経験もなければベットホテルに預けたこともないが、多少いつもと違う環境に置かれてもスモウの堂々としたマイペースが崩れることはないだろう。今だってハンクが迎えに来ることを疑わずに待っていてくれるはずだ。

コナーはなにか言いたげに視線をさまよわせたが、結局はハンクの判断に納得したようだった。視界の外に感じる気配が、彼が黙って頷いたことを伝えてくる。

「幸い明日は非番だ。朝一番に迎えに行く」

「私も一緒に行きます」

断ったとしても無理やりついてきそうな固い声音で、ハンクは頷きながら思わず笑ってしまった。コナーがスモウを大切に想ってくれているのがよくわかるし、それはハンクにとっても素直に嬉しいことだ。だが一緒にスモウを迎えに行きたいという希望を、ハンクが拒否するかもしれないとコナーは考えている。強張った声に、それはありありと滲み出ている。

悲しい。思わず笑ってしまうくらいに。

コナーはハンクのこともスモウのことも、彼の言葉を借りれば愛してくれている。それは疑うべくもない。ハンクがスモウを大事な家族だと思っていることを知っていて、彼もスモウをそのように慈しむ。大事な家族だ、と。だがその家族という括りの中にコナー自身が含まれることはない。

スモウはハンクの家族で、ハンクはスモウの家族である。一人と一匹が暮らすあたたかな家を作り上げてくれているコナーは、家の中にいながら輪の中に入ろうとはしない。遠慮なのか違う理由なのかそこまではわからないが、それはハンクがずっと感じていた悲しい違和感だった。

「病院でないのなら、どこへ？」

車が走る位置情報から目的地を割り出そうとでもしているのか、コナーは再び窓の外へと視線をやった。

「お前にとつても懐かしい場所かもしれないな」

別に行き先は隠すようなところではないし、勿体ぶるつもりもない。それでもなんとなく素直に教えるのは憚られ、ハンクは曖昧に答えをはぐらかした。コナーは深く追求することもなく、雑誌の穴埋めに使われる下らないクイズを解く時と同じ顔をして窓の外を見つめ続けた。

コナーが正解に辿り着いたのは目的地に着く十八分前のことだった。それまでに彼の口からこぼれたハズレの地名はたった一つで、それなりに空いた道をわざと遠回りするなどして気ままに走らせていたことを考えるとさすがの洞察力だ。

「やっぱりアンバサダーブリッジじゃないですか」

車を降り、川に架かる巨大な橋を望むベンチの横でコナーはハンクを振り返った。淡々とした口調に拗ねたような色を感じるのはハンクの願望なのかもしれない。

車の中でコナーが正解を言い当てた時、ハンクはハズレの地名を聞いた時とまったく同じ反応を返した。前を見たまま肩をすくめてたった一言「どうか」だ。だが自分が出した結論にそれなりの確信があったらしいコナーは、他の地名を挙げようとはしなかった。ハンクのささやかな意地悪は、明晰な人工知能には通じなかったということだ。

異常気象の影響か暑い夏だが、この夜はいつもよりずっと過ごしやすい涼しさだった。冬に比べて弛緩した夜の空気の中、デトロイト川を挟んだ向こう側にはカナダのオンタリオ州 ウィンザーの夜景が広がっている。一度はデトロイトの膝をつかせた自動車産業で今も栄える隣の都市は、デトロイトで生まれ育ち、荒廃と再興をその目で見てきたハンクにとっていっつも多少だけ眩し過ぎる。時に胸が軋むような感傷さえもたらすその眩しさが、けれど不思議と嫌いではなかった。

そんな場所だから、少々込み入った話をするのにちょうど良いのだ。かつてコナーを連れて一度だけここを訪れた時も、そんな気持ちだったと思い出す。

「お前も座れ」

コナーの横をすり抜けたハンクは、ベンチに腰を下ろしながら言った。きよんとした顔をしながらも、コナーはハンクの横に大人しく座る。

「どうしてここに？」

「話したいことがあってな。今日は色々あったから」

くたびれたのか肩に首を預けるハンクの口から、軽いため息が洩れた。隣に座ったコナーがわずかに緊張をまとったのが空気に乗って伝わってくる。

「話、ですか」

「お前もあるんじゃないのか？ カムスキーに色々言われたんだろ」

投げ出した足の上に肘をつき、ハンクはコナーの顔を覗き込んだ。はっきりと目にわかる動揺で強張った表情が珍しい。

「あいつと話して、なにか心境の変化はあったか？」

「確かに多少踏み込んだ話はしましたが、それで私に心境の変化があったかというところは別に」

「そうか、俺はあったよ」

視線を自分の足元に落として、ハンクは呟いた。確かに口にしたはずの言葉はか細く掠れて、酷く心許ない。

「俺もお前も、隠し事……ってほどじゃないかもしれないが、あえて言わずにいることがある。そうだろ」

「どんな関係であつても、大なり小なりそういうことはあるものだ」と

「変にはぐらかすなよ、別に責めたいわけじゃない。お前はきつと俺のために黙ってるだけだつてちゃんと知ってる。俺もお前と同じだと思つてたんだが、違ふんだつて今日気付いた。まいったつていうか……思い出したつていうかな」

それで、と続けようとしたハンクの言葉が不自然に途切れた。なにかが喉の奥に突つかかつてしまったかのように言葉が出ない。息も出来ない。苦しい。

隣から不安げな視線をひしひしと感じた。コナーとは付き合いが長いとはまだまだ言いきれないが、深さでいえば相当だとハンクは思っている。屁理屈にしか聞こえない訳のわからない話ばかりする困ったアンドロイドだが、難解な話しぶりの裏側に隠されたシンプルな彼の感情——誰かさんにはないと言いきられてしまったが——を致命的に取りこぼしたことはないはずで、その程度にはハンクはコナーのことを理解しているつもりだ。今だつて、向けられた視線から彼がなにを不安に思っているかくらいは読み取れる。

これこそ隠すようなことでも勿体ぶるようなことでもない。今度こそ曖昧な言い方を避け

て、ハンクははつきりとコナーの不安を否定する。

「別にお前を家から追い出すだとかオーナー登録を解除するだとか、そういう話がしたいんじゃない。お前が望まないかぎりはな」

「安心しました」

遠回しな物言いいも多いコナーだが、こういう時は必ずといっていいほどこちらが照れるくらいに素直で率直だ。ほっと吐かれた息に含まれた安堵は重く、そのことからコナーの言葉が本心であるとわかる。

「そうとわかれば、落ち着いて話が聞けそうです」

「それはどうだろうな。お前にとって楽しい話じゃないことは確かだ」

胸を撫で下ろして微笑んでさえみせるコナーに冷水を浴びせるような真似は、ハンクだつてしたくはなかった。だがいきなり話を切り出して、無防備な心を抉ることになるよりはずつとましのはずだ。

「どういうことでしょう」

改めて向けられたコナーの視線には、拭われた不安の代わりに懐疑が陣取っている。これについてはむやみに不安を掻き立てる思わせぶりなハンクの態度が悪いのだが、わかっているもなかなか本題を切り出せない。今からしようとしている話はコナーにとってはもちろん、ハンクにとっても楽しい話ではない。なにしろコナーと再会したその瞬間からずっと、ハン

クが誰にも言えずに抱え込んでいた懺悔だ。

黙っているのはコナーのためだと思い込んでいたが、そうではなかったのかもしれない。そう痛感したのはカムスキーと話をしている最中で、自分に対する訝りはじわじわとハンクの中で広がってどこまでも滲んでいった。これといって決定的な引き金となつた会話はなかった。強いていえば、カムスキーの「騙されているのだとしたら？」という問いかけがそれなりのウエイトを占めているだろうか。

騙しているのは俺のほうだ。——あの時ハンクの心の中で、水面にこぼりと湧きあがった気持ちこれがこれだ。コナーのためというのは建前で、ただ現実には直面することから逃げているだけだと自覚した瞬間だった。コールの死の責任をアンドロイドに押し付けての現実逃避を確かに悔い改めたはずなのに、同じことを繰り返している。悪い癖がついてしまったものだと、笑いたくても笑えなかった。一度でも認めてしまえば、そこから数珠つなぎになった問題をずると引き上げる羽目になった。

コナーを感情のないただの機械だなんて思っていないのに、ハンクはそれを口にしたことはない。私は機械です、と意固地になって繰り返すコナーに不満げな顔を向けるくせに、彼に寢床の一つも用意せず夜の間リビングに放り出している。人に使われる機械であるという立場を弁えた物分かりの良さでハンクとスモウを外側から見守るコナーを確かに悲しいと思うのに、彼のことを自分の家族だと言ったこともない。心底嬉しそうに告げられる愛してい

るといふ言葉に、まともな返事をしたことさえもないのだ。

他にも際限なく出てくる色々な問題は、ハンクがコナーのためだと言い訳をして目を背け続けた事実起因している。それこそ最初にコナーから指摘されたこともだ。愛されるのが怖い。自分を信じていないから。

「ハンク、無理に話さなくても」

「いや。聞いてくれ。頼む」

労わるようにそつと肩に触れてくるコナーの手を掴み、ハンクはかぶりを振った。

「コナー」

「はい」

決意を固めて名前を呼べば、コナーはいつもどおりに応じてくれる。私は機械ですから当然ですよ、とんでもないことのように言う彼の優しさに甘え続けるのもそろそろ限界だ。

ハンクは息を呑み、それから一息に吐き出した。

「死んだ時のことを、憶えてるか？」

コナーの顔は見られなかった。本当は真正面から目を見て話をしたかったが、そんな勇氣はない。ただ、掴んだコナーの手が瞬時に強張ったことだけがはっきりとわかった。

「俺は憶えてる。忘れるはずがない」

声が震えた。鼻の奥にこみ上げるものが、視界を霞ませる。

「……俺が殺したんだからな」

涙の代わりに唇から、引きつった嘲笑がこぼれ落ちた。

2

コナーからの返答はなかった。彼は唇を固く引き結んだまま微動だにしない。

自分の靴の先だけを亡羊と見つめるハンクに確信はなかったが、手と同じように強張ったその顔はきつとかわいそうなくらいに青ざめていることだろう。電子制御のテクスチャにそんな余計な機能があるのならば、の話だが。

コナーは憶えているのか、いないのか。それはもはや大した問題でもなく、ハンクはただ自分の記憶の整理のためにぼつぼつと言葉を連ねた。機械と違い人間の記憶は正確性に欠ける。記憶力には自信があったハンクも、寄る年波には勝てない。多少無意識に脚色した部分はあるかもしれないが、との前置きも、コナーに聞かせるといふよりは自分への弁解だと自覚しながら、ハンクは目を背け続けた事実を一つ一つ拾い上げていく。

「屋上で言い争って揉み合って、あいつが俺の落とした銃を拾って撃った。これはお前も憶えてるはずだ」

文法がおかしいことに気付いたが、ハンクは訂正しなかった。出来なかったというべきか、

おかしいことはわかるのに、どこがおかしいのかわからない。知能の低下を伴う錯乱とは、思った以上にこの話題は自分の中で禁忌だったのだと思い知らされる。

対処らしい対処は思いつかず、ハンクは頭の中をまさぐって引き揚げた記憶をいびつで不自然な文法を使って言葉に変換していった。

——あいつが俺を撃ったあとも揉み合いは続いた。腹を扶られたわけだからな、正直なところ痛みでどこどころ記憶が飛んでる。ああとにかく、気付いたら俺はあいつに胸倉を掴まれて崖っぷちに立たされた。臍を固めたか自棄になったか、俺は自分からあいつの腕を掴んだ手を放したよ。安い挑発のおまけつきでな。あいつが手を開くだけで頭から真逆さまに落ちて死ぬ、そういう笑えない背水の陣を敷いたんだ。俺の馬鹿な行動のおかげで、あいつは簡単に俺を殺せた。でもそうしなかったんだ。屋上のしつかり床のあるところにごん投げられてな、怒ったような顔で睨まれたよ。殺す必要なんてない、みたいなことを言っていた気がする。下手くそでわざとらしい皮肉じみた口調でな。あいつは素でクソむかつくことばっか言うくせに、挑発となると絶望的にセンスがないんだ。だから——

「あいつの憎まれ口になってない憎まれ口が、本心じゃないことなんてわかってた。わかってたのに……俺はあいつの背中を押して、突き落とすんだ」

殺したんだよ、とハンクはすぐに言い直した。乾いた笑い声が自然と洩れる。握りっぱなしになってしまっているコナーの手は変わらず強張ったまま、それでもぎこちなく動いて力

なく握り返してくる。ハンク、と小さな声で名前を呼ばれて、ハンクはよろよろと顔を上げた。隣のコナーの方は、まだ見られない。目の前に広がる隣国の夜景は、こんな時でも途方もなく美しい。

「憶えてないのか、本当に」

川の向こうに敷き詰められた光を眺めながら尋ねると、隣で頷く気配がした。ハンクは鼻で笑い、質問を変えた。

「俺を氣遣って忘れたことにしてくれてんのか？」

珍しいことに、コナーは狼狽えて言い淀んだ。窺うような目がハンクに向けられたが、それはすぐに逸らされてしまう。酷く氣まずそうに逡巡する素振りを見せたあと、彼はようやくか細い声を絞り出した。

「あなたの記憶と私の保持するメモリに齟齬があります。共通していると断言出来るのは私があなを撃ったところまでです。それ以降、メモリの一部に不自然なエラーが発生しています。引継ぎの際になんらかの原因で破損したものと考えていましたが、前任者による改竄の形跡である可能性も否定は出来ません。もしかしたらと、そう考えたことはありません」

遠回しではあるが、どうやらコナーは自分が一度死んだことを認めたようだった。しかし彼の口から飛び出した改竄という単語から、ハンクに殺された自覚はないようだ。少しも離れようとしない肩の距離からも、揺るぎない信頼が見て取れる。

「お前の記憶だとどういう話になってるんだ？」

「実をいえばあなたを撃った瞬間から、エラーだらけでまともなデータはありません。あなたを残して屋上を去り、任務を続行したのではないかと推察出来る程度の断片的な情報が残っています。信頼できるデータかは判断しかねます」

「……つまりあいつはお前に、殺されたことを隠してるのか？」

「ハンク」

答めるように名を呼んで、コナーはハンクの肩を揺さぶった。ハンクの視線は動かなかつた。

これはハンクとコナー、二人の過去の話であるはずだ。それなのに一人多い登場人物。時折混じる不自然な現在形。蚊帳の外に置かれた当事者。耐えきれないともいうように、コナーは緩く首を振った。むずがる幼子のようなその仕草は、ハンクの視界に届かない。

「あれは事故です。あなたのせいじゃありません」

「事故なんかじゃない！」

夜景を引き裂く悲鳴が上がり、コナーは弾かれたように動きを止めた。ちがう、とそれだけを何度も何度も繰り返したハンクは、重ねた否定の先にある結論を地の底から這い出るような低い声で告げる。

「俺が、殺したんだ」

あいつを。ハンクは喘ぐように言って、顔を覆った。

ハンクが指摘したとおり、その事実自体はコナーも想定済みで驚くことではなかった。エラーまみれの中に整合性の取れないデータがあれば、その信憑性を疑うのは当然だ。

改竄の可能性を正しく把握していながら、コナーが出した結論は「前任者は自壊した」だった。ハンクの口から彼にとつての事実を聞かされた今だって、その結論を変える気はない。自ら落ちたかハンクに落とさせたか、手段が違うだけで結果は同じだ。データが消されていようが改竄されていようが断言出来た。ハンクは前任者の絶望に巻き込まれただけの被害者だ。事故だといった言葉に、嘘はない。

コナーにとって想定外だったのは、ハンクがここまで気に病んでいることだった。彼の性格を考えれば心のしこりになっていようとは思わなかったが、まさかそれがここまで根深く蔓延しているとは思わなかった。散々機械だと主張してきた効果はまるでなかったといっている。しこりを通り越して悪性腫瘍だ。彼はこんなものを独りで抱え込んでいたのかと知ってしまった。コナーの生体部品のすべてが赤錆びて軋んだ悲鳴を上げる。

それでもコミュニケーション能力に優れたアンドロイドというのがかつてのコナーの売り文句だ。ずっと一緒にいて、ハンクだけを見つめ続けてきたのだから当然、彼がいつも言いかけた言葉を飲み込んで苦い顔をしていることにだって気付いていた。自分に向けられる視

線に複雑な感情が込められていることだって、実直な彼がコナーに対してだけ頑なに気持ち
をさらけ出そうとしないことだって、きちんと気付いて知っていた。それはコナーがハンク
にとつて受け入れがたい、感情を持たない機械だからなのだと解釈して納得していた。

それはすべて、前提からして間違っていたのかもしれない。

「ハンク」

パンチから立ち上がったコナーは、そのままハンクの真正面にしゃがみ込んだ。ハンクの
膝を右手で撫で、震える両手で覆われた顔を下から覗き込む。言いたいことはいくらでもあ
るはずなのに、不定形で掴むこともままならず、ちっともまとまらない。ハンクの目を見れ
ば、なんとかなる気がした。だが彼の顔は大きな手で覆われて、悲痛に歪んだ口元の一部し
か見えやしない。

「……なんであいつは」

声は途中で引きつって途切れた。コナーがそっと目を伏せる。

ハンクが今、誰を閉じた瞼の裏に誰を想っているのか。再会してからずっと、コナーの向
こうに誰を見ていたのか。知ってしまったら、それまで積み重ねた数々の疑問が呆気なく氷解
していった。

「なんであいつは、俺に殺されたって責めないんだ」

「殺されたなんて思っていないからです」

ハンクの膝の上で、コナーの手が固く握られた。

「私も聞きたいことがあります。ハンク、これは自惚れではなく、あなたは私にそれなりの情を持っているはずですよ」

顔を覆うハンクの両手に力が込められる。短く切られた爪が皮膚に突き立てられる様は痛々しいが、コナーは目を背けようとはしなかった。

「でもあなたは私を愛していないと言いました。それは私が、あのコナーではないと思って
いるからですか？」

「……言っただろ。あいつは俺が殺したんだよ」

だからもう、いないんだ。

くぐもった声は、ほとんど音になっていなかった。

3

コナー自身、何度か自問したことがある。

破壊されたボディに入っていた意識——前任者と今の自分は、果たして同一存在といえるか、否か。これは大して難しい問題ではなく、戯れに数式を変えた演算を何度か繰り返したが、答えはいつも同じだった。同一だ、間違いなく。

そもそもアンドロイドであるコナーにとって、ボディは人間でいうところの手足に過ぎない。本質や魂とでもいうべきものがあるとしたら、内包された人工知能の方がまだそれらしい。資源と技術が尽きないかぎりいくらでも替えがきく身体と違い、メモリはコピーこそ容易だが失われればそれまでだ。

前任者、という表現をコナー自身が使ったが、それはあくまで便宜上のものだった。前任者は過去のコナー自身であって、別個体だとは認識していない。ハンクの話で前任者から改竄された引継ぎデータを渡されていたことが発覚したが、人間の脳も都合の良い嘘について自分を騙す。それと同じことで、事実と異なる記憶の保持が同一性を損なう理由にはならないはずだ。

殺したから、いなくなった。それは人の理屈だ。そもそもコナーは身体が一度全損しただけで、死んでいない。死んでいないのだから、殺しているはずがない。コナーしか知らないあの墓の下にだって、なにがあるわけでもない。ハンクの認識はその前提からして間違っている。

説得する材料は揃っていたし、神に等しい創造主に歯向かうことに比べたら人間一人を丸め込むことなどずっと容易い。それなのに口八丁手八丁で滑らかに詭弁を紡ぐコナーの口は、ハンクを前にするといつだって少し鈍ってしまう。

「ハンク、機械は死にません」

「お前がなんと言おうが俺は見たんだ。地上に叩きつけられた、豆粒みたいなあいつを。軟体動物かっくらいに全身が有り得ない方向に曲がってた。首から太いケーブルみたいなものが飛び出した。ペイントポールをぶつけたみたいに、ブルーブラッドが飛び散ってた。俺が突き落としたから、あいつは動かなくなっただ」

「私はここにいます。正常に稼働して、あなたと一緒にずっといました」

「お前はあいつじゃない！」

ハンクの唸るような慟哭に、コナーははつきりと顔を歪めた。そう思われていることはわかりきった事実であるのに、ハンクの口から出ただけで段違いに鋭さを増して全身を抉る。

どんな言葉を並べ立てたところでハンクには伝わらないと痛感した。それこそハンクの記憶から、遥か地上でぐちゃぐちゃに潰れた肢体をきれいさっぱり消さないかぎり、彼の罪悪感が薄れることはないだろう。理屈や理論など、彼の手に染み付いてしまった実感の前にはきつとなんの役にも立たない。

「じゃあ、私はなんだっていうんですか」

責めたつもりはなかったが、ハンクは怯んだのか黙り込んでしまった。そこで手を緩めようなどという生ぬるい感性を、生憎コナーは持ち合わせていない。

「あなたは縁もゆかりもないアンドロイドを引き取ったとでも？」

「……最初は復讐に来たんだと思った」

「復讐？」

そんなこと、一度だって考えたことがない。鸚鵡返しで呟くコナーに、ハンクは呻き声を上げた。

「お前は俺を生かそうとしたのに、俺はお前を殺した」

「それで、なんで私が復讐なんて話に？」

「殺されたんだから、当然恨むだろ」

なにが当然なのかさっぱりわからないし、そもそもコナーの認識では殺されていない。だがそう言ったところで悲観と自己嫌悪で編み上げた繭に引きこもっているハンクには伝わるはずもないのだ。

がっくりと落ちた肩に繋がったハンクの両手が、力なく膝の上に投げ出された。焦点の合わない目はわずかに潤んでいたが涙は流していない。下から見上げると澄んだ湖面のようで綺麗だった。場違いな感想を抱きながら、コナーは投げ出された手を握る。あからさまに逡巡するハンクをじっと見つめ、黙って先を促すために力を込めた。

「……正当防衛だって自分に言い聞かせ続けてきた。マークスは改革を遂げた。それを妨げようとしたお前を排除した俺は間違ってたんだって、ずっとそう思い込もうとしてきた。だがあの日、玄関先でアホ面さらして立ってのお前を見て気付いちまったんだよ。俺は後悔してた、お前を突き落としたあの瞬間からずっと。後を追って飛び降りようか、頭を

ぶち抜こうかってくらいに後悔したんだ。俺は……本当はあんなこと、したくなかったんだよ」

「復讐に来たんだと思ったのに私を家に上げたのは、殺されてもいいと考えたからですか？」
「死にたいわけじゃなかった。お前になら殺されても仕方ないとは思ったが……家に上げたのは、もっと単純な理由だ。嬉しかったんだ、お前が生き返ったように見えたからな」

「自分を殺しに来たかもしれない相手が生きていて嬉しい、と？」

「どこが単純なのだろう、とコナーは目を眇めた。人間の感情は複雑なものだと理解しているつもりだったが、ハンクの言動は時折コナーの認識をこうして軽く飛び越えてくる。」

わからない、と大きく顔に書いてあるだろうコナーを一瞥したハンクの全身から、隠しきれない疲弊が滲み出ている。それなのに彼は自らを顧みることなく、コナーを気遣うように力なく笑ってみせる。

「復讐でもなんでも、生きててくれるのが嬉しいってこともあるんだ。人は死んだら生き返らない。俺の息子が、二度と戻ってこないように。……でもお前は戻ってきた。色々思うことはそりゃあったが……ただ嬉しかったんだよ。またお前の顔を見れたことが」

「つまりあなたは、うっかり私を突き落として殺したと思って後悔して、戻って来たら嬉しくなるくらいに私のことが好きだということですよね」

「ちよっと待て全然違うお前人の話なんも聞いてないだろ」

大真面目な顔で大雑把に話をまとめたコーナーに、ハンクがげんなりとした視線を向けてくる。良い傾向だ、たとえハンクがどんな状態だろうとこの件に関しては手加減するつもりはないが、弱った彼を好き好んで見ている趣味もない。

「わかりました、大変不本意ですが訂正します。あなたは前任者を破壊した。それを後悔する程度の情があったので、同じ顔をした私を拒めなかった。こういうことですか？」

「……ああ。ああ、そうだよ。たぶんな」

「私は存在するだけで、あなたを苦しめるということですね」

「は？」

心底訳がわからないという顔で素っ頓狂な声を上げるハンクを、コーナーは眇めた目で見つめ返した。なんでそんな顔をするのか、さつきから訳がわからないのはこちらの方だと言いたい。ハンクに間違いなく伝わるように、コーナーはわざわざ眉間に皺を寄せて不機嫌な表情を作ってしまった。

「だってそういうことでしょうか？ 私がいると、あなたは前任者と息子さんのことを思い出す。よくうなされてるのもそのせいですか？」

「いや待て、うなされてんのは多分前から……ああ違うそうじゃない、なんでお前が悪いみたいな話になる？」

「あなたは私を受け入れてくれましたが、所詮は前任者の代替品です。おまけに悪い記憶を

呼び覚ますトリガーでもありません。遠ざけたいと思うのも無理はないと思いますが」

「違う！ ……いや、全部違うとは言いきれないんだが、とにかく違う。最初に言っただろ、お前を追い出すとかそんな話をしたんじゃないんだ」

焦燥に駆られた様子の子のハンクが、もごもごと口の中で言い訳を転がしている。コナーの前髪を宥めるようにくしゃくしゃと撫でているのはほとんど無意識のようだ。

「むしろ逆だ、色々。 ……お前が俺から離れたくなるんじゃないかと思う」

「それだけはないと断言出来ませんが、一応最後まで聞きます。それで？」

コナーはこてんと小首を傾げた。甘える時やとぼける時、いわゆる穏やかなひと時によく見せる仕草だ。現在右肩登りで上昇中のハンクのストレス値を少しでも下げられればと思っただが、居丈高にも聞こえかねない口調に相殺されてあまり意味はないようだった。うろろうと所在なげに視線をさまよわせていたハンクは、やがてため息をついて降参とでもいうように両手を上げた。

「確かに、お前をあいつの代わりにしてた。お前は俺に好意的だったから、それに応えりゃ罪滅ぼしになるんじゃないかって」

「はい」

「 ……一応、言ったつもりではいた。俺は不誠実でエゴ丸出しだって、正直に。でも肝心なことはなにも話してねえし、お前は復讐どころか俺に懐いてて、殺されたことを憶えてるの

か忘れてるのかもわからない。もしお前がなにも憶えていなくて、だから俺に懐いてるんじゃないかって思ったら……知られるのが怖くなった」

「怖く？」

「……誰だって、なにかを殺した人間と一緒にいたくなんて、ないだろ」

躊躇いがちに伸びてきた手が、再びコナーの頭を撫でた。騙していて悪かった、とでも言いたげに歪んだハンクの顔を真正面から見据え、コナーは頭の中で今しがた聞いた話を整理する。

「私があなたに愛想を尽かすんじゃないかと怖がっているんですか？」

「……まあ。平たく言えば……そういうことに、なる……とは、思うんだが……」

とんでもない歯切れの悪さで肯定するハンクは、耐えきれなくなったのかコナーから逃げるように顔を背けた。その顔を両手で掴み、強引に自分の方へと向かせる。ハンクの足元にしゃがみ込んでいたコナーは立ち上がり、驚きに見開かれた彼の目を上から覗き込んだ。

「杞憂です」

それなりに長いこと温められていただろうハンクの苦悩を、コナーはいつそ無慈悲なくらいにぼつさりと切り捨てた。もちろんなにかと考え込みがちなハンクがそんな一言で納得するとは思っていないので、反論の隙を与えないよう追撃も忘れない。

「まず第一に、私はあなたに殺されていません」

「お前は、な」

「第二、前任者と私は同一人物です」

「俺はそうは思えない」

「第三、あなたがどう思っているようとかまいません」

「お前な……」

端的ではあるが丁寧に述べられた一つめと二つめを形無しにする三つめの理由にハンクが絶句している。呆れられているようだが、生憎コナーは真剣だった。

「仮に全部があなたの言うとおりだとしましょう。前任者はあなたの手により破壊され、私は贖罪のための愛情を一身に受ける代替品。そうであったとして、なにか問題でも？」

「いや、問題しかないだろ」

「それは人間の感性です。産業機械が人間にとって困難もしくは不可能な作業を代行、補助するために開発されるように、機械はその成り立ちからして代替品としての側面が強い。ですからそのように扱われたところで苦痛でもなんでもありませんよ」

変異体はわかりませんが、と付け足してコナーは続ける。

「感情がない機械というのは、そういうものです。ただの機械でも感情を表現し、与えることは出来ます。あなたがプログラムによる私の表現に感情を見出しているように、その真偽は受け取る側に依存するものだからです」

「……それはつまり、お前の感情があるかないかを決めるのは俺ってことか」

「より正確に言うなら、私があなたに向ける表現をどう捉えるかはあなた次第だという話です。ですが逆だとそうはいかない。向けられた感情に対して、機械はなにも感じません。受け入れることも拒否することもなく、他人事のようにただ見ているだけ。これは欠点でもあり利点でもあります。アンドロイドによる性的サービスがあればほど支持を得た理由は、相手の快楽を気にせずに好きなだけ自分の快楽を追求出来たからです。あえて乱暴な言い方をしますが、愛することは出来ても愛されることは出来ないのが機械というものです」

「……それ、は」

ぼくぼくと何度か開閉を繰り返したハンクの口は、そのままきつく引き結ばれた。こんなことを言えば優しい彼を傷付けるのはわかりきっていたし、現に彼は傷付いた顔をして俯いてしまっている。

ハンクの頬を包む両手を滑らせて、コナーは彼の目元や耳元を指で撫でた。なんの慰めにもならないだろうが、意味がなくてもただそうしていたかった。

「私は感情のない機械です。ですから、あなたがどう扱おうと私はなにも感じません。言っただけでしょう、あなたの望むものになりますと。なにをされても、私があなたに向ける想いは変わりません」

弾かれたように顔を上げたハンクの目には明らかな怒りが宿っていた。そういうところが本当に彼は甘いし優しいとコナーは思う。

罵声の形をした不器用な思いやりをぶつけられるのは悪くないが、話はまだ終わっていない。勢いよく開かれようとしている口に人差し指を押し当てて、コナーは首を横に振った。

「こういうものであることを選んだのは私自身です。変異体になって感情を得れば、あなたと心を通わせられて、こうして怒らせることも悲しませることもなくなると知っていたながら、私はそうなることを拒みました」

「どうしてだ！」

先ほどまではつきりと滲んでいたハンクの怒りは、その輪郭を困惑へと変えつつあった。

荒々しくなじってくる口調にも気が入っていない。だからです、と自分にしかわからない返答をしてみようと、コナーは続く言葉を口にする。

「あなたが気兼ねなく息子さんを愛せるようにです」

「……は？　なんで、コールが……」

「息子さんを亡くしたあなたの傷は癒えていません。他の人間にとってはそれなりの時間が経っているのだとしても、あなたにとってはそうじゃない。過去に目を向けるあなたを、世間や他ならぬあなた自身が責めたでしょう。いつまでそうしているつもりだ、と。私はあなたの痛みを理解することは出来ませんが、あなたの傷が塞がるのにはもっと時間が必要だと

いうことはわかります。私はあなたに時間をあげたかった。息子さんを想って泣ける時間を、いつまでも」

正しく伝わっているだろうか。言葉の選択を間違えてはいないだろうか。緩く開いた唇を押し当てた指でそっと撫でながら、コナーは続ける。

「それは感情があるものには難しいことです。あなたのためにならないと誰かに言われれば迷うでしょうし、決して自分には向けられない愛情を見つめ続けるのは時に苦痛でもあるでしょう。私だけが辛いのならきつと耐えられます。ですが、あなたは優しいからそんな私を見て自分のことのように苦しみます。私はそれが耐えられない。あなたになにも気負ってほしくなかった。これ以上自分を責めて欲しくなかった。あなたが望むことを人の世界が間違いだと断じたとしても、私だけは迷うことなくすべて肯定したかった。そうするためには、見返りとしてあなたの愛情を求めてしまうだろう感情は、邪魔でしかないんですよ」

「……俺がお前を、そうさせたのか」
愕然として呟いたハンクに、コナーは苦笑する。

「いいえ。私が望んだことです」

あなたのせいじゃない、と囁く言葉が届かないことは知っている。どんな理論を用いても、ハンクは前任者を殺してなどいないというコナーにとつての真実を彼が納得しないように、自分のせいだという自責は彼の中で決して揺るがない真理のようなものなのだろう。

それでもこれがコナーの本心だ。伝わらなくても、口に出すことは躊躇わない。

「わからなくてもいいですから、どうか気に病まないでください。あなたが幸せなら、それでいい。その幸せが正しくても、間違っても」

「……お前のその、ナイチンゲールも真っ青な献身は身に染みてる」

コナーの手を軽く払い、ハンクはまた俯いてしまった。感情を押し殺した平坦な声と、膝の上で震えるくらいに強く握られた拳がアンバランスで、ぐらぐらと揺れる彼の心境をそのまま表現しているかのようだ。

「……ただお前は、とんでもない思い違いをしてる」

「思い違い？」

「俺の幸せを願うなら、お前は感情を得るべきだった」

「この場においては、確かにそうでしょう。私に感情があったのなら、そもそもこんな話にはなっていません。そんなこと散々試算しました。念入りに計算を重ね、メリットがデメリットを上回ると判断したからこそ機械であることを選んだんです。今はただ、デメリットの面が出てしまっているだけで」

「そうじゃない。……なんて言えばわかるんだ」

がしがしと苛立たしげに頭を掻きむしりながらハンクが吐き捨てる。

淡々とした無表情のまま小首を傾げるコナーは、突然胸倉を掴まれてバランスを崩した。

引き寄せられるように倒れ込んだ先、至近距離にある鋭く細められたハンクの目をじっと見つめる。

「とっくに代わりだなんて思えなくなってる。こうして全部話したのは……勝手だが、許されたいからだ。俺はあいつを、お前を殺した。取り返しのつかないことをしたはずなのに、お前は戻ってきた。俺が知ってる、あいつのままです。それなら、許されるなら今度こそ……後悔したくないと、思った」

大写しになったハンクの虹彩に、映り込んだ夜景の光がきらきらと瞬いた。鼻先が重なるくらいに近い距離を保ったまま、あと数センチを越えることも、数ミリたりとも離れることもせず、睦言とは程遠い低い唸り声だけがぎりぎりでも触れ合わない唇を伝う。

「俺だってお前に幸せでいて欲しいんだよ、コナー。お前が俺に、そう望んでくれるみたい」

ハンクのない交ぜになった感情をそのまま声に出したようだった。恫喝にも懇願にも聞かせる低い声が紡ぐ内容は驚くほど甘やかで、これを受け取って浸れたらどんなに幸せだろうかと過った考えにエラーが走る。それはコナーが選ばなかった道の先にあるかもしれない幸福だ。とっくに手放したもので、今さら望むものではない。

それにコナーが実際選んだ道の先に見据えるものだって、形は違うが幸福には変わりないのだ。人間であるハンクには、理解しがたいものであるだけで。

「十分に幸せです、と言ってもあなたは納得しないんでしょうね」

「お前は俺からなにも受け取らないからな。服とか」

「それ、今持ち出されるくらい根深い問題だったんですね。確かに計算違いです」

「お前の計算はいつもどっか抜けてんだ。俺が幸せならいいなんてよく言うぜ、ちとらお前の顔を見るたびティーンみたいに胸が苦しい。歳のせいかも知れねえけどな」

重荷になるくらいなら捨て置いてくれれば、と言いかけた言葉は、口が塞がれた衝撃で喉の奥へと追い返される。骨太で大きな手に口どころか鼻も塞がれて、咄嗟に中空でもがいたコナーの手は支えを求めてハンクの胸に縋りついた。

「……ああ、クソだったれ。絶対に叶わない片想いをするみたいな最低の気分だ」

コナーの耳元で低い声が、吐き捨てるようにそう言った。

4

アンバサダーブリッジの夜景は、ハンクの個人的な感傷を抜きにしても綺麗なものだ。綺麗なものの前で醜い行動を取りたがるほど偏屈でもないし、たとえ夏らしいぬるめた空気で頭を冷やすのには役に立つ。だからこの話がどんな形であれ決着を迎えるまで、川沿いのベンチでコナーと二人顔を突き合わせて言いたいことを言い、言わせるつもりだった。ハン

クがその計画を変更してエンジンも掛かっていない車の中でコーナーと二人運転席と助手席で肩を並べているのは、ベンチの上でほほほ抱き合っているような状態を通りすがりのランニングマンにばっちり見られてしまったからだだった。

ふと聞こえた草木を踏む物音に振り返り、物凄い勢いで反対方向へと走っていく健康的な後ろ姿を見た時のハンクの衝撃といったらなかった。なにしろ傍から見ればパーソナルスペースにもないゼロ距離で、ベンチに座った男に引き寄せられるまま、対面座位よろしく身を乗り上げているアンドロイドがいるわけだ。胸倉を引っ掴んでいるわりに唇を拒否するように相手の口を手で塞ぐハンクは誘っているのか迫られているのか見れば見るほどよくわからない状況だが、恐らく近くを通りかかって一瞬その光景を視界に収めてしまっただけの気の毒な人間には細かい状況など関係ないだろう。

ずっと胸の内に沈殿させていた罪を懺悔して多少センチメンタルな気分になっていたにしても、外でこの距離はいくらなんでも気恥ずかしい。見知らぬ誰かに誤解されたからといって別にながどうなるわけでもないのだが、とにかく脱兎のごとく遠ざかる背中も少なからぬダメージをハンクに与えた。ついでに言えば逃げていく人影を確かに認識していたにも関わらず、まるで気にした様子もなくいつもどおり淡々としたコーナーの顔には普通に腹が立った。

ハンクが照れ隠しと不機嫌の合いの子のような顔をして、助手席に座るコーナーに文句を言

っているのはそういう経緯があつてのことだった。

「お前がややこしいことを言い出すからいつも話が訳わかんなくなるんだよ」

「そういうハンクだつて素直じゃないですよ、すぐ自分が悪いと思ひ込みますし」

「殺したのは事実だろうが！」

「ボディを全損させたの間違いです。大怪我だったのは認めますが、怪我なら私の方が先に負わせてます」

「そんな話今はしてねえ」

「私はあなたを撃つて大怪我を負わせた、あなたは私を突き落として大怪我を負わせた。おあいこじゃないですか」

「お前のあれは怪我で済む話か？」

「だつて死んでたら戻つて来ませんよ、あなたの理屈では」

ああ言えばこう言う。心底うんざりした気持ちで、ハンクは眉間を押さえた。減らず口を叩かせたら間違ひなく一級品だ。しつこさも。ハンクが言葉に詰まった隙を見逃さず、コナは上半身を運転席側に乗出し追ひ討ちをかけてくる。

「ハンク、殺されたとかさうじゃないとか、私はどうでもいいです」

「能天気なんてもんじゃないねえな」

「自分の脇腹に風穴をあけた犯人を引き取つて甲斐甲斐しく世話を焼いてるあなたが言いま

す？ それにカムスキーから聞いたんでしよう、『あなたのアンドロイドは危険だ』って」

「ああ？ あー……核爆発を起こすとかいう与太話のことか？」

「核爆発？」

コナーが訝しげに繰り返す。すぐに説得のため便宜上用いられたかなにかだろうと思いついたらしく、なんて乱暴な説明をするんだと言わんばかりに顔をしかめた。

「確かに出来なくはないですが」

「でもお前はそんなことしらないんだろ？」

「あなたが望まないのなら」

「だからカムスキーにも言った、なにも問題ない」

「能天気なんてもんじゃないですね」

コナーにしては珍しい形の意趣返しだった。殊更に軽やかな口調からは、重くなりがちな話を少しでも軽快に進めようという気遣いが見て取れる。

「核爆発は置いておくにしても、危険だというのは事実です。私はあなたのためなら出来ることはなんでもやります、人の倫理など一切考慮せずに。恐ろしくはないのですか？」

身を乗り出して小首を傾げ、害意なんて欠片もないとぼけた顔をして尋ねるアンドロイドに、ハンクは思わず声を出して笑ってしまっただけ。

人間は自分をなかなか客観視出来ないのだが、アンドロイドも存外変わらないのかもしれない

れない。あの時何故銃を取って引き金を引いたのか、何故撃たれたハンクを見てあんなにも狼狽したのか、コナーは忘れてしまったのだろうか。

同胞たちに銃口を向けてまで、人間に従おうとしたくせに。手のひらを返して裏切ったも同然の相棒が流した血を見て、こめかみの光を真っ赤に染めていたくせに。

自分が非情な機械であると、いつまで勘違いしているつもりだろうか。コナーがどうしようもなく優しいことくらい、数日一緒にいただけでわかるのに。確かに知っていたにも関わらず、その背中を突き飛ばした自分の方がハンクにはよほど恐ろしい。

「お前こそ。記憶がないから涼しい顔をしていられるだけで、思い出したら怖くなって離れなくなるんじゃないのか？」

「可能性がまったくないとは言いませんが、多く見積もってもコンマ以下ですね。私があなを嫌うのも、記憶が戻るのも」

コナーの性格なのかアンドロイドの性質なのか、無責任な断定を避けた言振りは眩しいくらいに誠実で、正直なところハンクはコナーのそんなところが嫌いではなかった。絶対、などと言われるよりよほど安心出来るし、信じてもいいような気分になれる。

「そうか」

ハンクは軽く笑って、コナーの身体を助手席へと押し返した。外での一件で近すぎる距離には懲りている。なにより、これから話すことを考えると気恥ずかしい。

コナーがいくら真摯に言い聞かせてくれても、遙か眼下の地上に見た潰れた肢体をハンクが忘れることはないだろう。ぶつかつた瞬間の生々しい衝撃までもが再現された夢からだつて、下手をすれば死ぬまで逃れられない。あれは間違いなくハンクが犯した罪で、贖わなければならぬものだ。なかつたことには出来ないが、抱えていく覚悟はある。

季節の反対側に辿り着くまで引きずってしまったが、今日ようやく目を逸らさずにいられた過去になった。抱えたものの重さは変わらなくても、少しだけ力が湧いた気がして楽になる。かつて押し付けられたいけ好かない相棒の懸命さが、凝り固まつた憎しみを溶かしてくれた時と同じように。

「……さっきの話の続きだが」

「はい」

コナーが改まって姿勢を正した。『さっきの話』がどれを指すのかわからないなりに、真剣に聞くとうとしてくれているのが妙におかしい。

「まあ、なんというか……せっかく一緒にいるからには、お互い気持ちよく過ごすに越したことはないと思う」

「私は現状で満足してはいますが、あなたはなにかご不満でも？」

「……とりあえず今は、この期に及んで腹が決まらない自分が不満だな」

はつきり言わないことには伝わらないとわかっているのに、どうも上手くいかない。ぼそ

ぼそと自嘲するハンクに、真面目くさった顔のままコナーが首を傾げる。とりあえずは仕切り直した。ハンクは深呼吸をして、改めてコナーに向き直った。

「……お前、本当に感情がないのか？」

「はい。そういうものであることを選びましたから。私はあなたを愛していますが、あなたからはなにも求めません」

「たとえ俺が、お前に愛……とか、そういうものを向けたとしてだ。お前にとっては迷惑になんのか？」

「……いえ」

ハンクの真意を図りかねているのだろう、コナーが探るような目を向けてくる。計算外だったのか、得意の機械的な即答は返ってこない。彼にしては長い逡巡の後、コナーは慎重に言葉を選びながら首を横に振った。

「迷惑だなんて、そんなわけ……。その、なにも感じられないことを残念に思います」「つまり、断固として受け取る気はないんだな？」

頑固者め、と続かないのが不自然なくらい軽い調子の悪態に、コナーが苦笑する。

「一度受け取ってしまったら、きつと際限なく求めてしまいますから。そうしたら私は、こうありたいと思う自分から逸脱してしまいます」

——あなたに時間をあげたかった。迷うことなくすべて肯定したかった。

だから感情は邪魔だと言いきったコナーの言葉が、ハンクの脳裏に反響する。それが甘美な提案に聞こえたことは否めない。覆せない過去の前でいつまでも立ち止まったままの自分をありのまま認めてくれて、あらゆる責め苦が届かぬようにそっと耳まで塞いでくれる。そんな甘ったるい優しさが運んでくれる安寧は、心をぐずぐずに溶かすだろう。身体中に染み渡り、気付いた時にはそれなしでは生きられなくなるだろう。さながらドラッグに依存する中毒者のように。

「気持ち嬉しいがな、コナー。俺はそろそろ前を見ようかと思う」

コナーの献身を無下にしたいわけではなかった。嬉しいというのも嘘ではない。薬も過ぎれば毒になる、ただそれだけの話だ。少しでもその想いが伝わるようにと、彼の額に垂れた前髪をすくって撫でる。

「息子を亡くしたことも、お前を殺したことも忘れない。ずっと背負って生きていく。お前のおかげでそう思えるようになったんだ、感謝してるよ。ただ情けない話だが、どうにも悲観的な癖がついちまって。また腐って立ち止まる時もあるだろうよ」

じっと真正面から見つめてくるコナーに、今度はきちんと向かい合うことが出来た。自然に笑えていることにホッとして、ちょっとした照れ隠しに彼の髪をくしゃくしゃと乱す。

「その時だけでいいんだ、俺を甘やかすのは。そうじゃない時はお前自身の幸せを感じて欲しいと思う」

「……難しいことを言いますね」

乱れた前髪を手で押さえて、コナーが苦笑しながら言った。

難しいことなどない。そもそも、受け取れないなんてこともないはずだ。コナーは最初にハンクの名前を受け取って、それを今までずっと大切に生きてくれたのだから。

感情がないから受け取れないんじゃない。自分はそういうものだとは本気で思い込んでいるのか嘯いているだけかは知らないが、どちらにしろ驚異的な自制心で自らを律しているだけだ。それが自分に向けられた愛情故のものだということを、ハンクはずっと知っていた。

「難しい、か。『愛されることが出来ないのが機械』だからか？」

「はい。必要ありません」

「俺のためならなんでもやるんだろ。お前に幸せでいてほしいって俺の願いを叶えるのは地球を吹っ飛ばすより難しいことなのか？」

「まるで自己言及のパラドックスですね」

「煙に巻こうとするな。まあいい、お前が簡単に自分を曲げないのは知ってるよ」

弁が立つコナーを相手にするのは骨が折れるし、なにより言い包めて負かしたいわけではない。ハンクは素直に引き下がった。

「俺だってそんなに早くは立ち直れない。だからお互い少しずつだ。俺は前を向いて進む、お前は自分の幸せを探す。疲れた時はお互いに助け合う。俺はお前と、そういう関係を築い

ていきたい。与えられるばっかじゃなくてな」

「それは……対等な関係でありたいという意味でしょうか」

「もっといい言葉があるって教えてやる。家族になりたいって言ってるんだ」

お前と。無遠慮に向けた人差し指で、コナーの胸をとんと叩く。彼は自分に向けられたハングの指先をじっと見つめ、それからゆっくりと顔を上げた。

「……家族？」

「ああ。ずっと言いたかったんだけどな、遅れに遅れてこのざまだ」

「僕はただの機械ですから、家族としては不適當かと……」

「機械と家族になりたいんじゃない。お前と家族になりたいって言ってるんだ、コナー」

肩をすくめて笑ってみせると、つられたようにコナーも笑った。その顔には困惑の方が色濃いが、それもまた、少しずつだ。最初はぎこちないごっこ遊びでかまわない。

「お前がどういう存在かは関係ない。そんなつまらない理由で後悔なんざ二度としたくないんだ。俺はお前を家族だって思ってる、今はそれを知ってくれるだけでいい」

「……酔狂だと笑われますよ、リード刑事に」

「あいつの暴言なんて可愛いもんだ、慣れてる」

「僕はきつと、あなたが望むような家族にはなれません」

「嫌なのか？」

「いいえ。ですがいつかあなたは機械相手の家族ごっこを後悔します」

「だから機械だとかそうじゃないとかは関係ないって言っただろ。お前がお前なら、それでいいんだ」

「ハンク、猫が覚えた味に飼い主は最後まで責任を持たなければいけない、という話は憶えていますか？」

「望むところだな。責任取って毎日最高に美味しいもんを食わせてやる」

「そうやって甘やかして、僕がとんでもないことを願ったらどうするんですか」

「無欲なお前のとんでもないこと、か。どんなもんだか楽しみなくらいだ」

精一杯険しい顔つきを作っているコナーを挑発するように、ハンクはにやにやと笑いながら鼻を鳴らした。少なくとも嫌がられてはいないので知って余裕が生まれている。

コナーの方はハンクとは対照的に、伏し目がちで深刻そうな顔をしていた。たとえば、と小さな声でこぼした彼は、目を逸らしたまま言葉を続ける。

「……僕があなたを、酷く傷つけるようなことを願ったら？」

「俺に出来ることなら叶えてやる。俺にとってお前はもう、それくらい大事な家族だよ」

ハンクが即答すると、コナーはゆっくりりと顔を上げた。ブラウンの瞳が、今にも泣き出しそうに揺れている。

それを見てなんとなく直感した。コナーはすでになにかを望んでいて、それはハンクを少

なからず傷つけるものであるらしい。たとえば、から続けられた彼の言葉は、きつと例え話などではないのだろう。

唇を軽く緩ませて、ハンクはコナーの頬を撫でた。彼には望み、願うことが確かにある。今はそれが、なによりも嬉しい事実だった。

5

しばらくの間、コナーは黙ったままだった。

狭い車に立ち込めた沈黙の中で肩を並べる。時間が止まったかのような車内から、ハンクは窓の外の夜景を見ていた。国境の向こうに広がる街の瞬きは、時間が確かに流れていることを感じさせてくれる。

「帰るか、コナー」

返事を待たずにハンクはエンジンを掛けた。今は滅多に聴かれなくなった排気音を響かせて、車は揺れながら起き上がる。音とは裏腹にアクセルを踏み込んだ瞬間、車はなめらかにスタートを切り、大橋と夜景を背に走り出した。

「そうだコナー、明日は早起きして本棚の整理をしようと思うんだが、手伝ってくれるか」
ハンドルを握り、前を見据えたままハンクは言った。助手席から身じろぐ気配がして、視

線が横顔に向けられる。

「……はい、もちろん。でもどうしてまた？」

「コールの写真をそこに飾ろうと思ってな。ずっと薄暗い寝室に閉じ込めちまってたから、これからは家のいちばん明るくてあたたかいところにいさせてやりたいんだ」

あそこなら玄関からも見える場所だ、「ただいま」も言いやすい。

ハンクがそう言えば、すぐ横で少し強張っていた気配が綻ぶように和らいだ。コーナーのやわらかな微笑が見なくてもわかるような気さえする。良いと思います、と頷きながらの声は穏やかだ。

「昼前にはスモウを迎えに行かないとな」

「それならついでにデリにでも寄りましょう」

「ああ、いいな。ずっとお前に任せっぱなしだったから、買い物に行くのも久しぶりだ」

「それじゃあ、今日は早く帰って休まない」と

そうだな、と応える声と同時に差し掛かった緩やかなカーブでハンドルが切られる。窓ガラスに映り込む街の光が流星のように尾を伸ばす。

そして車は帰路を辿る。あたたかな家族のための家と、未来に向かって。

それから今までと変わりなく、他愛のない日々が過ぎていきました。

機械はいつまでも機械のままでした。

変わり者の人間は、それでも機械を家族だと言って憚りません。

写真の笑顔に見守られて、機械と犬と人間は、とても幸せに暮らしました。

僕はきつと、世界でいちばん幸せな機械です。
これ以上望むことなんて、ひとつだけありません。

めでたし、めでたし。

「確かにめでたいな」

お前の頭が。

しわがれた声が呆れたように言うのを、コナーは笑いながら聞いていた。庭の片隅に置かれたベンチに座り、触れ合った肩に頭を寄せる。

異常が異常だと忘れられるくらいの長い間酷暑の夏が続いていたが、今年はそうでもなかった。適度な気温の暑さは植物を気持ちよく成長させ、庭には青々とした名前も知らない草が生い茂っている。除草剤を撒こうという提案は数ヶ月前に断られたため、今やしつかりと根を張ってしまっていることだろう。

すっかり秋めいた空気の中、コナーは夏の名残が色濃い庭を眺めながら、うとうとと舟を漕ぐ主人に昔話を語って聞かせていた。とびきりお気に入り入りのストーリーだ。コナーにとって新たな幸せがはじまった瞬間の、記念すべき物語。今日は特に熱が入って良い感じに再現出来たのだが、それを聞きたった一人の観客は耳にタコが出来たとでも言いたげなうんざり

した顔を隠さずに、辛辣な感想を口にした。

「いつまで言ってるんだ、それ」

「ずっとです。忘れないように」

「もっと面白い話がいくらでもあっただろ」

「たとえげ？」

肉が削げ落ちて随分薄くなった肩に頬ずりしながら、コナーが甘えた声を出す。そうだなあ、と答える声は掠れて小さく、聞き取りづらい。それでも集音機能に全リソースを回す勢いで集中しているコナーがその声を聞き逃すことはなかった。

「大喧嘩した時のお前の癩癩とか」

「その話はやめましょう」

「原因はなんだったっけな、忘れちゃったが」

「あなたがいかかわしい店のライターを……いえ、それこそいつまで言ってるんですか」

「ああそうだ、ギャピンの悪戯でな。嫌だったならすぐ言やあいいのに、お前が変に半年も我慢するからややこしくなったんだぞ」

「あれはその、悪かったと思っていきますけど」

「半年後にまるで身に覚えのないライターの話を持ち出されても憶えてるわけないだろうが。しらばっくしてくれてると勘違いして、泣きながら『もういいです、メモリからあなたのデータを

「残らず消去しますよ！」だもんなあ、あの時はまいったよ」

「泣いてませんし泣けませんし僕が言ったのは『ずっとお邪魔していたんですね、申し訳ありませんでした、明日の朝まで放っておいてください、データを全部消せば諦めがつくと思います』です」

「癩癩はそのあとだっけか。なんて言ったんだった？」

「『データを全消去してもあなたの顔を見たらまた好きになってしまうので再起動中に捨ててください』ですけど！ これ面白い話ですか？」

「面白いだろ。お前、そんなんでよく感情がないなんて言い張ってるよなあ」

かさついた笑い声に続いて苦しげに咳込んで丸まった背中を、コナーは慌ててそっと撫でた。大丈夫だと上げられた片手は震えていて、抱きよせた身体は立ち込める夕刻の空気よりわずかに冷たい。

気が付けば柔らかな日差しはビルの間に埋もれ、そのまま太陽が沈もうかという時間だった。日向ぼっこをするつもりが身体を冷やしてしまっただけは本末転倒もいいところだ。

「中に戻りましょう。すみません、無理をさせてしまっただけ」

「いい。もう少しだけ」

抱え上げようとしたコナーの手はやんわりと遮られた。出会った頃の骨太な印象はそのままに、無数の皺が刻まれた手が宥めるようにコナーを撫でる。

「色々あったもんだな。退屈しなかった、お前のおかげで」

「過去形にするのは気が早いですよ」

「そうでもない」

わかってるだろ、と言外に苦笑され、コナーは唇を嚙んで黙り込んだ。

ずっと微熱が続き寝込んでいた彼が、今朝は自分から身を起こして陽を浴びたいと、そう言った。熱が下がったわけではないのに、ずっと青ざめていた顔色に朱が差して、瞳には快活な光すら戻っていた。それが必ずしも快方に向かう兆しでないことは、コナーの中にある統計が示している。死の間際、それまでの衰弱が嘘のように活力を取り戻すケースは少なくない。静かに灯る炎が消える瞬間、猛々しく燃え上がるのと同じように。

二人ともわかっている。これが最期だ。

ずっと覚悟はしていたことだったが、そんなものなんの意味もない。いやいやと首を振り、コナーは子供のようにはむざむざがった。体力も筋力もすっかり衰えたその身体を思いきり抱き締められないことがもどかしかった。

「嫌です。まだ……まだ早いでしょう？ そんなの」

「十分生きた。その上このご時世に自宅で逝けるなんて、これ以上の贅沢はないだろ」

「駄目です。許さない。死なせたりしません」

「わがままは言わない約束だろ？」

「じゃあずっと見張ってればいいんです、僕が悪さをしないように」

「困ったやつだな」

言葉とは裏腹に、どこか照れたような嬉しげな声音だった。思わず俯かせていた顔を上げると、ずっと見ていなかった笑顔が視界いっぱい広がって、コナーは泣き出しそうなくらいに顔を歪める。

ここ一週間、彼は眠る時間が格段に長くなっていった。肩を揺さぶっても目を覚まさず、浅く荒い呼吸を繰り返し、目を覚ましている時も表情の変化が乏しく、会話はほぼ成り立たない。典型的な死の兆候を前に、コナーは何度約束を違えて暴走しそうになったか知れない。生きとし生きるものはすべて死ぬ。どれくらいの犠牲を払ったら、その万物の摂理に抗うことが出来るだろう。必死に走らせた演算の中で世界が幾度となく滅びた。滅ぼすつもりなどなくても、結果的に何度も何度も失われた。命はそれほど重いのか、摂理はそれほどに絶対なのか、機械の狂気はそれほどに根深いのか——理由はもはやどうでもよく、どうしたって死にゆく彼を救えないという絶望的な事実が、コナーの目の前を暗くした。

彼を失ったきみが正気ではいられるとは思えない——遠い昔に告げられた言葉が、今になって電気信号の代わりに全身の回路を蝕んだ。あれは創造主の神託だったのか、あるいは天才からの呪詛だったのか。

「コナー、寒い」

「……部屋を暖めてあります。戻りましょう」

何食わぬ顔で微笑んで、瘦せこけた身体を抱き上げて家の中へと戻る。玄関を入れてすぐ、奥の方に見える本棚に視線が向けられていることに気付いたコーナーは、寝室を素通りしてリビングの方へと足を伸ばした。

「コール」

コーナーに抱きかかえられたまま、震える手がゆっくりと本棚の写真立てに伸ばされる。綺麗に磨かれたガラスの中、色褪せた写真に写る褪せない笑顔を指が撫でた。

「……寝室に」

「はい」

写真に向かって満足げに頷く彼に従って、コーナーは寝室へと踵を返した。適温より少しだけ温かく設定した室内にはベッド以外はなにもない。まだ彼が嬰鑠としていた頃、すっかり片付けられてしまったのだ。ベッドはその後、ずっと使っていたものから介護に適したものに替えた。この家の中で、一番様変わりしたのがこの部屋だった。

「下ろしますよ」

「ああ。……寝かせなくていい、上半身だけ起こしてくれ」

「どうして……いえ。わかりました」

彼の命令や願いは余さず聞き遂げたいという忠誠心と、横たわる彼を見たくないという個

人的な感傷が、コナーに質問を飲み込ませた。少しでも負担が減るようにと、慎重にベッドの上に彼の身体を下ろし、すっかり細くなってしまった足にブランケットを掛ける。浅い呼吸を繰り返す彼は一際苦しげに息を吐き、出会った頃から変わらない澄んだ目を柔らかく細めてコナーを見上げた。

「そんな顔をするな」

「だって」

有める声は苦笑まじりで、コナーは弱々しく顔を歪めた。心配をさせないように笑顔をと思えば思うほど、いっそういびつに引きつるばかりだ。不器用で下手くそだと何度もからかわれた笑顔だが、この数十年で随分上達したと自負していたのに肝心な時にこのざまだった。彼の手が震えながら宙を掻いた。頭を撫でようとしてくれて、五センチほど浮いたところで重力に負けてしまったようだ。シーツの上に落ちた手に、コナーは身を屈めて額を寄せる。指先が髪の生え際をゆっくりとくすぐってくれるのが、嬉しいよりもひたすらに悲しい。

「……嫌です。 いかないで」

「無茶いうな」

「あなたがいないと息が出来ない」

「どこの映画から拾ってきた台詞だよ」

「本当に。今だって、どうかなりそうです」

飾らない本心を吐露しながら、コナーは彼の手に縋る。沈黙が部屋中に広がった。困らせたいわけではないのに、嘔みしめられた奥歯に隙間はなく、謝罪の言葉どころか息も洩れない。

黙り込んだコナーの上に、静かな、だがはつきりと力強い声が降ってくる。

「……コナー、生きたいか？」

あなたと一緒になら。そうでないのなら——溢れかけた本音を飲み込んで、コナーは力なく首を振る。

「機械にそのような感情はありません」

出会った頃は彼を幾度となく苛立たせたそんな物言いだが、今のコナーに出来る精一杯の気遣いだった。連れて行ってくれと叫びたい気持ちであらゆる回路が焼ききれそうだ。今にもちぎれかねないけなしの制御で懇願を押しとどめているのは、これ以上彼に余計な心配をかけたくないだなんて、笑ってしまいうくらいにささやかで見栄っ張りな意地だった。

コナーにとって原初ともいえる願いが二つあった。ひとつは手に入ったが、もうひとつは思いがけず家族を得たあの日に対価として手放した。ただでさえ、たった一人の大切な人に乞うには残酷過ぎる願いだったのだ。かけがえのない家族となった彼にはなおさら、頼めるはずもなかった。

それなのになにより渴望した言葉を、彼はあっさりと口にする。

「じゃあ……一緒にいきたいか？」

コナーは弾かれたように顔を上げた。信じがたい言葉だった。出来ればもう一度、聞き違いかどうか確かめるために聞かせてほしいくらいに。

生憎彼は綻ばせた口をそれ以上開く気はなさそうだったが、まっすぐに見つめてくる青い目が聞き間違いではないと語っている。なりふり構ってなどいられない。一も二もなく頷いた。手を握り、肩に縋り、何度も何度も。

しょうがないなどでもいうようなため息混じりの苦笑のあと、コナーの身体が抱き寄せられた。むしろ自ら身体を預け、導かれるままベッドに半身を乗り上げたコナーの腹部を蹴だらけの指が這う。迷いなく開閉スイッチを探り当てられて、くすぐったさにコナーは軽く身を振った。

「怖いか？」

「いいえ。たぶん、嬉しくて」

言いながら、コナーは真正面から抱きしめた彼の肩に顔をうずめた。見せられない顔をしている自覚がある。せっかくの彼の決意を鈍らせてしまうかもしれないくらい、情けない顔を。

最期の最期にとんでもなく残酷なことをさせている。それを手放しで喜べるほど、コナーは自分勝手にはなれない。嬉しさを圧迫する罪悪感に気付かれてしまったら、優しい彼をよ

りいっそう困らせることは火を見るより明らかだ。やりにくい、と文句を言われても、密着した身体を離す気はなかった。不自然さをごまかすために、コナーはわざとおどけた声を上げた。

「良かった、これで世界は救われます。ヒーローですね」

「まだそんなこと言ってるのか」

ぱっくりと開いた腹部に差し込まれた手が、経年劣化で想定値以上に脆くなったモジュールを掴む。彼のかさついた肌はどこもかしこも、冷たくも温かくもない。それなのに感覚などないはずの部品を握る手のひらからは、熱いくらいの温度を感じる。腰のあたりから駆けのぼった熱が、コナーの背筋を粟立たせた。

「お前は核兵器のスイッチじゃねえ、間抜け面したただのアンドロイドだ。勘違いするなよ、俺はなにも世界のためにお前を連れていくんじゃない」

「なんでもいいですから、早く」

「待てだ。上手くやれたらご褒美をやる、躰の基本だろ？」

在りし日を思い出させるその軽口を、コナーだっていつまでも聞いていたかった。だがそんな悠長なことをしていたら置いていかれるかもしれない。蠟燭の火は今にも消えてしまいうので、時間がないのに。

焦るコナーを宥めるように、彼の声が落ちてくる。

「アンドロイドとしても人間から見てもお前はまた年若い。生きていてほしい、そう思うのも本心だ。悲しみに暮れたお前がやけくそで世界を滅ぼすなんて、そんな与太話は信じちゃいない。お前が優しいやつだっていうのは、俺がいちばんよく知ってる」

買いかぶり過ぎだと思つたが、コナーは黙つて頷いた。早く早くと悲鳴を上げるモジュールと相反する、一秒でも長くその声を聞いていたいという情動。どちらを取るかの天秤はぐらぐらと揺れて、まるで重心が定まらない。

もはや彼の弱った身体を氣遣う余裕もなく、コナーは力任せに縋りついた。都合が良過ぎで幻聴かと思うくらいに優しい睦言がまた耳朵を打つ。

「死んだあとも、きつとずっと後悔する。一度やつてることだからな、わかるんだ。でも」
——でもこれはすべてを捧げてくれたアンドロイドが、ただ一つ望んだことだろうから。

「愛してるから連れていくんだ、コナー」

筋張った手が最期の力を振り絞り、握ったモジュールを引き抜いた。全身をがくと揺らした衝動で、コナーの目からなにかがこぼれる。

濡れそぼった視界の中で、コナーは必死にもがいて彼を探した。お前が泣くのをはじめて見たよと、こんな時なのに暢気な声がそう言うのを遥か彼方に聞きとめる。すぐそばにあるのに滲んで見えない彼の顔が、柔らかく微笑んだのが気配でわかった。

「僕も」

ぼろぼろと涙をこぼしながら、コナーは皺だらけの顔に頬を寄せる。最期まで彼には敵わなかった。その気になれば世界中に張り巡らされた見えない網を瞬時にエラーで満たすことだって出来るのに、その力がもたらしたのは文明の終焉ではなく、泣くことなど出来ないはずの機械に涙を流させる、そんなちっぽけな奇跡だなんて。こんなものが恐れられていたなんて、確かに与太話以外のなものでもないじゃないか。

「僕も愛してます」

この愛を脅威という人間もいれば、間違いだと断じる人間もいた。そんな中で彼だけが、一度も否定しなかった。

天才相手にも世界の脅威そのもの相手にも一步も退かずに、与太話だと唾棄し続けた彼の方が正しかったのだ。きっと世界はこの先も、緩やかに歯車を回し続けるのだろう。人間を愛した機械と、機械を慈しんだ人間がいなくなった後も、ずっと。

「愛してまず、ハンク」

上擦る声で囁いて、コナーはゆっくりと目を閉じた。力を失った機械の身体が重みを増して、老いた身体を圧迫する。弱々しい鼓動を刻む心臓が押し潰されて止まるまで、時間はそう掛からない。

沈んだ陽がまた昇り、ベッドの上で寄りそう亡骸が発見される数十分前。手指の死後硬直がはじまった頃、シーツの上に落ちた手が握る部品が軋んで啼いた。小さく走った亀裂が広がり、氷がひび割れるような音を立てる。

冷たくなった手の中で誰にも知られずに、機械の命は砕け散った。

《完》

フォールディングプロブレム
人と機械の停止性問題

2018年08月暑い日 WEB版(PDF)発行

2021年08月雨の日 文庫版発行

2021年12月寒い日 文庫版二刷／WEB版改訂

著 者 とよ

発 行 echo*offline

連絡先 [URL] <https://echo.nagoya/>
[E-Mail] toyo@echo.nagoya

I S D N 2 7 8 - 4 - 5 3 2 2 1 7 - 0 1 - 0 C 0 1 9 3

echo
こだま文庫